



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	フェス観測会2016報告書
Author(s)	山崎, 翔
Issue Date	2017-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65492
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/2.1/jp/
Type	report
File Information	esobs2016.pdf, 本文



フェス観測会 2016 報告書

目 次

観測会前夜

1. ワークショップ開催の背景・目的.....	2
2. フェス観測会 2016 前史.....	4
3. フェス観測会 2016 開催概要.....	9

観測会初日(10/29)

4. フェス観測会 2016 の概要説明.....	15
5. 参加者自己紹介.....	16
6. 「ライジングサンロックフェスティバルのローカリティー18 年の軌跡を通して」.....	19
6-1 基調講演.....	19
6-2 ライジングサンロックフェスティバルー問一答.....	22
6-3 フロアとの応答.....	25
7. 問題共有.....	31
7-1 「日本におけるロックの歴史と社会」.....	31
7-2 「日本のフェス参加者の動向」.....	33
7-3 「世界のローカルフェスについて」.....	34
8. ワークショップ ROUND1 「ロックフェスが創造してきたローカリティー現代フェス 20 年を辿って」.....	35
9. 懇親会.....	43
9-1 LIVE & アーティストから見たフェスについて.....	43
9-2 羊蹄とフェス～羊蹄山麓を舞台とした仮想フェス構想～.....	45

観測会 2 日目(10/30)

10. ワークショップ ROUND2 「ローカルフェスマッピング」.....	48
10-1 ワークショップ ROUND1 の振り返り.....	48
10-2 ローカルフェスマッピング.....	49
11. 総括.....	58

今後の展開に向けて

12. フェス観測会 2016 を終えて.....	63
---------------------------	----

付録：フェスアーカイブ

【フェス観測会の由来】

フェスの革新性の一つは、従来のコンサートにおける受動的な「観客」から、共にイベントを創る主体的な「参加者」への道を切り開いたことにあります。フェスを調査分析するにあたっては、私達は敢えて再び「観客」となり、フェスを外側から「観る」視点が重要であると考えています。また、フェスが私達の予測できないかたちで、全国各地に広まる様子を、気象や天体になぞらえて「フェス観測会」としました。

The background features a light grey, angular geometric shape, possibly a stylized building or a section of a sphere, set against a white background. Overlaid on this are several intricate, blue, wavy line patterns that resemble topographical contour lines or fluid motion paths. These lines are dense and create a sense of depth and movement.

観測会前夜

1. ワークショップ開催の背景・目的

1-1 流動的な現代の祝祭「ロックフェス」

現代社会では、物理的・情報環境的に移動が容易となり、私達は様々な時間や場所・属性を行き交うことが可能となりました。この時代に全国的な広がりを見せたのが「ロックフェスティバル」（以下、ロックフェス）です。1997年に開始された「フジロックフェスティバル」（以下、フジロック）は従来主流であったコンサート・ライブとは、その音楽体験において大きく異なっています。

従来のコンサート・ライブでは、私達は単独のアーティストによる、予め決められたプログラムの枠の中で音楽を聴くことが一般的でした。それに対して、フジロックでは、苗場スキー場（新潟県湯沢町）の広大な敷地の中に10箇所以上の複数ステージが点在し、それぞれのプログラムが同時進行で展開されます。また、会場には音楽以外の様々なコンテンツやキャンプエリアが設置されており、特定のステージに必ずしも集中する必要はありません。ロックフェスにおいては、複数ステージ間を個人の好きなタイミングで移動し、会場内の様々なコンテンツの体験、参加者同士の交流を楽しむ光景が多くみられます。それは、コンサートやライブにおける「観客」と対置され、「参加者」と呼ばれます。

ロックフェス参加者は、会場内において複数の場面や関係性を断片的に経験しながら自らのアイデンティティを複合的に構築する、あるいは特定のアイデンティティに収斂しないことを志向しているように思われます。この点に関して、フェス研究者の永井純一は「重層化した出来事に対処し、同時進行する人間関係をマネジメントすることは、現実世界となんらかわがらない」と指摘します¹。ここにロックフェスが全国各地に広まり、「フェス」の言説自体が世の中に浸透した大きな理由があると考えられます。つまり、従来の祭りが特定の地域やコミュニティへの愛着を醸成するものならば、フェスは複数の世界にまたがって生きる私達を祝う現代の祭りであるといえるのです。

1-2 新たな展開としての「ローカルフェス」の台頭

2000年代後半、特に2010年代に入ってから、「ローカルフェス」が全国各地で急増しています。その規模は数百人から数千人規模まで様々です。ローカルフェス主催者（organizer）の多くは、フジロックをはじめとした2000年代前半のロックフェス「参加者」としての経験を持っています。

「ロックフェス」最大の特徴が複数ステージ同時進行にあるならば、「ローカルフェス」は、必ずしもその条件を満たしてはおらず、ワンステージのフェスも少なくありません。また、複数ステージであっても、会場全体の広さはフジロックのメインステージにも満たない場合がほとんどです。そのため、フジロックにおける複数の音楽や関係性に出会うダイナミックな体験は、ローカルフェスでは物理的に再現することが困難だと言えます。

つまり、ローカルフェスは、ロックフェスがその祖型にあるのは間違いありませんが、

¹ 永井純一（2016）『ロックフェスの社会学—個人化社会における祝祭をめぐる』ミネルヴァ書房

会場の機能や参加者の経験の質に関して、それと同一のものとして語るには無理があります。しかし、日本のフェス研究においては、管見の限り、ほとんどがフジロックでの体験を念頭に置いた議論が展開されてきました。ロックフェスが、個人が複数の場に属することを強化、あるいは特定の場に属すること自体を拒否し、流動的に生きることを促す作用があるとしたら、「ローカルフェス」は文字通り、その流動化を堰き止める方向を指し示す現象として注目に値します。

1-3 フェス観測会 2016 の狙い・目的

上記の社会的背景を踏まえ、日本各地のローカルフェス主催者同士が対話を行うワークショップ「フェス観測会 2016」（以下、観測会）を企画しました。観測会で焦点を当てたのは、「主催者」と「ローカルフェス」です。ローカルフェス主催者の多くは、フジロック等の 1999 年代後半～2000 年代前半に勃興した日本のロックフェス「参加者」としての経験を持っています。この「参加者」から「主催者」への図式が成立するならば、フェス参加者は、ただ単に、現実世界の流動化の中で、フェスに参加し続けることで自己を維持する存在に留まらず、特定の地域や人間関係にはたらきかける存在でもあります。このような従来のフェス参加者像を更新するような姿が、ローカルフェス主催者に着目することで見えてくる可能性があります。

また、観測会参加者の条件として、①主催者が開催地域在住・もしくは出身、②継続開催を念頭に置いたフェス、③地域社会のスケールに収まる開催規模である点に拘りました。参加フェスによって、開催年数に違いはありますが、ほとんどのフェスが特定の地域で継続的に開催し続けることを念頭に活動しています。

ローカルフェス及びその主催者への着目は、ロックフェス研究に新たな視座をもたらすだけでなく、特定の場所やコミュニティの在り方が問われる現代の地域社会を考えることにもつながります。また、本ワークショップではローカルフェスの「主催者（organizer）」に焦点を当てることで、彼らを地域社会の新たな担い手として位置づけることも意図しています。

1-4 本報告書について

本報告書は、「フェス観測会 2016」開催に至った経緯と、その開催記録をまとめたものです。本報告書の一義的な目的は、筆者の今後のフェス研究の一助とすることにあります。フェスの現場関係者やまち・ひとづくりに携わる団体・自治体等が参考となる知見の提供、国内におけるフェス研究の発展・議論の拡大を目論んだものでもあります。

具体的には、なぜフェス主催者に着目をして、主催者同士が集まるワークショップを開催するに至ったのか、そもそもなぜフェス研究を志したのか、といった筆者の考えと実践のプロセスを明らかにすること（①フェス研究の発展）、また、フェスを一過性の消費イベントではなく、歴史性を有した文化として捉える一つの契機とすること（②フェス文化の

発展)を意図しています、

最後に、本ワークショップはあくまで筆者の研究の一環として企画したのですが、後述するように、ワークショップ自体が、一つの「フェスティバル」「出来事」として様々な効果をもたらしました。それは予想外の出来事でしたが、その意味合いからも、本ワークショップの開催から開催後も含めた具体的な出来事についても詳述しています。

2. フェス観測会 2016 前史

本章では、フェス観測会 2016 の着想・開催に至るまでの経緯について、筆者の経験も交えながら説明します。

2-1 参加者から主催者への着目 (2013~2014 年)

観測会を開催するきっかけは、筆者のフェス参加者から主催者への研究対象のシフトです。筆者は大学院修士課程で、「場所の経験としてのツーリズムに関する研究〜若い世代の音楽フェスティバルでの体験を事例として〜」(2010 年)と題した修士論文を執筆しました。本論文は、日本全国の「ファスト風土化」が叫ばれている中で、フェスは開催地域とどのような関係性を持っているのか、会場内のキャンプシェア等を通じて生まれた参加者同士の緩やかなコミュニティは、フェス終了後も継続することが可能なのか、といった点を主にフェス参加者のインタビューから明らかにするものでした。

転機となったのは、2013 年 6 月に東京新宿の初台で開催された「廃病院パーティー」²への参加です。当初の目的は参加者へのアンケート調査でしたが、人手が足りないという事情で、スタッフとして受付を担当することになったのです。前述のように、フェスでは複数ステージが同時進行し、特定のプログラムはありません。当時、研究を離れた一個人としては、そのようなフェスのタイムテーブルには馴染めずにいました。特定のアーティストが目的のコンサート・ライブに通い続けていた筆者にとって、フェスでは時間を持て余してしまい、会場に居続けることに苦痛を感じていました。

しかし、当然のことですが、フェスのスタッフとなればその場から離れることはできません。多くの DIY フェスがそうであるように、フェスの運営側は人員も限られる中、柔軟性を持って、その場で起こる想定外の事態に対処しなければなりません。廃病院パーティーでは厳密に決められたマニュアルはなく、目の回るような忙しさで来場者の対応を行っていました。しかし、その反面、途中で持ち場を脱け出して、ステージを見たり、お酒を飲んでスタッフと談笑することもできました。そもそも主催者自らが出演する企画が組み込まれていたり、主催者が会場を自由に動き回っているため、スタッフが探し回ることも度々ありました。しかし、そのようなある種の不真面目さがよい方向に作用しており、自分の持ち場以外でも気づいたら誰かが対処する、といった意識がスタッフ間に浸透してい

² 2013~2014 年に新宿の初台で開催された音楽イベント。フェス観測会 2016 にも参加しているきたはらふひとが主催。廃病院を舞台に音楽ライブ以外にも映画上映、落語会、授業、お化け屋敷等、様々なコンテンツが盛り込まれている。

ました。そもそもスタッフ全員の事前ミーティングが1、2回しか開催されず、当日のみの参加も多い中で、筆者には奇跡的と思えるほど大きなトラブルもなくフェスは進行していききました。しかもスタッフはすべてボランティアで成り立っています。

このとき、スタッフとしての「役割」を与えられつつも、柔軟に会場を動き回ること、フェス会場に居続けることができました。また、その会場内には常に生の音楽が流れていることで、忙しい受付の仕事も心地よく感じられました。

この廃病院パーティーでの経験から、フェス主催者及びスタッフは、特定の場所やコミュニティへの帰属を考える上で、重要な存在であると考えようになりました。彼らのふるまいは従来の地域社会の成員におけるそれとは異なり、それぞれがバラバラの属性を持ちながらも、一つの場としてまとまっているように思えたのです。このときの経験を基に、2013年12月の「廃病院パーティーVol.2」では、同イベント主催者であるきたはらさんの提案で「フェス主催者公開対談」をフェス内の一企画として実施させていただき、「りんご音楽祭」（長野松本・2009～）の古川陽介さん、「みんなの戦艦」（東京・2006～）の奥村祥人さん、きたはらさんの3名による対談が実現しました。対談では、主催者がフェスを一過性のイベントとは異なり、長期的な展望を持って主催していることが分かり、後述するフェスワークショップ開催への大きな契機となりました。

2-2 フェスワークショップの開催（2015年3月）

2015年3月に東京の目黒でフェス主催者を中心とした「フェスワークショップ」を開催しました。本ワークショップは「参加者」から「主催者」への流れ、フェス主催者が全国で同時多発的に誕生していることを実証することを目的に開催しました。

フェスワークショップ「フェスのふるまいは社会を変える？」

日時・場所：2015年3月22日@東京都目黒「GOBLIN.」

企画：フェス観測所

主催・実施：北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院

参加メンバー（元運営スタッフも含む）：

つくばロックフェス（茨城）／廃病院パーティー（東京）／Walkin' Media "ennas"（東京）／月見ル君想フ（東京・台北）／GUNMA ROCK FESTIVAL（群馬）／木曽鼓動（長野）／見放題（大阪）／hoshioto（岡山）／フェス上級者／コピルアクレープ（フェス出店）

ファシリテーター：上井雄太氏（フューチャーセッションズ）

ゲストアーティスト：HAPPLE

「フェスのふるまいは社会を変える？」と題し、フェス参加者としてのふるまいの特徴や、主催者への転機、フェスをつくる際のこだわりについて、ワークショップ参加者同士で対話をしてもらいました。

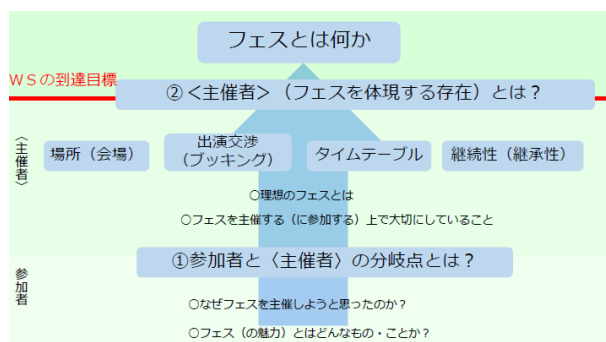
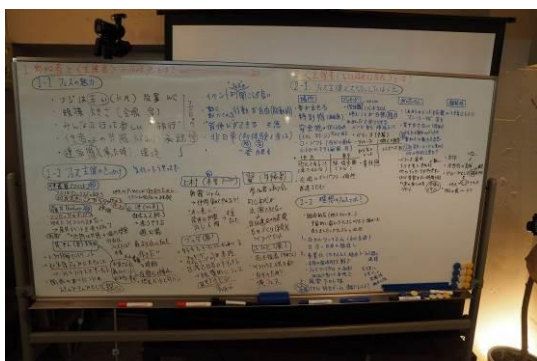
ワークショップでは、フェス参加者・主催者の視点の双方からフェスについて考えました。主催者の視点では、「場所（会場）」、「出演交渉（ブッキング）」、「タイムテーブル」、「継続性（継承性）」の観点から、フェスを主催するうえで大切にしていることを明らかにして

いきました。

フェスへの参加・主催いずれにおいても「自由であること」が共通のキーワードとして浮かび上がってきた一方で、主催者が独自のタイムテーブルをつくることへの「強い」こだわりも出てきました。筆者がフェスを通じて感じた「緩やかさ」「不真面目さ」は、一見その真逆にあるような「強い意志」によって成立していることを感じました。また、そのような主催者の強い意志によって成立・継続しているフェスの実情について、より全国的な規模で明らかにしたいと考えるようになりました。

ワークショップ参加者が初めて参加したフェス
(フェス主催者のみ)

1999年	RISING SUN ROCK FESTIVAL
2001年	ROCK IN JAPAN FESTIVAL
2001年	瀬戸 STOCK2 サウンドマリーナ
2002年	ROCK IN JAPAN FESTIVAL
2004年	高崎野外音楽祭
2005年	朝霧 JAM
2006年	FUJI ROCK FESTIVAL



2-3 ローカルフェス主催者への着目

フェスワークショップを踏まえて、全国のフェス主催者を星座のようにつなぎ、「面」として把握したいと考え、「フェス観測会 2016」の着想に至りました。

観測会は「ローカルフェス」であることに拘り、①主催者が開催地域在住・もしくは出身、②継続開催を念頭に置いたフェス、③地域社会のスケールに収まる開催規模の主催者の方に集まってもらいたいと考えました。理由は、現代社会における特定の場所やコミュニティに帰属することの意味を考える上で、上記の条件を満たすフェスへの着目が重要であると考えたからです。

2-4 開催に向けた準備

2-4-1 会場選定

ワークショップ会場との出会いが、観測会開催を決意する大きな決め手となりました。会場となった「hirafu188」は北海道倶知安町にあり、冬の時期は多くの外国人で賑わうニセコエリアの中心地「ひらふ坂」の中腹に位置しています。

北海道では後述するように 1999 年から「RISING SUN ROCK FESTIVAL」（以下、ライジング）が開催されています。また、国際色豊かな北海道ニセコで開催することにより、アイヌから和人、現代人に至るまで人類史的な祝祭文化研究の足掛りになるのではないか、という長期的な構想も浮かんできました。



ワークショップ会場の「hirafu188」

会場となったビルの最上階にあるイベントスペースからは「蝦夷富士」とも呼ばれる「羊蹄山」を一望できる絶景が眼前に広がります。フェスについて考えるワークショップであるならば、会議室や大学構内ではなく、「フェスの想像力が沸き立つ場所」、「フェスを開催したくなるロケーション」と考えていたので、まさにフェスを考えるにふさわしい場所であると思いました。また、観測会を開催する 10 月は観光閑散期であったため、立地としてはフェスの雰囲気近くに、なおかつ議論する環境としては静寂が保たれていることも決め手となりました。

2-4-2 参加者の選定

参加者は、なるべく全国各地のフェスを網羅することを意識しつつ、開催地域との関わりが深いと思われるフェス主催者の方にお声掛けをしました。フェス主催者がブッキングで心がけているように、筆者もなるべくフェス主催者のフェスに参加し、実際に主催者の住む地域に足を運び、企画の意図を丁寧に説明しました。全てのフェスを回りきることはできませんでしたが、2016 年 5 月から、香川、岡山、富山、山形、福岡、対馬とフェス主催者の方を訪ね歩きました。

また、より多様な観点からローカルフェスの姿を立体的に捉えるために、フェス研究者やフェスメディア、アーティスト等、主催者以外の方にも参加を呼びかけました。結果的にはスタッフも含めて、総勢約 40 名での開催となりました。

2-4-3 プログラムの検討

プログラムの検討にあたっては、「ロックフェス参加者」から「ローカルフェス主催者」の台頭という流れを可視化し、筆者の仮説を検証することを意識しました。そこで、ライジングの企画運営をしている㈱ウエスの代表取締役社長小島紳次郎さんに基調講演をお願い

いしました。ライジングは現在のフェスの流れをつくった日本の四大フェスの一つです。

ライジングの18年間の継続的な開催を通じて、「観客」がいかにして「参加者」となり、ローカルフェスを「主催」するに至ったか、その系譜を辿るような流れとしました。また、ワークショップ前には、フェス研究者やフェスメディアからの発表を行い、フェス主催者にフェスの客観的な視点をインプットしてもらうことを意識しました。

このようなストーリーのもと、ローカルフェス主催者同士のワークショップを2日間に渡って実施しました。フェスは、多様な属性の人が流動的に動き続ける時空間ですが、観測会では、同じメンバーで一つの空間を2日間共有するというフェスとは異なる設定とし、フェスを外側から客観視することを意識しました。その一方で、ライブやフードの出店等、フェスに準じたコンテンツも盛り込みました。

2-4-4 スタッフ

スタッフは2015年のフェスワークショップに参加したフェス主催者やフェス参加者等から構成される「フェス観測所」と呼ばれる実行委員で構成しました。メンバーでもあるフェス主催者との議論が、参加者の選定やプログラムの検討において、非常に参考になりました。また、開催地であるニセコのまちづくり関係者、ワークショップデザインの専門家、筆者の所属する北海道大学の学生にも協力を仰ぎました。

2-4-5 予算

本企画は、「公益財団法人 トヨタ財団」の2015年度個人研究助成プログラム「社会の新たな価値の創出をめざして」に採択され、実現しました。本助成は、全国のフェス主催者へのインタビューや開催費用の一部に充当しました。費用が足りない部分は、北海道の地域活性化に特化したクラウドファンディング「ACT NOW」に挑戦し、資金を募りました。

資金が足りない部分は、フェス主催者に一部自己負担をお願いしました。本企画の趣旨に賛同いただき、本条件を快く受け入れていただいた主催者が集まったことで、フェスについて積極的に語る場が創出されたと思っています。

3. フェス観測会 2016 開催概要

3-1 開催プログラム概要

タイトル：「フェス観測会 2016」

主催・企画：フェス観測所

日時：2016 年 10 月 29 日（土）・30 日（日）

会場：hirafu188（北海道虻田郡倶知安町字山田 188-9）

助成：公益財団法人トヨタ財団 研究助成プログラム

「社会の新たな価値の創出をめざして」

（企画タイトル）

「現代の祝祭性をマネジメントする—音楽フェスティバルの主催者同士の対話を通じて—」

プログラム

（※28 日（日）ニセコエリアの視察・倶知安市街地で懇親会）

29 日（土）

10:00～11:00 本プロジェクト・ワークショップの趣旨説明

11:00～12:00 基調講演「ライジングサンロックフェスティバルのローカリティー—18 年の軌跡を通して」（株式会社ウエス代表取締役 小島紳次郎）

13:00～13:40 問題共有

「日本におけるロックの歴史と社会」（武蔵大学教授 南田勝也）

「日本のフェス参加者の動向」（神戸山手大学専任講師 永井純一）

「世界のローカルフェスについて」（Festival Life、Festival Junkie 津田昌太郎）

14:00～17:30 ワークショップ ROUND1

「ロックフェスが創造してきたローカリティー—現代フェス 20 年を辿って」

（18:00～21:30 懇親会）

18:30～19:30 LIVE&アーティストからみたフェスについて（成山剛（sleepy.ab））

20:00～21:30 羊蹄とフェス～羊蹄山麓を舞台とした仮想フェス構想～

30 日（日）

9:00～12:00 ワークショップ ROUND2「ローカルフェスマッピング」

総括

3-2 フェス主催者プロフィール

(※プロフィールは 2016 年 10 月時点のものです。)

OTO TO TABI (札幌・2011～)



OTO TO TABI は札幌市で 2011 年から毎年開催されている「ただの音楽好きが集まって作った音楽フェス」。市内のライブハウスや芸術の森等、開催場所は変わりながら、趣向を凝らした会場デザインやローカルを意識したラインナップ等により「札幌の冬フェス」として定着しつつある。また、北海道に関連するクリエイターの作品を扱ったオンラインショップ「とひとひと」を運営している。

船山裕紀 (ぼくらの文楽・山形長井・2011～)



2011 年から山形県長井市西根地区で開催されている「ぼくらの文楽」を主催。2012 年に西根地区へ移住。同フェスは、西根地区公民館が事務局・会場となることで、「地域のお祭り」として認識され、子どもからお年寄りまで多くの地域住民が参加している。フェスはライブ・講義・ワークショップを軸にした内容が特徴。普段はフリーフォトグラファーとして活動。バンド「SHIFT」のメンバーでもあり、過去には山形の伝説的 DIY ロックフェス「DO IT-YAMAGATA MUSIC FES」にも携わる。

鍵水大輔 (蔵王龍岩祭・山形蔵王・2006～)



山形市出身・在住。高校時代にハードコアムーブメントの影響で音楽に触れる。舞台屋として地元山形で音響を手掛け、現在は独立しヘラジカサウンドとして活動中。山形県の蔵王温泉スキー場で行われる入場無料の音楽祭

「蔵王龍岩祭 (ZAO DRAGON ROCK FESTIVAL)」実行委員長。龍岩祭は 2006 年にスタートし、入場無料で「アーティストや関係者、観客の垣根を取り払う」ことがコンセプト。山形市や蔵王温泉街の若者がスタッフとしてフェスを支えている。

小此木翼 (Walkin' Media “ennas” ・東京・2013～)



「Walkin' Media “ennas”」は「縁が繋がり、円と成り宴と成す」をテーマに掲げ、多角的に『en』をクリエイトする、縁のクリエイティヴ集団。メンバーが日々の生活で出会ったモノ・ヒト・コトを世に広め、縁を繋げていく活動の一環としてフェスを開催。これまでに「温泉祭」(2013 年)、「学縁祭」(2014 年)、「縁日祭」(2015 年)と題し、温泉施設や廃校を舞台に開催している。下北沢出身・在住で地域活動やボランティア活動にも奮闘中。

田村いっぺい (freeShelter ・静岡・2011～)



毎年 7 月、静岡県富士宮市の「ハートランド朝霧」で開催される野外音楽フェス「Free Shelter」を共同主催。富士市出身・在住。アウトドア・旅・音楽・料理・まちづくりなど幅広い興味をベースに富士山周辺を飛び回りながら活動。東海道の宿場町「吉原宿」として栄えた吉原商店街にある、廃ビルをリノベーションした「MARUICHI BLDG.1962」にて運営マネージャーを務めながら、同ビルに自身の飲食店、OLD PIZZA HOUSE bird を持つ。その他、シェアハウスの運営や、ローカルキャンプのガイドなどに携わる。

高橋淳 (乙事キャンプ ・長野八ヶ岳 ・2001～)



長野県諏訪郡在住・出身。オーガナイザー、ギタリスト、木こり。「繋がり」と「調和」をテーマにした「乙事キャンプ」を八ヶ岳の麓、長野県富士見町で 2001 年より開催。「みんながスタッフであり、ゲストである」ことを理念とし、八ヶ岳周辺の繋がりを創出している。同フェスを主催する集団「The Power of Friends(P.O.F)」では、多彩なジャンルが混在・共存する山の市場「Souq Souq(スークスーク)」も展開している。16 年の経験が生かされ、最近では地域イベントのプロデュースも数多く手がけている。

大原智 (ITAMI GREENJAM ・伊丹 ・2014～)



伊丹市出身・在住。音楽事務所 music&culture neonM 代表／一般社団法人 GREENJAM 代表理事。2014 年より地元である伊丹市の昆陽池で開催されるフリーフェス「ITAMI GREEN JAM」を主催。「若者が作る伊丹全体活性化イベント」「地元若手クリエイターの創造性を活用した地元貢献」をコンセプトに、世代間・地域間・未来への繋がりを意識したフェスを開催している

波多信治（廃校グルーヴ・香川塩江・2015～）



香川県高松市塩江町（2005 年高松市に合併）で開催されている「廃校グルーヴ」実行委員会代表。香川県高松市出身。30 歳手前で U ターンをして、音楽レーベル「Naoshima Records」の立ち上げや直島でのカフェ開業、ウェブマガジン「しまのこと」、高松市の高松常盤町商店街での活動等、瀬戸内海の島々や高松市に根ざした活動を展開。2015 年、高松の奥座敷と言われる「塩江温泉郷」で、廃校エリアから新しい世代間交流によって新しいグルーヴを生み出そうという思いから、同フェスを開始。

藤井裕士（hoshioto・岡山井原・2012～）



岡山県井原市美星町のフェス「hoshioto」実行委員会代表。岡山県井原市出身・在住。はじめて参加したフェスは第一回目の 1999 年「ライジングサンロックフェスティバル」。その後、「フジロックフェスティバル」に参加。その魅力にはまり、毎年通い続けるようになる。「いつか地元でもフェスを」という思いを抱くようになり、2012 年、星空が綺麗なまちとして知られる地元井原市美星町で「hoshioto」を開催。コンセプトは「星と音が交わるあの場所へ」。今年 5 周年を迎えた。hoshioto 以外にも「JOKAFES」「machioto」「oto note」などのイベントを主催している。

小宮大輔（TSUSHIMA BORDER ISLAND FES・長崎対馬・2016～）



2016 年 10 月に長崎県対馬で新たにスタートした「TSUSHIMA BORDER ISLAND FES」共同実行委員長。福岡県在住・対馬市出身。同フェスを通じて、対馬の魅力発信、日韓の国境を超えた交流の場の創出を目指している。対馬のローカル WEB メディア「ツシマト」、ライブイベント「ロックの夜明け」、DJ イベント「suitoto（スイトート）」、音楽レーベル「カドデ」、福岡の会社「ウミーベ株式会社」での釣り系アプリの開発マネジメント等、ローカルに根ざした活動を行っている。

3-3 ワークショップ参加者一覧

【フェス主催者】

- ・小島紳次郎 (RISING SUN ROCK FESTIVAL)
- ・星石二郎・川畑拓也・南紹子 (OTO TO TABI)
- ・船山裕紀 (ぼくらの文楽)
- ・鎌水大輔 (蔵王龍岩祭)
- ・小此木翼 (Walkin' Media "ennas") ※スタッフ兼任
- ・田村いっぺい (free shelter)
- ・高橋淳 (乙事キャンプ)
- ・大原智 (ITAMI GREENJAM)
- ・波多信治 (廃校グルーブ)
- ・藤井裕士 (hoshioto) ※スタッフ兼任
- ・小宮大輔 (TSUSHIMA BORDER ISLAND FES)

【研究者】

- ・南田勝也 (武蔵大学教授)
- ・永井純一 (神戸山手大学専任講師)

【ゲストスピーカー】

- ・津田昌太郎 (Festival Life、Festival Junkie)
- ・寺尾ブッタ (ライブハウス「月見ル君想フ」)
- ・ふくだたくま (はこだて国際民俗芸術祭)

【ゲストアーティスト】

- ・成山剛 (sleepy.ab)

【Web・デザイン】

- ・吉田知也 (STUDIO RICE)

【一般参加者】

- ・北村心平 (武蔵大学大学院
人文科学研究科博士前期課程)
- ・金野和磨 (Gerbera Music Agency合同会社 代表)
- ・工藤薫 (ライブハウス「月見ル君想フ」スタッフ)
- ・滝沢光 (Peatix コミュニティマネージャー)
- ・寺崎陽子 (公益財団法人トヨタ財団)
- ・中村洸太 (一橋大学大学院社会学研究科修士課程)
- ・山添南海子 (日本大学大学院芸術学研究科
芸術専攻博士後期課程)
- ・山本和範 (TSUTAYA俱知安店 店長)

【出店】

- ・ニセコビール
(クラフトビール・ニセコ町)
- ・ミートショップあんぼ
(ジギスカン・京極町)
- ・木ニセコ 杏ダイニング
(朝食・倶知安町)

【当日参加以外の

観測会アドバイザー・スタッフ】

- ・尾野諒介 (北海道大学工学部、
Nire Rock Festival スタッフ)
- ・齊藤拓男 ((株)道新デジタルメディア)
- ・難波美帆 (グロービス経営大学院)

【ワークショップデザインサポート】

- ・須子善彦 (ビジネス・ブレークスルー大学 准教授)
- ・西尾直樹 (北海道大学高等教育推進機構
科学技術コミュニケーション教育研究部門
(COSTEP) 特任助教)

【スタッフ】

- ・山崎翔 (北海道大学大学院国際広報メディア・
観光学院観光創造専攻博士後期課程)
- ・きたはらふひと (ニュースマガジン「UROROS」代表、
廃病院パーティー院長)
- ・安食郁恵
- ・大迫理沙 (hirafu188)
- ・聖未知矢 (ニセコ町地域おこし協力隊)
- ・若林智世

(※所属等は2016年10月時点)

観測会初日(10/29)

本ページ以降は、観測会のプログラムに沿って開催結果を紹介します。

4. フェス観測会 2016 の概要説明

観測会を始めるにあたって、筆者よりワークショップの目的・達成したいことについて説明を行いました。



【説明要旨】

ワークショップで達成したいこと

- ・ローカルフェス主催者同士の対話から「なぜ私たちはフェスを主催（オーガナイズ）するのか、フェスを継続・継承するのか？」を明らかにすること。

フェスとはなにか？

- ・情報・物理環境的に移動が容易になった現代社会を生きる私たちは、様々な時間や場所・属性を行き交う柔軟性を持ち合わせている。この時代を象徴する文化が“フェス”ではないか。従来の祭りが特定の地域やコミュニティへの愛着を醸成するものならば、フェスは複数の世界にまたがって生きる私達を祝う現代の祭りだといえる。

フェス参加者の時代（1997-2010）

- ・フェス「参加者」は、従来のコンサート・ライブの「観客」とは異なり、場を共に創る能動的・主体的な存在として注目された。複数ステージが同時進行し、どこにいても音楽が聞こえるフェスの環境が参加者同士のコミュニケーションを前景化させ、「フジロッカーズ」と呼ばれるコミュニティの創出やフェスの継続性を可能にした。
⇒複数の場所や関係性に帰属する「フェス参加者」という存在自体がフェス文化の核ではないか。

フェス主催者の時代（2010-現在）

- ・2010年代に入り、フェス参加者が自らの地元でフェスを開催するケースが全国で同時多発的に生じている。フェス参加者が主催者となるプロセスとは、フェスの内側に参加することに留まらず、フェスの外側にある地域社会との関係性が生じるプロセスでもある。

ローカルフェスの台頭は何を意味するのか。

- ・「地域社会の衰退」という一面的な見方から、若い世代のシェア文化や地方移住への関心が高まり、新たな地域社会像が模索される中で、ローカルフェスを開催すること、継続することはどのような社会的機能を果たしているのだろうか。
⇒全国のローカルフェス主催者同士の対話から、フェスを開催し・継続するプロセスを明らかにし、ローカルフェスと従来の地域社会との関係性について考えてみたい。

ワークショップの内容

- 「ロックフェスが創造してきたローカリティー現代フェス 20 年を辿って」
- ・ワークショップの目的は、全国のフェス主催者が実践してきた「ローカリティ」（固有性）に関する取組を、対話の中から抽出・再構成し、現代の祝祭（フェス）が創出するローカリティの共通性と差異を明らかにすること。
- ・そのプロセスを通じて、従来の地縁・血縁・社縁的なローカリティや、国や行政が主導する地方創生的なローカリティとフェスがどのように重なり合い・ずれながら、地域社会が成り立っているのかを考えてみたい。

ワークショップにおける二つの論点

①ロック（対抗文化、サブカルチャー、オルタナティブ）への意識

⇒ロックフェスとフェスの違いを意識しているのか。

②フェス（お祭り、地域、場所性）への意識

⇒何を目的にロックフェスを継続するのか。

5. 参加者自己紹介

ワークショップ参加者に「フェスの目的・フェスへの思い」、「フェス観測会参加理由」をテーマに自己紹介をしてもらいました。ここではフェス主催者の発言を一部抜粋して記載しますが、当日は参加者全員が自己紹介を行いました。

小宮大輔：「TSUHIMA BORDER ISLAND FES」というフェスを今年から開催しています。

僕の地元である長崎県対馬という離島は、日韓国境の島で、韓国というとネガティブなニュースが結構全国に流れていると思うのですが、実際は対馬の僕ら世代（10代～30代）の中では日韓の仲がよかったです。しかし、そのようなニュースが全国に流れません。また、対馬自体を知らない方が結構多いので、対馬のポジティブなニュースとして、日韓交流や対馬の魅力を全国に発信したいと思って、フェスを立ち上げました。全国の様々なフェスを主催している方の話を聞く機会は今までなかったので、今回いろいろな話を聞いて、勉強したいと思っています。

鍵水大輔：山形の蔵王から来ました。山形で「蔵王龍岩祭」という入場無料のフェスを開催しています。山形の蔵王温泉は、スキー場で温泉もあり、昔はすごく盛り上がっていた場所なんですけど、スキー文化の衰退に伴い、まちが次にどういう方向に向かっていいかという状況があり、山形市内にいるメンバーとその思いが合致して始めました。フェス観測会に関しては山崎君が、龍岩祭開催2日前ぐらいに電話したら遊びに来てくれたので、僕も約束を果たさなければと思い、参加しました。同じ思いを持ってオーガナイズする人がたくさん集まっていることは、すごく興味深いし、いろんな方と仲良くなりたいと思っています。

星石二郎：北海道で「OTO TO TABI」を主催しています。元々は北海道が世界からいろいろな人が集まって面白いものが生まれるような土地になれば、その一助にしたいとの思いから主催しました。直近の目標としては赤字からの脱却と黒字化です。

南紹子：私達は全員素人というか、違う仕事を持ちながら、誰も音楽関係の仕事には就いてなくて、いろいろとノウハウもない状況でずっとやっています。今回

いろんな全国の方にお会いできて、それ（音楽関係）で食べている方もいるのかなと思うのですが、お話をいろいろ伺えるのを楽しみにして来ました。

川畑拓也：個人的なフェスの目的を話すと、自分の身近に楽しいことが一つでも増えればいいなという気持ちでフェスを運営しています。北海道にもフェスとかイベントをやっている人がいろいろいるんですけど、全国の人の話を聞く機会があまりないので、この機会にいろいろ相談できればいいなと思っています。

藤井裕士：岡山から来ました。「hoshioto」というイベントをやっています。自分自身が一番最初に行ったのは 1999 年のライジングサンロックフェスティバルです。そのあとフジロックなどに参加して憧れを持ちました。僕のまちは田舎で、田舎でフジロックやライジングの思いを体感できたらいいなと思ってやっています。あとは面白いことをやりたいというのが一番だと思います。昨年の山崎さん主催のワークショップに呼んでいただき、そこからもっと面白いことやったほうがいいのではとふっかけた一人でもあるので、今回フェス観測所のメンバーとしても参加させてもらっています。本当に人と人とがつながることはすごく大事なことだと思いますので、今後ともみなさんよろしくお願いします。

田村いっぺい：静岡県の富士市から来ました。「FreeShelter」という野外イベントをやっています。元々僕の住んでいる、富士・富士宮エリアには朝霧 JAM があって、音楽が好きな人が多いと言われていましたが、いろいろなところに行ってみると、すごく小さな排他的な世界で、ジャンルや音楽シーンによる分断があると感じました。それを混ぜるのが正解かどうかは別として、地元で音楽をやっている人はみんな音楽好きなんだから混ぜようよ、というのが元々のきっかけではあります。現在 6 年目で、ありがたいことに来る人も増え、コンセプトや見ていく方向を変えようかなと思っていた時期なので、このようなきっかけがあつてすごく楽しみにしています。

大原智：兵庫県の伊丹市から来ました。無料野外音楽フェス「ITAMI GREEN JAM」を 2014 年からやっています。地元には（ミュージシャンではないが）若いアーティスト、イラストレーター、映像クリエイターなど、いろいろな子達があります。現在、地域創生と言われているように伊丹にもいろいろな課題がありますが、課題と社会、若いクリエイターの子達をつなげる場として機能すればと思い、開催しています。先日 ITAMI GREENJAM で生まれたコミュニティを使って、10 年間空いていた廃墟ビルを再生して GREENJAM のビルを作り、空きテナント活用を行いました。フェス主催者としてはまだ 3 年ぐらいの経験しかない

ので、いろんな方とお話しして、いいインプットをして地元を持って帰れたらと思っています。

波多信治：四国の香川県の高松からやってきました。「廃校グルーブ」というイベントをやっています。まだ1回しか開催してなくて、また、香川県は日本で一番小さな県でもあります。自分がやっているイベントは、今回の参加メンバーの中で一番規模が小さいと思いますが、それを拾っていただけたことがすごく嬉しかったです。今日は皆さんのいろんなところを吸収して持ち帰りたいと思っています。

小此木翼：「Walkin' Media “ennas”」という縁をクリエイトする団体をやっています。一応東京で主催していますが、皆さんと少し違うのが、私達は東京で地元を盛り上げる感覚は一切ありません。逆に東京で面白い事をやっている友人や知り合い、なかなか表現できないけど面白いことをつくっている人がたくさんいます。そのような人達を繋げる役目をしたいと思っていて、私の周りにはたくさんの面白い事をクリエイトしている人がいるのに、発信する場がないという感覚を持っていたので、それをみんなで繋げて音楽も絡めて、音楽以外のアーティストも世に発信できたらと思って主催しています。今年はいろいろな理由があって開催をお休みしたのですが、今回のワークショップのテーマにフェスの継続性・継承性があるので、皆さんが長年続けられてきたり、これから続けていきたい思いや方法論を勉強したいと思っています。

高橋淳：長野の八ヶ岳という山の界隈から来ました。「乙事キャンプ」をやっています。乙事キャンプは同級会から始めて、外でバーベキューをする、音楽を聴く、語り合う、こんな楽しいことには同級生だけでなく、来年からそれぞれの家族や友達を連れてきてもいいじゃないかということで、2001年から始めています。それが継続していき、どんどんつながりが広がっていきました。サブタイトルに「つながりと調和」とありますが、僕は元々思春期の頃から「よりよい社会に」ということが心の中にすごくあって、ずさんでいる部分が世の中には多分にあると思うので、そこを何とか打破していく方法論として自然にフェス、祭り、野外イベントに辿り着きました。10年目ぐらいに全国の人達とつながることで世の中がひっくり返るんじゃないかと思ってやり続けてきました。今回ここにきた理由はまさに地方でやっている人とつながって、ずさんだ世の中を一緒にひっくり返していければと思い、参加しました。

6.「ライジングサンロックフェスティバルのローカリティー18年の軌跡を通して」

株式会社ウエス代表取締役の小島紳次郎さんに、ライジングサンロックフェスティバルが18年間をかけて築き上げてきたもの、これまでのご自身の活動についてお話をいただきました。

6-1 基調講演

■これまでの音楽人生

ウエスという会社をやっています。僕自身はミュージシャンではなく、音痴だし、楽器一個も引けなくて、裏方ばかりをずっとやってきました。1970年代にラジオ局の番組制作やイベントをやってくれないかと言われる中で、1969年のウッドストックの映画を見て、自分は裏方を全てやろうと思い会社を始めました。



1970年代前半は電話があたり前ではない時代で、コミュニケーションすることはすごいことだと思い、今に至ります。ないものは自分たちで買っちゃえ、作っちゃえという精神がそこでできあがってしまいました。今はライブハウスの運営や番組制作、楽器のレンタル、別会社でウイークエンドというPA会社を持っています。それから、バイトさんがいないから人材派遣会社をつくっちゃえということで、ハンドクラップという会社もやっています。人が集まることはビジネスになるとずっと思っていて、今は札幌コンサドーレの会場運営等もやっています。他にもバスケットチーム「レバンガ北海道」の運営のお手伝いもしています。僕自身は好奇心ばかりで、フェスのいろいろな分析されて困ったなという思いです。

フジロックの日高さんも同世代で、1977～78年頃にグラストンベリー・フェスティバルに行って、これはすごいカルチャーだと思いました。こんなにも集まっちゃうのかと。ウッドストックも1969年にあの頃はポスター1枚、ロコミだけで全米から40万人以上が集まって目標も何もなくただミュージシャンが出るらしいよ、自由になれるよ、ラブ&ピースということで、それが当時の最先端でした。そこで日高君と話しながら、俺は英語喋れないから邦楽やるわ、という単純なところで、日高君は洋楽をやると。それがフジロックでした。

■ライジングサンロックフェスティバル前史

僕は「80's JAM OVER JAPAN」(1979年)とかの野外をやっていたんですけど、それはフェスというよりはオムニバスコンサートでした。他にも「HOKKAIDO ROCK CIRCUIT」(1987～1996年)では真駒内野外で25,000人を集めたりもしました。これは、10年程やってちょっと飽きたなということで、名前を変えて「WONDER ROCKET」(1997～1998年)というイベントをやりましたが、これもオムニバスイベントでした。その時期

に、日本のロックの流れが来ていたので、「GOOD STOCK」(1991～1994 年、1996～1997 年) というイベントを始めました。ライジングやる前に予行演習をずっとやっていたんです。

ライジングは 1999 年から初めて、音楽を中心に 40 年近くいろんなことをやってきて、これからもお客さんとクライアントと僕らで少しずついろんなことをやっていこうと思っています。ライジング 20 年目には、僕はもう 66 歳になります。好奇心とコミュニティでここまで来たと思います。今年からは「No Maps」というイベントも始めました。テキサスのオースティンで開催されている「SXSW (サウス・バイ・サウスウエスト)」というすごいイベントがありますが、日本ではほとんど知られていません。僕は 20 年くらい前から行っていて、これを何とか日本でやれないかと思っていました。「No Maps」は札幌市内のまちなかでフィルム、インタラクティブ、ミュージックのカテゴリーで新しい若手の人達を育てよう、海外に出していく、コンテンツを育てるという目的で今取り組んでいます。

■ライジングサンロックフェスティバルの 18 年（当時の映像を振り返りながら）

1999 年はステージが一つでした。ライジングはオールナイトで、最初の頃は、見様見真似でいろいろなところから情報を仕入れてやっていました。お客さんがこの頃はハイヒールで来ているような状態で、フェスが知られていなかった。夜になったら気温が 20 度を切ってしまうのに、野外に対応できずにいました。そこでお客さんが学習していきました。

今のお客さんは 6 割が女子です。ほとんどが女子 3 人に男子 1 人という構成で、男子は荷物やテントを運ぶ作業員に近い。翌年以降は T シャツ以外にもパーカーを作ったり、いろいろなことに取り組みながら、お客さんも僕らも学習していきました。アーティストのブッキングはある程度年齢が上のアーティストは僕がやっていますが、それ以外は若手がプロモーターと協力しながらやっています。

朝日が上がるまで演奏をやって、朝日が上がったなら演奏をストップ。その後は、皆さん 12 時まで寝ていてくださいという流れにしています。深夜の 2 時までしかお酒は売らず、あとは自己管理をお願いしています。「ないものは自分でやれ」、「Do it yourself」というと、お客さんも楽しんでくれます。そうやって工夫する力がぐんぐんついてきました。僕らがインフラとしてきっちりとやらないといけないのは、トイレぐらいであり過剰なサービスはしない。とにかく 48 時間どう楽しませるか、僕たちの会社のスタッフや外の人も入れて、みんなで作るフェスというのが基本です。

僕が最初からやったのは、アーティスト専用のレストランで、バックヤードに 150 坪の飲み食い放題のスペースを作りました。朝から晩まで全て違うメニューを出して、厨房も作った。ツイッターやホームページでのアーティストからの発信は、ものすごいものがあるので、それを利用する狙いもあったんです。今までのフェスは同じ所でご飯を食べることがなく、お弁当をもらってそのまま東京都内に帰るというケースがほとんどでした。ライジングでは、アーティスト同士のコミュニケーションがものすごくあって、友達になっ

で、「じゃあ一緒にセッションしませんか」、「アルバムつくりませんか」となる。コーラスと一緒にやりましょうよというのが、2002〜3年辺りから多くなり、UAのAJICOというバンドが翌年すぐにできて、アルバムもできました。その辺りからアーティストの間でコラボすることがものすごく流行ってきました。

出店するレストランもとにかくチェックしています。「不味い」というのはツイッターやfacebookですぐに広まるし、焼き鳥でも味付け、盛り付けを変えてくれと言っています。「いちごけずり」というメニューを提案してきた出店者はすごい売れました。今では各地のフェスに出店していて、丸の内にお店も構えています。

お客さんもライジングで知り合って結婚する人もいます。子ども連れのお客さんがこの10年ですごい増えてきています。最初は22〜3歳だった参加者が10年経って30歳になり子どもができるということです。そのためのキッズランドをつくって、親子で遊んでもらえる場所をつくっています。

いろいろな媒体でスポンサーも自分達で集めるし、メディアについても映像の記録をうちの会社が持っています。とにかくパブリシティのために映像を使いたい人がどんどん増えていると思うので、それは主催者が持っていないといけないと初年度から思っています。ビデオがものすごい量があり、ハードディスクに落とす作業も現在やっています。

昨年ぐらいからとにかくSNSを使っています。新聞や雑誌に告知が出て、ほぼチケットが売れない。今だとチケット流通を使ってコンビニ等、ポスターを公式に貼れるような場所のチケット流通をうまく使っています。フェイスブックだけでも数万人のフォロワーがいて、ツイッターやインスタグラムも使っています。

とにかくこの18年間やってきて、「みんな集いたいんだな」、そこに既存のメディアを使わずにどれだけ情報を告知していくか。不満な点としては、英語対応ができていないところ です。

会場は石狩市・小樽市の両市にまたがる地域なんですけど、中学生と東京スカパラダイスオーケストラと一緒に演奏することもありました³。また、ドローンの会社と組んで、クライアントとしても協賛金をもらいながら、ライジングを世界に発信しています。この10年で変わってきたのは、参加している女性が、1回目の時にヒールで来て寒い思いをして、アウトドアブランドの店に行き、その年の傾向をキャッチするということです。メーカーさんもそれを見えていますから、だんだん子ども向けのアウトドアウェアをメーカーも出すようになっていきます。その点ではマーケティングもやっていて、毎年アウトドアの会社とはコラボしています。

面白かったのは初年度から出演アーティストの名前の缶バッジを100円で作ったんですが、缶バッジのコミュニティができてみんなで夜通しやっているんですよ。初年度に真っ暗な中で2〜300人が集まって交換会をやっているんです。ライブを見ずにそのままガチャ

³ 2015年に地元の「花川南中学校吹奏楽部」が出演し、東京スカパラダイスオーケストラとの共演を果たした。

ガチャのコーナーに走っていく。そうするとこれは定番にしなければいけないと、値段も上げないでやっています。100 円のコミュニティですね。それでも一人につき 20 個以上売れますから、トータルで 2,000 万の売り上げになる。ガチャガチャ好きな人ってこんなにいるんだ。お客さん同士で話したがって、自分達の匂いのある人たちの塊をつくっているんです。

フードコートに何度も出店している人は工夫するわけですよ。48 時間であれば、最初はバーベキューの材料を持ってきていても、ほぼ 2 食分しか持ってこられない。キャンドル・ジュン君は向こうからプレゼンしてきて、今の「Taira-Crew (タイラクル)」⁴が出来上がりました。「なんか森の中にあるらしいね」と最初は全く名前を出さずにやっていました。費用はある程度こちらで出して、何やってもいいよと。僕らは水とトイレと草刈りをしてエリアを確保してあげる。開場は外からは全く見えない状況。そこでジュン君の友達を連れてきて、ほぼヒッピーの人達ばかりなんですけど、1 か月ぐらい前から来て会場を作っている。彼らは SNS を使ってどんどん発信してくれるので面白いものができています。

今後、ウエスは「No Maps」も含めて、いろいろなかたちでまちに貢献しながら次期世代の人達を育てていければと思っています。私は世界中のフェス見たり面白い現象を見に行っていて、ほとんど会社にはいないんです。これが札幌、北海道だったらどう使えるかと考えています。

まだまだフェスはローカルではもう少し工夫すればいいと思います。今日来てみて驚いたのが、フェス主催者がこんなにもいること。僕達の時はフェスなんかやろうとするのが僕と日高君ぐらいしかいなかった。あほだよね、こんなリスクなもの。なんでやるのってすごく言われました。

(観測会の参加者を指して) これだけのメンバーがいたら面白いと思います。見たものは減るもんじゃないし、とにかく皆さんに公開してしまう。今日は山崎君から話が来て全国の人達が集まりますということだったので、じゃあ俺のノウハウなんて減るものでもないし、喋れるものは全部喋って参考になればいいなと思い、参加しています。

6-2 ライジングサンロックフェスティバルー問一答

次にライジングが 18 年継続してきた背景を探るため、以下の 6 つのキーワードについて小島さんに一問一答で答えてもらいました。

- ①場所
- ②実行委員会・スタッフ
- ③アーティスト・タイムテーブル
- ④音楽以外のコンテンツ
- ⑤料金・事業規模
- ⑥継続性・継承性

⁴ キャンドル・ジュンがプロデュースする会場内の一エリア。

上記の 6 つのキーワードは、後述のフェス主催者同士のワークショップにおけるテーマでもあり、そのシミュレーションとして、フェス主催者に具体的な作業のイメージをつかんでもらうことも意図していました。

①場所

現在は石狩新港工業団地のところでやっています。北海道は車社会なんだけど、移動するのがあまり得意じゃない面もあって、渋滞が起きない、1 時間以内に札幌市内から来られる、公共交通機関から 30 分以内に行ける場所ということで、ずっと探していました。そこで現在の場所が、行政の計画があったのですが、偶然売れ残っていて使用できました。

現在は、80 万平米程使ってやっています。どんどん大きくなってしまっ、これ以上は運営できない広さまで来てしまいましたが、自分達で落としどころをつくってやっています。これまで、真駒内や夕張のスキー場、札幌芸術の森等、いろんな場所でやりましたが、やはりアクセスや近隣に音で迷惑をかけないという点で制限がある部分もありました。真駒内も音で駄目になって、音量規制がかかる市の条例まで出されたのでやめてしまいました。石狩は 5 万人が入り、ゆったりできる場所で空がきれいに見える。北海道の良さとして、朝日と夕日がちゃんと落ちる場所を探そうということで、真っ平らな場所を借りています。音の問題もクリアできて、18 年続いている状況です。

②実行委員会・スタッフ

ライジングは実行委員会形式ではなく、一社で全責任をとっています。行政の予算は一銭も入っていません。ただ、最初から、地元の業者、パートナー会社とやって、石狩や北海道にいる PA、照明等を育てようというところから始まっています。20 歳の人も今では 38 歳になるし、その人達も現役でバリバリやっていて全国ツアーまでいくような連中が育っています。

2011 年の震災では、お客さんが半分になりました。原発や余震の関係で 3 割ぐらいは来なくなってしまって会社もこれ以上パンクかなというときに、地元のスタッフ、会社の連中が支払いを待ってくれた。それは東京の大きな会社や他の地域ではなかなかできないことだと思います。「自分達の作ったフェスだから半年、8 か月待ちますよ」と言ってくれたから続いたんです。

ボランティアに関しては、「A SEED JAPAN」が 2 年程やって、彼らが地元のボランティアを集めました。その過程でボランティアの人達が自ら取り組むようになり、「ezorock」という NPO をつくってゴミの処理、環境問題に取り組んでいます。そのように地元とのコラボを進めていて、バックヤードの「オレンジカフェ」でもフラワーデザインの人やいろんなレストランの連中が参加してやっています。

③アーティスト・タイムテーブル

ライジングは新人を育てていくのがまずベースにあります。ここから出て行って大きなステージまで行ってもらいたい。通常のコンサートでもライブハウスから成長してアリーナクラスまでいけるアーティストを育てようというのが基本にありますから。それと札幌では「Sapporo City Jazz」をやっていますから、かぶらないようにして、ジャズ以外のものは全部入れてあります。太鼓をやっている人達がいたり、いろんなジャンルの人達を知ってもらおうと音楽の種類に関してはなるべく広くやっています。

タイムテーブルは最初アーティストの持ち時間を 30 分にして、ものすごい数を入れてしまったのですが、お客さんが大変だということが分かってきました。1 時間近くやらないとアーティストも満足しないし、お客さんも満足しないので。

現在は 7 ステージのタイムスケジュールだけは発表しています。それ以外にもキャンドル・ジュン君の「Taira-Crew (タイラクル)」や「PROVO」⁵とかいろんなところで演奏しています。各コーナーでまたそれぞれブッキングをやっているのも、自分達のコミュニティから発信してもらっています。

時間はゆったりやれるように最大 1 時間、新人だと 30 分くらいでやっています。新人をたくさん出してあげたいので、メインステージの人達だけが 1 時間程度の時間です。

④音楽以外のコンテンツ

ダンスや、直接その場で絵を書いてもらうパフォーマンスをやってもらったり、毎年いろんなプレゼンを受けて必ず自分達で見に行っています。それはビッグアーティストもそうですし、新人も必ず見て感じています。パフォーマンスも国内のフェスや、瀬戸内国際芸術祭の中でパフォーマンスやっているけど、なかなか表に出てこないような人達を見に行って、これだったら面白いよね、飽きられないよねというチェックをしながらやっています。

⑤料金・事業規模

今年（2016 年）は全体で 9 億 5 千万円程の事業規模です。そのうちチケットの売り上げは 80%、あとは協賛、スポンサー料、それからオフィシャルグッズ、アーティストグッズがあります。規模は、あまりにも大きくはしたくありません。2 日間寝ないというのは、お客さんは寝てるかもしれないけど、僕らはみんなで起きてやっていないといけない。現場の連中は 4 日間～1 週間寝ていない状態で、会話もできないくらいのハイテンションになっていて、それは僕らも限界だし、お客さんも楽しいところから苦痛になるところまではやりたくないから。2 日で 8 万人ぐらいが来て、その中で継続できる予算規模にしていけないと思っています。

⁵ 札幌のクリエイティブチームが運営するエリアで、フードの提供やアートの展示、ライブペインティング、パフォーマンス、服飾・雑貨の販売などを行っている。（ライジングサンロックフェスティバル HP より）

⑥継続性・継承性

とにかく僕が面白がってやる、世界中の連中が面白がってやるようなものにしていかないと続いていかないし、「もう疲れた」というのだけは避けたい。続けられるなら僕の代だけじゃなくても、やってもらって構わない。

クライアントも含めて、自分たちがまず飽きない。それから子どもたちにも飽きないようなものにすれば次のお客さんも育てられると思います。次の世代の人でも続けられると思うので、その部分で名前を変えずにずっとやればいいのではないかと考えています。社員の人、周りのアーティストも含めて、音楽系以外も飽きないようにとにかく持続させていきたいと思っています。

場所に関しても、行政との問題が起きなければ今の場所でずっと続けていきたい。札幌から車であまり渋滞しないし、草刈りをやれば 15000～20000 台入れる土地がまだ空いているので。

6-3 フロアとの応答

Q：地元アーティストのフォローもされたりするのでしょうか。

A：最近だとサカナクションは 6 年前に「山口（一郎）君」がうちでアルバイトをやっていたんですよ。自分達のバンドをやっていて、「デモつくりたいんです」と言われてサブスタジオがあるので、そこでうちの連中がディレクションをやってあげました。ライジングスターにも自ら応募して出演しています。3 年前に SUN STAGE 出演のオファーを出したら、山口君やバンドメンバーが涙流しながら「やっとここまで来ました」と言っていました。

松山千春さんはコンテストに出た時から僕らがサポートをしていて、今では 40 年も音楽活動を続けています。40 年前から、何かきっかけあったら地元の人達を出そうということをやっていますし、「芸森スタジオ」もそのために僕らが残して買い取り、自分達で運営しています。僕は音楽コンテンツがずっと続いていくと思うし、フェスもこちらが飽きなければそこでミュージシャンが育って来たりすることによって、地元に残るアーティストが増えてくると思います。



15 年程前に MONGOL800 を担当する 40 年来の友人から「沖縄で面白いバンドがいるんですけどインディーズで売りますから、ブッキングしてください」と言われたことがあります。その 1 週間後ぐらいに CD がかなり売れて、じゃあプロモーターで会社つくろうという話をして、みんなで

「HIGHWAVE」という会社をつくって、彼らを応援しました。2000年のライジングでタイムテーブルも全部決まっているときに、私のわがままで「モンパチを出してくれ」と言ったら、「空いてません」と言われたのですが、「じゃあお客が入っている最中に演奏させるからどうだろう」、「それだったらいいすよ」となり、オープニングアクトとして出演してもらいました。ライジングがモンパチの本州でやる初のライブになったんです。いい音はお客さんがキャッチして、それによって全国で火がつく。そして、沖縄に会社をつくれば、お金が沖縄に戻ります。

地元を育てて、地元会社を作ってしまう。メジャーとも仕事をやっていますが、自分達でやった方がいいですよ。今は iTunes や Spotify、AWA とかいろんなものが出てきているから、出やすい状況です。みんながこの地域のバンドは面白いんだぞと、ここ（観測会）にいるコミュニティだけでも十分に発信していけますよ。

好奇心があるからやるわけですよ。全てのものに対して音楽もそうですけど、いろんなフードやファッション、いろんなカテゴリーにいけるわけですよ。でも僕らのビジネスはおしゃれじゃなきゃ成立しない。ライフサイクルも含めて。それをみんなが地域で発信していければいい。やっぱり地元のミュージシャンを育てた方が絶対いいと思います。

Q: 映像について、ライブはもちろん一回性のものですが、それを映像として保存すると思います。現代では配信での活用もありますが、映像は保存して年が経てば経つほどドキュメントとしての歴史的な史料価値が高まっていくと思います。保存資料のアーカイブ化に関して、その閲覧や公開・非公開のルール作りはどのように進めていらっしゃいますか。

A: 今は若手のバンドが OK するようになりました。最初にフェスの映像は残しておいてください、こちらの権利としてホールドさせてくださいというのは交渉の時にやった方がいいと思います。告知の際のアフターにも使えるし、自分達のパブリシティでやれると思いますので。クオリティのいい映像ではなくても自分達で残しておけばいいと思います。先程話した「HOKKAIDO ROCK CIRCUIT」では、BØOWY、米米 CLUB、BARBEE BOYS、RC サクセションは私達で映像を取って、放送権も取り、費用を払いました。10年後に BØOWY の映像を貸してほしいと依頼があり、それだけでも大きな利益が出ました。それぐらいの価値があります。

Q: ライジングをマジョリティに開かれた場にするのか、マイノリティの拠りどころにするのか、そのバランスをお聞きしたいです。

A: 難しいですね。お客さんがどんどん変わっていくし、その変化を見つけられるかが僕ら

のキーワードだと思っています。ライジングは海外アーティストを入れていませんが、受け入れられるかどうかという点もあります。

Q：石狩の場所は買われたんですか？

A：買っていません。2 か月程借りています。地面に植わっているのは水道と下水で毎年埋めたり戻したりしています。ほぼその部分だけで 8,000 万程度かかっています。借りた方がいいし、買えるような値段じゃないし、それであれば毎年こちら側も変化していけるような方がいいだろうと思っています。

Q：お客さんの道内外の比率が半々と聞いたことがあるのですが、北海道外から呼び込むための取組をやっているのでしょうか。それとも内容を面白くすればお客さんが集まってくるのでしょうか。

A：お客さんは 2011 年までは半々の比率でした。以前開設していた BBS で「ロックフェスなのになぜ CHAGE&ASKA を出すんだ」ってすごい荒れちゃって、もうこれはお客の意見を聴くのはやめようということもありました。でも、ステージに上がった途端にみんなで「YAH YAH YAH」を歌っていてすごい驚きました。お客さんの声は、一部の人の操られる部分がすごく大きいから、オーガナイザー側が自信をもって出せるようにと考えています。

Q：これまで「HOKKAIDO ROCK CIRCUIT」や「GOOD STOCK」という野外のイベントをやられた上で、ライジングが始まったとのことですが、ライジングになった瞬間とその前のイベントとの決定的な違いは主催者の目から見てなんだと思いますか。

A：「HOKKAIDO ROCK CIRCUIT」や「GOOD STOCK」はやっぱりお客さんが 21 時になったら帰るし、また日常生活に戻ってしまう。これは何とかしたいと思って、そのときにうちの社員からも出たのが「オールナイトをやってみませんか」ということでした。ライブだけでなくお客さんがそこで 48 時間暮らす、非日常で友達同士が楽しめるという部分で、途中からライジングしかやらなくなりました。僕達はみんなから 48 時間奪っちゃうわけですよ、お客さん達もパラダイスを求めて 48 時間楽しもうとしているから、そういう場があってもいいんじゃないかと。それで、1 万 2,000 ぐらいまでテントを張れる場所でやろうとなりました。

Q：ライジングを今後続けていく上で、飽きられないための工夫について教えてください。

A：アーティストに関してはコラボレーションをやってもらっています。それを泊まり込みのお客さんのために夜中の2時からやらせる。それがまた次の年も面白いからやろうとセッションが2か所、3か所でできていく。

フードでいくと、とにかく「メニューを出してください」と言っています。出店会議をやって僕らが他のフェス行った時の写真だとか、グラストンベリー、コーチェラ⁶、ボナル⁷はではこうだったと、そのデザインをまず見せちゃう。そうするとそれぞれのお店で工夫してくる。2日間でラーメン屋が600万売り上げたこともあります。儲かるから自分達で毎年どんどんデザインを変えていくわけです。

僕はいろんな注文つけるし、それぞれがみんな工夫してくれるんです。3年目ぐらいから夜間照明もやり始めました。お客さんは48時間いますから。人間って不思議で明るいところに寄っちゃうんですよね。

キャンドル・ジュン君の「Taira-Crew」も直前発表で、開場してからアーティストの発表をしたりしています。「EARTHTENT」に出演しているアーティストもギター1本もって突然やってきて演奏しちゃう。それがSNSで「今見たよ」とすぐ伝わっちゃうわけです。そういうのはどんどん使えると思います。

Q：継続するにあたって運営スタッフのコアの方々が飽きないようにするため、小島さんの立場から工夫されていることはありますか。

A：僕はあんまり会社にはいない方なので、海外のフェスに行ったり、参考になる資料は全部iPadの中に入れてあります。会社に帰ってきたらみんなに見せて、「俺だったらこうする」、「これ工夫してライジングに入れちゃおう」、というのが出てくる。とにかく自分が飽きないようにすること。それが売り上げにすごく出てきますから。

Q：全国的にローカルのフェスがたくさん増えていますが、どう思いますか。

A：僕はどんどん個性のあるフェスはつくっていった方がいいと思います。例えばタイムテーブルも、面白い組み合わせができるところは残っていくと思うし、数だけ入れればいいというフェスは途中で飽きられると思います。全国で増えているけど、ライジングはまったく違うものにしていきたいと思っています。

Q：例えば1,000～3,000人規模のフェスが個性をすごく打ち出せていて、支持されているとします。それが1～2万人の規模になってきた場合、客層が少し変化してくると思います。その個性をしっかりと理解してくれるお客さんで形成されていたのが、規模が大

⁶ 「Coachella Valley Music and Arts Festival」。1999年からアメリカで開催。

⁷ 「Bonnaroo Music and Arts festival」。2002年からアメリカで開催。

きくなると、例えばみんなでわいわいがやがや騒いでいるけれど、実際バンドが演奏していても見ていない、といったことで客層も変わってくると思います。その場合どうすればいいのでしょうか。

A: そういうアーティストには地藏さんみたいなお客さんが来るわけですよ。最前列に来て、開場してから動かない。そのようなアーティストは出していない。やっぱり喉から手が出るほどそのバンドは欲しいんですけど、たかが 1,000 人で他のお客さんが「なんだよ」というムードはつくりたくない。

Q: フェスと呼ばれるものが日本に定着してから 20 年経つと思いますが、フェス以降に何か新しいものが始まると思いますか。

A: 今回（観測会に）集まった人達はものづくりを始められる人達なんですよ。そこはもう絶対に自信を持った方がいい。僕はなかったから作ったというだけで、それがどんどん変化してきているけど、これを継続していくことだと思います。自分達が必要なものとか、お客さんの先を行っている人達がここに集まっているわけですよ。集められる能力もあるし。

今後は新しい若い人達がものづくりをできればと思っていて、バンドもものづくりだし、全部がインディーズだと思っているんですよ。インディーズが育つものを地元で育てていく。それはフードでも、ファッションでもエデュケーションでもいい。

こうやってものをクリエイトする人達を見つけて仲間を増やせばお客が育ってくる。お客の人数だけでなく質の問題も含めてディレクションできるのがここ（観測会）にいる人達なので。それは世界から見たらまだまだ大きくはないし、やっぱりグラストンベリーは 40 年やっているのだから。地域などとのコラボレーションをうまくやりつつ、ここにあるネットワークを完全に駆使すれば新しいものができると思う。

Q: フェスはお客さんの方からどんどん動いてつくりあげていって、元々は一回で終わるのがどんどん折り重なり、文化や伝統ができあがっていくようなものだと思います。そのコミュニティをつくりあげていくために気を使っていることはありますか。

A: 例えば会場内に牧草の束を置いておけば、そこに遊びが生まれる。最近はお客さんが発信側だから、100%はやらない方がいいと思います。僕らが提供するの 80%ぐらいであとの 20%はお客さんがつくっていけばいいんです。最初は冷たいと思われたかもしれない。自分のことは自分でやれよと。「トイレトペーパーないんですけど」「そんなもん野外フェスティバルなんだから当たり前だろう」というわけです。お客さんも多少の苦勞をすることによって、根付いていく。ライジングは 1 月にアーティストを発表しな

いで、日程と料金だけ発表しますが、それで3分の1は売れてしまいます。お客さんは何回も来ているから、早くいい場所をとっちゃえとなって、その時間のために夏休みとろうとか、クラス会やりますよとなっていく。最初はアーティストが優先だったんだけど、回数を重ねてくるとオーガナイザー側からすれば、高額なギャラの人を呼ぶより、お客さんが先に来てくれた方がいいわけです。コスト的にも。そういうところを一緒にあって僕らも学習するし、お客さんも学習する。だから100%は避けています。



小島さんを囲んでの全体写真

7. 問題共有

フェスを外側から「観る」視点として、フェス研究者・フェスメディアから発表をしてもらい、ワークショップに向けた問題共有を行いました。

7-1 「日本におけるロックの歴史と社会」

ロック研究者の南田勝也さんからは「日本におけるロックの歴史と社会」と題し、日本における現代のフェス文化の「根付き」について、オルタナティブカルチャーの視点から発表してもらいました。



【発表要旨】

■ポピュラー文化の理念型—オルタナティブへの変容

- ・ポピュラー文化の4つの理念型として「主流文化（メインカルチャー）」、「対抗文化（カウンターカルチャー）」、「下位文化（サブカルチャー）」、「代替文化（オルタナティブカルチャー）」がある。
- ・その中でもオルタナティブ文化は自分達の文化という意識をそれほど求めないし、富と名声を強くは求めない。しかしそうであるがゆえに、消費社会の中で日々刷新されていく人々の興味やビジネス的な動き、そういった消費社会の中でオルタナティブな代替的な道筋を示して生き延びることができているのではないか。

■日本のオルタナティブが始動した1997年

- ・日本のオルタナティブが始動したのが1997年であり、それは3つの出来事に象徴される。

（1）97世代一波の音楽から渦の音楽へ—

派手なボーカリストの主張やギタリストの見せ場はなく（ギターソロはないか、控えめ）音場空間を優先させる姿勢（例：くるり、ナンバーガール、スーパーカー）

（2）エアジャム—表現からスポーツへ—

身体が共振する音楽を追求。自意識の反映であるアート表現というよりは、スポーティな躍動の美に近い。

（3）フジロックフェスティバル—鑑賞からプレイへ—

コンサートホールでミュージシャンをじっくりと鑑賞するモードは後退し、サウンドそのものの「出会い」を楽しむ。演者・参加者ともがプレイヤー。

- ・サウンドそのものの出会いを楽しむ、演者・参加者ともがプレイヤーといった感覚に97世代のサウンドの追求の仕方、AIRJAM的なスポーティーなサウンドが非常にマッチングしたこと、それがロックフェスの2000年代の広がりに通じているのではないか。

- ・ 1997 年を始点とする日本のオルタナティブロックの成り立ちを説明したが、これらの動向は、全体的なポピュラー音楽シーンにおいて革命的なモメントとして記録されたわけではなく、むしろ、静かにはじまり静かに展開していった。J ポップというメインカルチャーではなく、1980 年代までのロックが目指したカウンターカルチャーでもなく、オルタナティブカルチャーとして代替的に歩んでいく道程
- ・ ノーニュークスなどのポリティカルイシューを続けている主な担い手は彼らである。

■オルタナティブカルチャーの資本主義への抵抗

- ・ オルタナティブカルチャーは富と名声への希求も弱いし、コミュニティ感覚もそれほど強いものを持っているわけでもない。だからこそ、旧来の右左で分けられないような第三の道、それが大仰にメッセージとされるよりは、それが浸透している。こういったものが今はどのフェスにいつでも当たり前になっているかもしれないが、ここにも歴史性がある、うまく時代の波と重なり合ったことによってここまで根付いているのではない。

【参考文献】

- 南田勝也（2001）『ロックミュージックの社会学』 青弓社
 南田勝也（2014）『オルタナティブロックの社会学』 花伝社

7-2 「日本のフェス参加者の動向」

フェス研究者の永井純一さんからは「日本のフェス参加者の動向」について発表してもらいました。発表では、主に青少年へのアンケート調査からフェス参加者の特徴について説明がなされ、ワークショップを進める上で重要な論点が提示されました。



【発表要旨】

■海外の研究・調査動向

- ・学術分野では 2000 年以降、学術論文が学会誌（イベントマネジメント、観光学など）に投稿されはじめ、2010 年前後には学術書も出版されるようになる。
- ・各種統計としては、ライブ・フェス産業、観光産業による統計調査がある。
- ・フェスティバル研究にも多様な視座がある。

■モチベーション研究

参加者のモチベーション研究について、海外の先行研究を紹介

■統計調査からフェス参加者の特徴を探る

青少年研究会が実施した「都市住民の生活と意識に関する世代比較調査」の紹介

○1 年 1 回以上は音楽フェスに参加する人の割合

- 年齢：10～40 代の平均 7.1%、20 代が最も多い 10.3%
- 平均年齢：27.34 歳（全体よりも 2.5 低い）
- 性別：女性の方が高い（8.5%）

○フェスに行く人の特徴

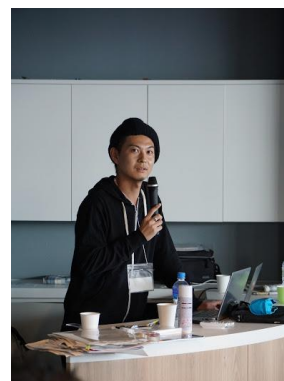
- 必ずしもフェス＝若者ではなく、ある程度ゆとりのある層がフェスに来ている。
- 友人が多く社交的である。
- 恋人がいる割合は高め。ただし結婚はしていない。
- 好奇心や文化的な関心は高い。
- 社会・政治についてはいくつかの点で特徴がみられる。

【参考文献等】

永井純一（2016）『ロックフェスの社会学—個人化社会における祝祭をめぐって』ミネルヴァ書房
青少年研究会：<http://jysg.jp/research.html>

7-3 「世界のローカルフェスについて」

フェスメディア「Festival Life」、「Festival junkie」を運営する津田昌太朗さんからは、メディア立ち上げの経緯や、世界のローカルフェスについての紹介がありました。



【発表要旨】

■フェスメディアの立ち上げについて

- ・ 2007 年にブログメディアとして日本のフェス情報を発信する「Festival Life」が立ち上がり、2015 年から組織体制を一新し、メディアとして運営しはじめた。スタッフに応募してくるのは女性が多い。
- ・ 2013 年から世界のフェス情報を発信する「Festival Junkie」を立ち上げた。海外フェスに行った衝撃で、会社を辞めてイギリスに移住。その後、約 200 の海外フェスに参加した経験を基に、多くの海外フェスを紹介している。

■アイスランドのローカルフェス

- ・ 日本のローカルフェスが参考になる海外のローカルフェスとして、アイスランドの「Iceland Airwaves (Iceland Airwaves Music Festival)」がある。「Airwaves」は、首都レイキャヴィークで開催されており、街中がフェスの会場になっていて、ホテルのラウンジやショーウィンドウなどあらゆる場所でライブが行われている。メイン会場の「Harpa (ハルパ)」は、他のフェスでも利用されている。
- ・ 「Airwaves」には地元のアーティストだけでなく、その年活躍したヨーロッパのアーティストやビョーク等の世界的アーティストも出演する。日本のローカルフェスはまだまだ世界とつながっていない印象があるので、参考になるのではないかな。地元でやることが世界のトレンドとつながるようなことをやっていきたい。

■フェスティバルアワードのアイデア

- ・ イギリスには「UK Festival Awards」があり、音楽だけでなく、アクティビティやコンテンツ等様々な部門でフェスティバルを表彰している。アワードではその年に多くのフェスに出演したアーティストのパフォーマンスやパネラーによるディスカッションもあり、フェス主催者やスポンサーも集まる。現在日本での実施に向けて動き始めている。

【参考】

Festival Life : www.festival-life.com

Festival Junkie : <https://www.festival-junkie.jp>

8. ワークショップ ROUND1

「ロックフェスが創造してきたローカリティ—現代フェス 20 年を辿って」

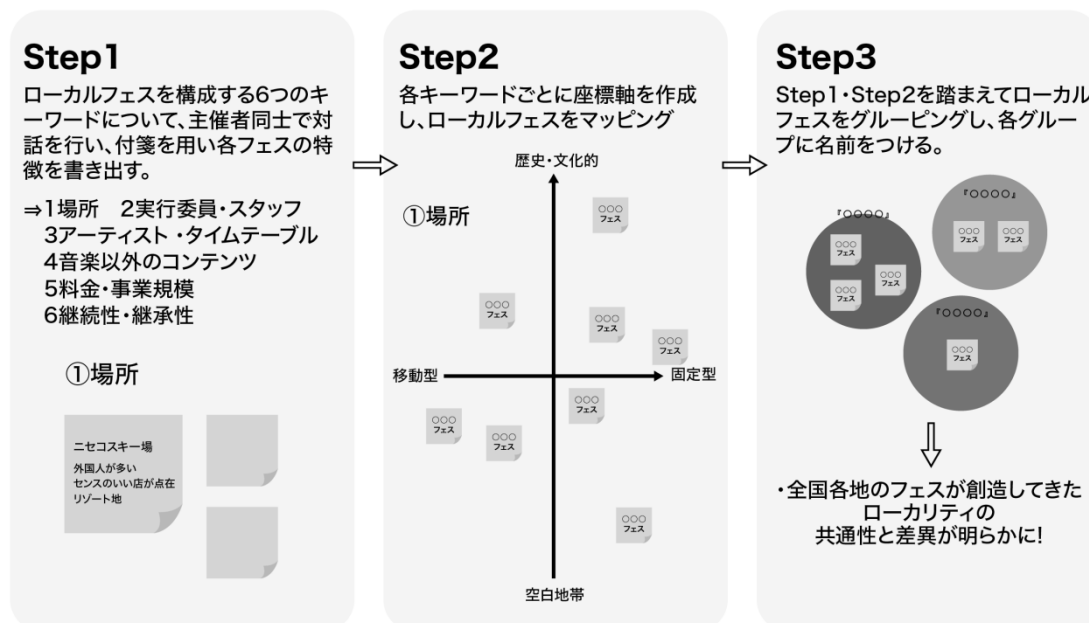
ライジング小島さんの講演、フェス研究者・メディアによる問題共有を踏まえて、ローカルフェス主催者が、フェス開始年の違いに基づき、3 グループに分かれてワークショップを実施しました。ワークショップでは、フェス主催者同士の対話から、自らのフェスの固有性（ローカリティ）を確認・発見し、主催フェスを 6 つのキーワードに基づいたマップにマッピングしてもらいました。ゲストスピーカー、一般参加者も会場を回り、適宜主催者と意見を交わしながら、各フェスの特性を探り当てていきました。

グループ①	グループ②	グループ③
乙事キャンプ (2001～) 蔵王龍岩祭 (2006～) OTO TO TABI (2011～) (※ぼくらの文楽 (2011～) は 2 日目から参加)	FreeShelter (2011～) hoshioto (2013～) Walkin' Media “ennas” (2013～)	ITAMI GREENJAM (2014～) 廃校グルーヴ (2015～) TSUSHIMA BORDER ISLAND FES (2016～)

(※各テーブルには各フェス主催者に事前に記入してもらったアンケート結果を配付)

【ワークショップの手順】

ROUND1「ロックフェスが創造してきたローカリティ—現代フェス20年を辿って」



■ 6つのキーワードに基づくローカルフェスマッピング

観測会会場で行ったマッピング結果を再現しました。

①場所（開催場所と理由）

○座標軸の説明

歴史・文化的：伝統的な祭りの開催や周囲を歴史・文化資源が取り囲んでいる場所

空白地帯：工業地帯等、土地の歴史的な文脈と切断されている場所

固定型：毎年同じ場所で開催

移動型：必ずしも同じ場所では開催しない



②実行委員会・スタッフ（なぜそのメンバーなのか）

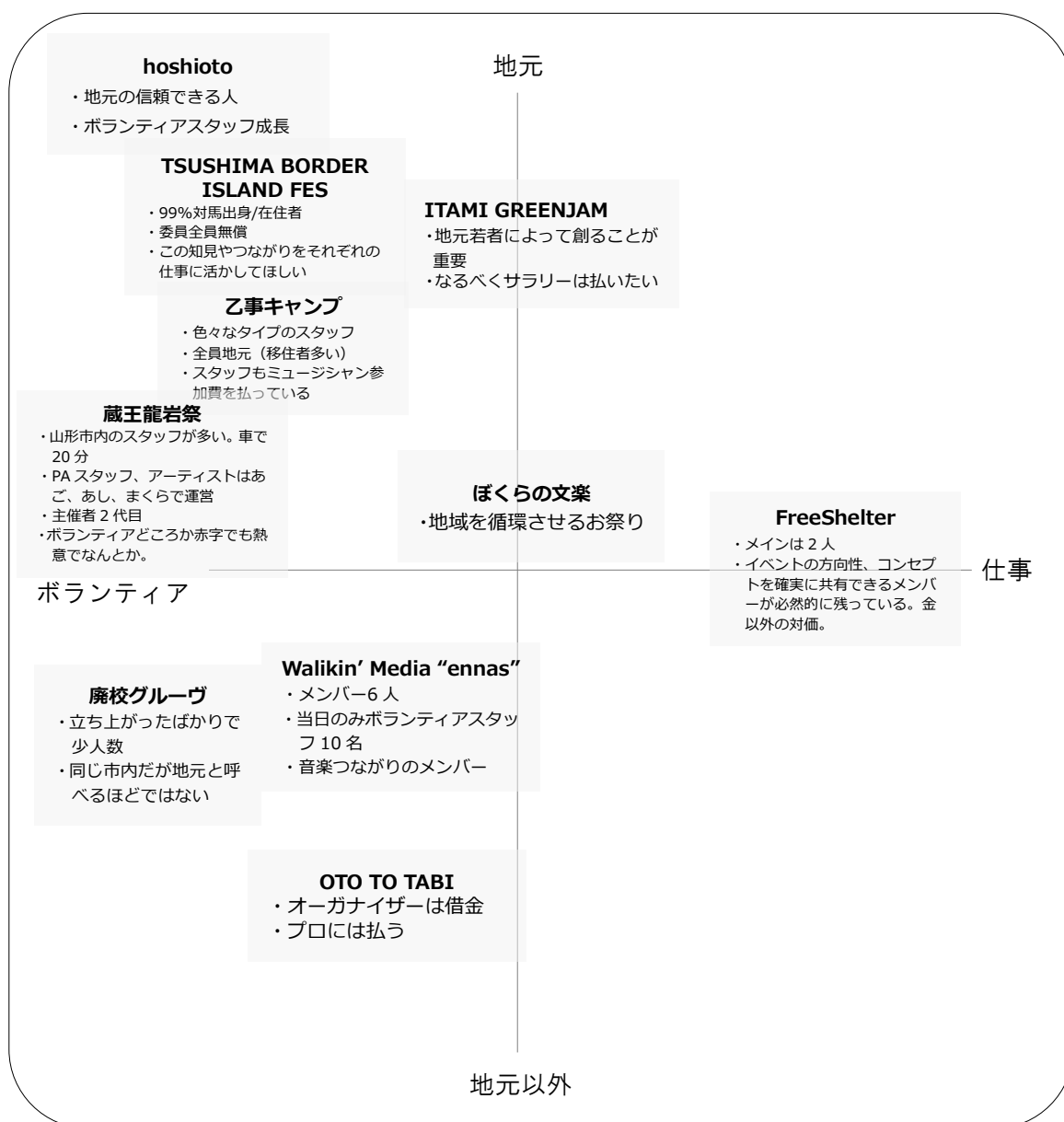
○座標軸の説明

地元：主に地元在住のメンバーで構成

地元以外：メンバーは地元在住にこだわらない

ボランティア：ボランティアで運営

仕事：仕事、生業として運営



③アーティスト・タイムテーブル

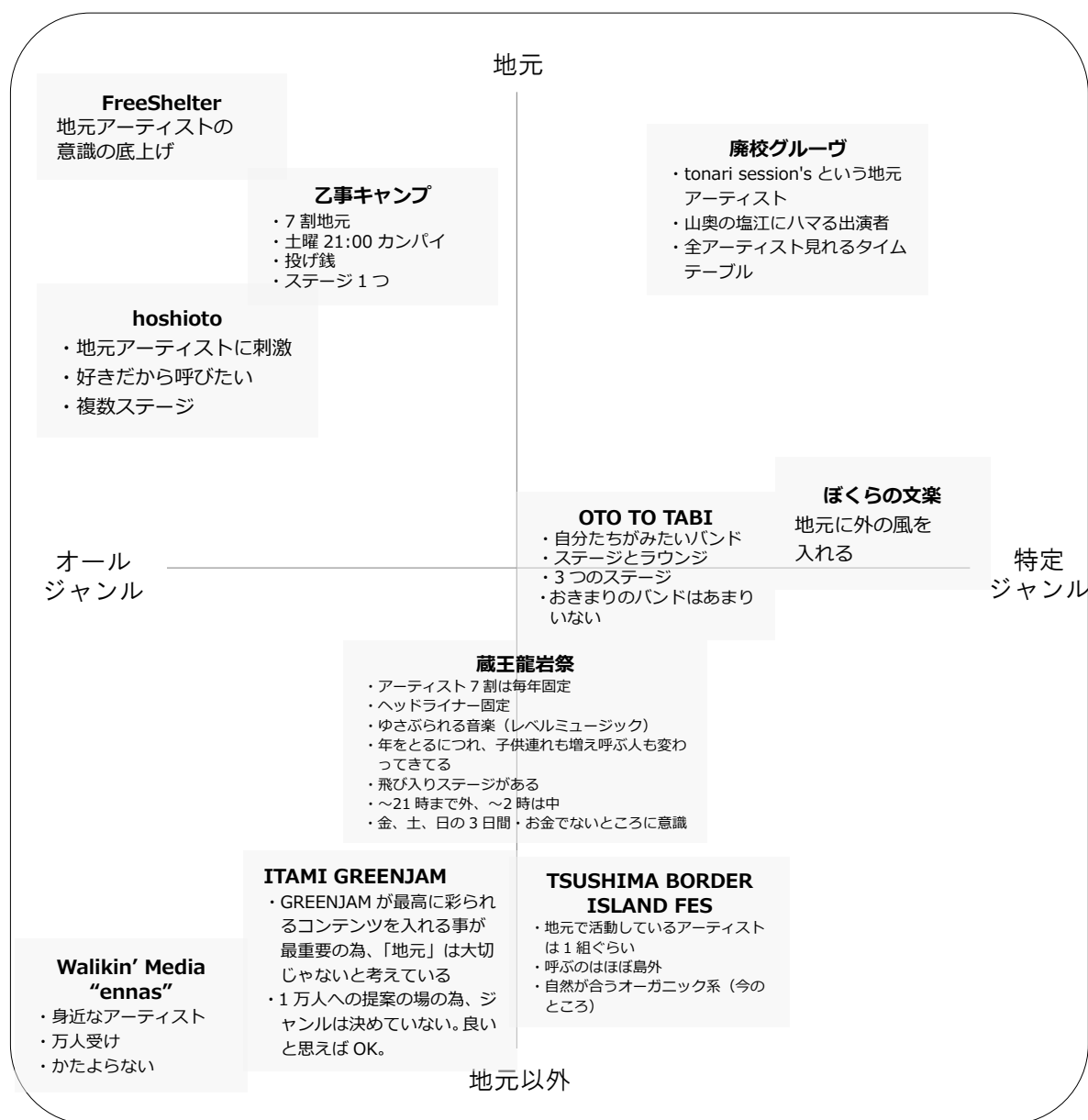
○座標軸の説明

地元：地元のアーティストを重視

地元以外：地元以外のアーティストを重視

オールジャンル：音楽ジャンルはこだわらない

特定ジャンル：特定の音楽ジャンル

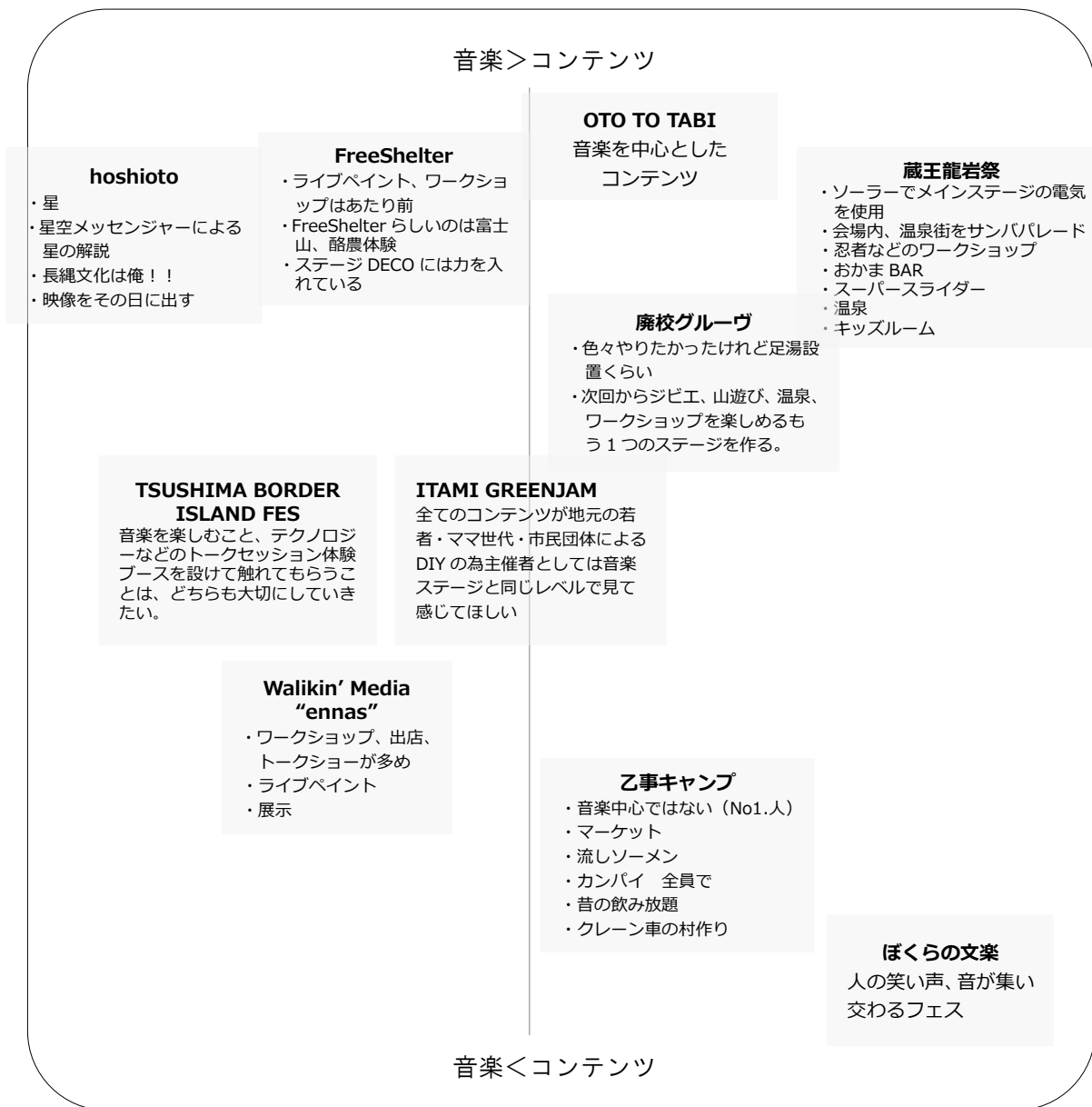


④音楽以外のコンテンツ

○座標軸の説明

音楽＞コンテンツ：音楽を重視

音楽＜コンテンツ：音楽以外のコンテンツを重視



⑤料金・事業規模

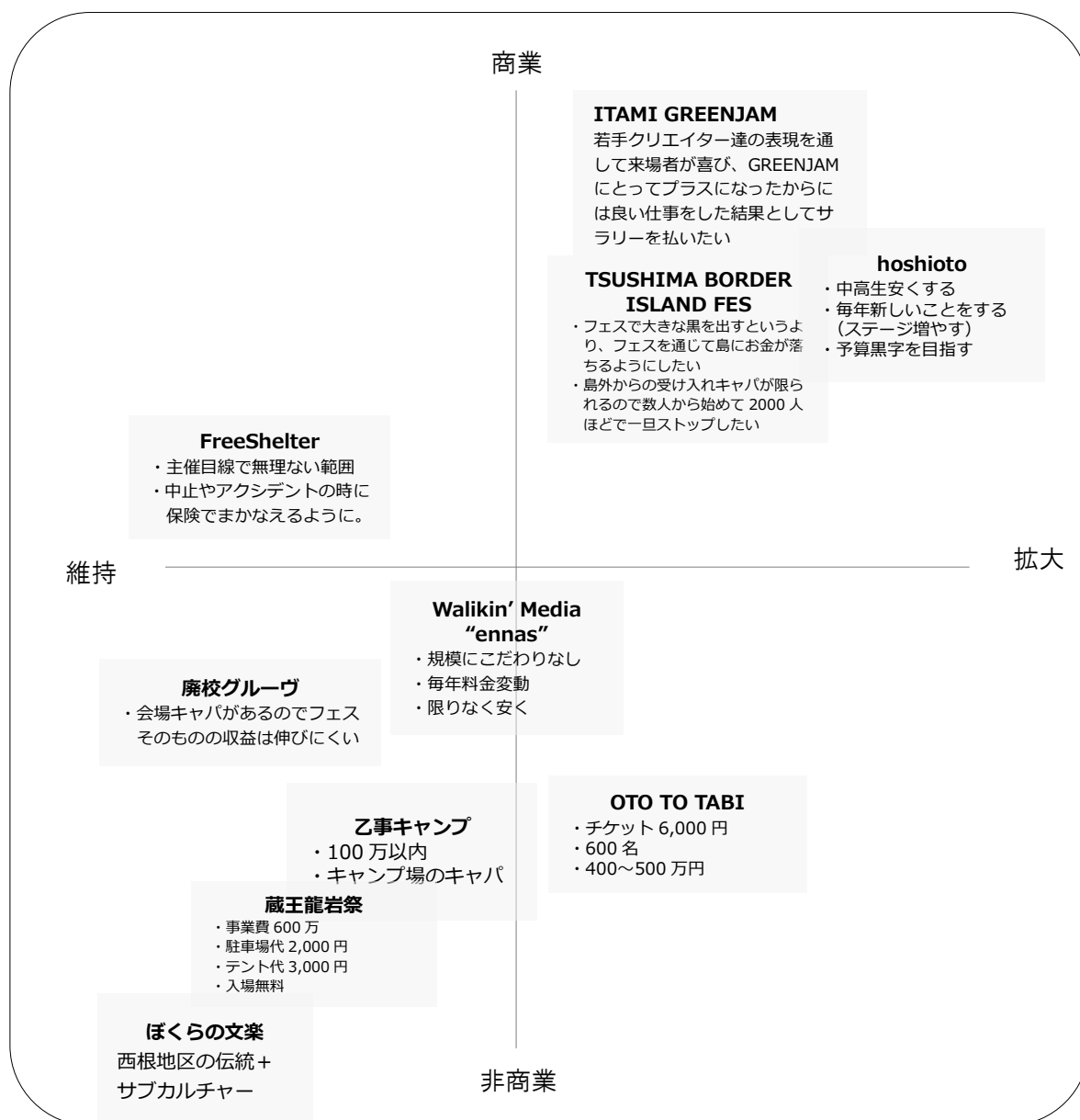
○座標軸の説明

商業：商業性を意識している

非商業：非商業性を意識している

維持：今後も現在の事業規模を維持

拡大：今後は事業規模を拡大予定



⑥継続性・継承性

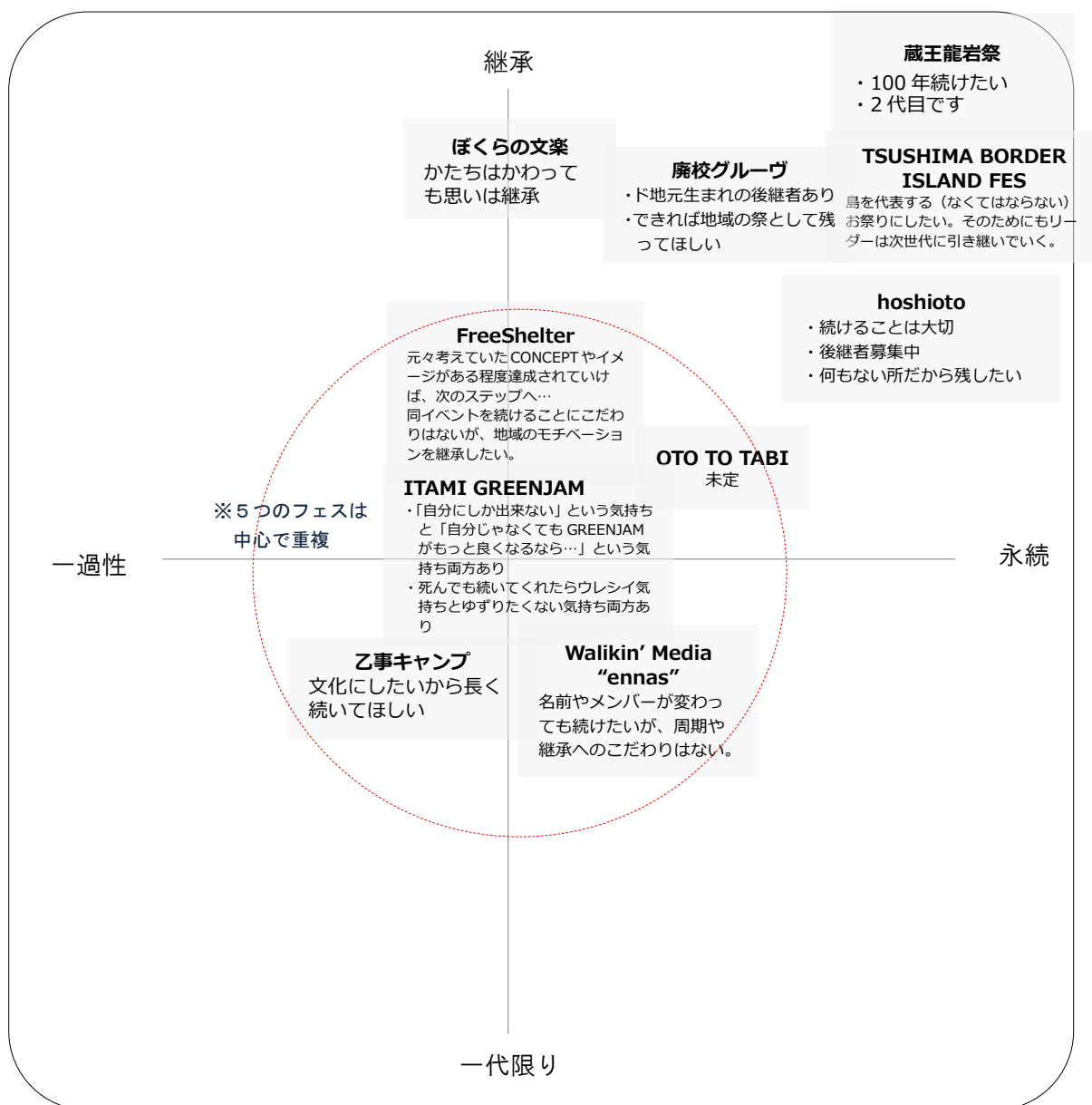
○座標軸の説明

継承：フェスを次世代に継承

一代限り：フェスは自分の代で終了

一過性：フェスは必ずしも継続開催ではない

永続：フェスを継続的に開催



■ワークショップ ROUND1 を終えての主催者の感想〈一部抜粋〉

- すごく疲れました。でも自分でいろいろと言うことによって、気づくこともあるし、いろんな人のやり方を聞いて、「それいいね」というポイントもすごくあったので、すごく実のある時間でした。
- 場所に関して、気持ち的には歴史・文化の流れを引き継いでやっているつもりだったけれど、よくよく考えたら俺たち新しい事やってるんだなって、ここで話していて気付いたので、よかったです。
- マッピングよりも同じような悩みとかお互いのフェスのいろいろな話をするのが楽しすぎて、時間がすぐ経ってしまいました。質問が次から次へと湧いてきてしまって、それを共有できたのが一番いい経験になりました。
- 結構盛り上がってしまって、そのフェス行きたいなと思いました。「こういうふうにやってた」ということが自分なりに見えて面白かったです。
- 私のグループは歴史の浅いグループなんですけど、ちょっと話ただけで、一人一人の熱い思いがあって、すごくいい刺激になりました。
- 主催者同士で話をするのがないので、自分のフェスの話をしたときに、それはすごいなとか主催者の方からリアクションがあると、これは主催者の目から見てもすごいんだなと自分のイベントの強み、メリットが分かったり、再確認できて良い場になりました。
- 主催する人は熱がすごいものを持っていると改めて実感しました。

(ワークショップの様子)



9. 懇親会

9-1 LIVE&アーティストから見たフェスについて

多数のフェスに出演されている成山剛 (sleepy.ab) さんをお招きし、「アーティストからみたフェス」と題したトークショーを開催しました。聞き手は hoshioto の藤井裕士さんです。成山さんにはライブも行ってもらいました。

【トーク内容要旨】

藤井：sleepy.ab としてはこれまでどのようなフェスに出演してきたんですか？

成山：ライジング、フジロック、サマーソニック、スイートラブシャワー、ラッシュボールやカウントダウンジャパンなど、いろんなフェスに出演させていただいています。

藤井：北海道のアーティストとしてライジングは特別なものだったりするんですか？

成山：それまでロックフェスというものの情報が全くなくて。初めてでたのが2004年かな。そのときはこんなしんみりした曲で大丈夫なのかなというぐらいの認識だったんですよ。でも、出てみたらすごい盛り上がって。

藤井：フェスはイベントや普通のライブに呼ばれていくのと少し違う意識ですか？

成山：やっぱり不特定多数の人に聞いてもらえるチャンスというか。今、アーティストをファンの人が囲むかたちになってきていると思うんですけど、そういう意味ではフェスはすごい重要だなと。

フロア：バックヤードがいいフェスはどんなものがありますか？

成山：やっぱりライジングはいいですね。アーティストが自然にいるというか、結構みんなリラックスしています。

藤井：hoshioto はある意味、バックヤードがないじゃないですか。

成山：いい意味で全部バックヤードみたいな。

藤井：sleepy.ab 的に海外はどうですか？

成山：海外のフェスには出たことないんですけど、この前台湾に行ったばかりなんです。台湾のバンドがすごいかっこよくて、あっけにとられることもありました。そういうアジア圏のアーティストも日本のフェスに入ってくるような雰囲気を感じますし、逆もありだと思います。

フロア：普段のライブに出るときとフェスに出るときの意気込みの違い、セットリストの違いは、どう意識していますか？

成山：そのフェスの雰囲気に合わせて。hoshioto は行ってから決めますよね？

藤井：俺の好きな曲ということでやってもらいましたもんね。個人フェスとかだと、特にそのオーガナイザーの顔が見えたりするので。

藤井：フェスは特別なものとしてアーティストさんにも思ってもらえてるのかなと。特にここにいる人達はほとんどが個人フェスなので、「こういう人に出てもらいたいということで」やっているの、相思相愛の部分はあるんですかね。

成山：そうなりやすいのかもしれないですね。

フロア：フェスにたくさん出演されていて、フェスを主催したいと思ったことはありませんか？

成山：最近アーティストのフェスって増えていますよね？アーティスト同士の仲でやっていると雰囲気良いですよ。

藤井：成山さんだったらどういうブッキングをされますか？

成山：札幌だけでバンドを多く集めても難しいと思います。今までもそういう動きはあったんです。やっぱりそんなに人は来なくてというのは結構見えて、「森のカフェフェス」が成功したのは東京のバンドが出ていて、そこに僕たちがぽつんと入ってただけであって、北海道のバンドはそんなに出ていない。そういうものの方が受けてしまう。北海道のインディーズは北海道の人にはまだ認められていない。一度札幌に住んでいるバンドが増えたこともあるんですけど、結局また東京に行こうという流れが強くなっていますね。

藤井：その中でもやっぱり sleepy.ab は残っている？

成山：そうですね。行くっていう発想自体がそもそもなかったです。東京行ったらたぶんやめるだろうなって。ライブでは東京行くけど、住みたいのは札幌かな。各地のフェスがあることでその場所に行こうとなるのですごく大事ですよ。バンドにとっても。北海道の「OTO TO TABI」もそうだし、それはすごい誇らしいことです。



9-2 羊蹄とフェス～羊蹄山麓を舞台とした仮想フェス構想～

懇親会の企画として、観測会の会場が立地するニセコについて、「羊蹄山麓を舞台とした仮想フェス構想」をテーマに語り合いました。同企画では、ニセコ町地域起こし協力隊の聖未知矢さん、会場である hiraful188 オーナー大迫理沙さんからニセコの特性や地域事情について話してもらいながら、観測会参加者のニセコの印象やフェス開催の可能性について議論を行いました。



仮想フェスのイメージビジュアル



運営メンバーによる事前視察

【意見要旨】

- 羊蹄フェスとして、羊蹄山の周りで団結して何かできたら絶対面白いだろうし、ニセコがニセコ町と倶知安町が分かれていると認識している人はほとんどいないと思う。一体となったイメージをどうつくっていくのか、これからの課題だと思う。
- ニセコが倶知安と分かれているという話があったが、僕らからすれば一緒に見えるので、変に分けるのではなく羊蹄山をメインにやれば面白いのではないかな。
- 移住者も含め、羊蹄山は昔から自然のエネルギーをもらって恩恵を受けている民族という視点を持てれば素晴らしい。
- 後から引いた人為的な線ではなく、地形や環境が育んだ民族性のようなものが共有できればよい。
- それぞれの土地で演奏すれば絶対その空気が出てくると思うし、今日のライブもここらしいなという印象をすごく受けた。
- 羊蹄山を中心にやるとなったときの規模が大きすぎて、果たして一つのフェスができるのか。ただし、会場になり得る環境は、スキー場もあればだだっ広い広場もあるし、意外と整備されていたり、車の便も良かったりする。その素養はすごい感じた。
- 2025～30年には管内のほとんどの市町村は人口が半減していると思うので、小さな

イベントからこつこつとやっていった方がよい。

- オーストラリアからの観光客が多いので、オーストラリアのフェスを日本で開催して、その逆もあり得る。
- まず人がいないところでやるには地元の人が絶対必要で、例えば人がたくさんいる時期に何かイベントを打って、そこから何かを育て上げるのが近道なのではないか。この会場でも DJ パーティーなんていくらでもできる。でかいステージをつくるのではなく、お店の人達と仲良くなりながら、お店でカフェライブ的なものを繰り返しやって、冬にここで DJ イベントとかやったら、外国人が必然的に集まる場所なのではないか。オーストラリアのミュージシャンを連れてきてもらってライブすることも考えられる。規模の大きなものを一気にやろうとするとそれに対する対価もかかるしギャンブルになりやすいので、一旦空気感を整えてから段階的にやっていくと面白んじゃないかと思う。本州は 1 回壊さないと次のことが始められない。物理的なものもあるけど、上の世代の意識も壊すことになる。今回北海道に来て移民の文化をすごく感じて、そういう意味では壊さなくとも新しいことを始めることに関してはゼロスタートで行ける場所だなと感じている。

【懇親会の様子】



観測会 2 日目(10/30)

10. ワークショップ ROUND2「ローカルフェスマッピング」

10-1 ワークショップ ROUND1 の振り返り

2 日目は「ぼくらの文楽」を事例として、ワークショップ ROUND1 の振り返りから始まりました。主催者の船山裕紀さんから①場所、②実行委員会・スタッフ、③アーティスト・タイムテーブル、④音楽以外のコンテンツ、⑤料金・事業規模、⑥継続性・継承性の考えについてお話いただきました。ここでは本ワークショップの最も重要なテーマである「継続性・継承性」に関して船山さんの話を一部抜粋して紹介します。



【ぼくらの文楽の継続性・継承性について（船山裕紀さん）】

ぼくらの文楽には 10 年計画書が存在していて、始めるときに「10 年でやめます」といって始めました。逆に言うと、10 年間は必ずやりますので僕のことは信頼してくださいと。ただ、10 年後に自分がターゲットとしている 30 代の気持ちがわからないので、僕は 40 歳でやめるということです。最初から 2020 年までと言っているの、行政や公民館、地域の人も全て 2020 年まで続けられるように補助や助成を組んでくれました。最初は信頼されなくて、自ら赤字を背負ったんですけど、「あれは続けないとだめだ」という方向になっていき、役所の課長級の人や議員の方が動いてくれました。その結果、市として事業化することになり、公民館の主催事業として進んでいきました。

そのため 2020 年までは必ず予算が出ます。そのタイミングで僕はやめますが、今年西根地区の若者が「継承します」と言って出てきました。また、その同級生が今年から公民館の新しいスタッフとして関わり、ぼくらの文楽にも参加しました。

公民館も地域も長井市もなくなっていくから、人事をどんどん行ってくれていて、様々な団体の大綱・規約が「ぼくらの文楽に協力しなさい」というふう書き換わっています。どんどん継承の方に動いており、2021 年からはその二人が中心になって、僕らがサポートするかたちでやっていきます。あとは彼らが自分の地元をよくするために、彼らがやりたいようにやるでしょう。



ぼくらの文楽 2016 の様子

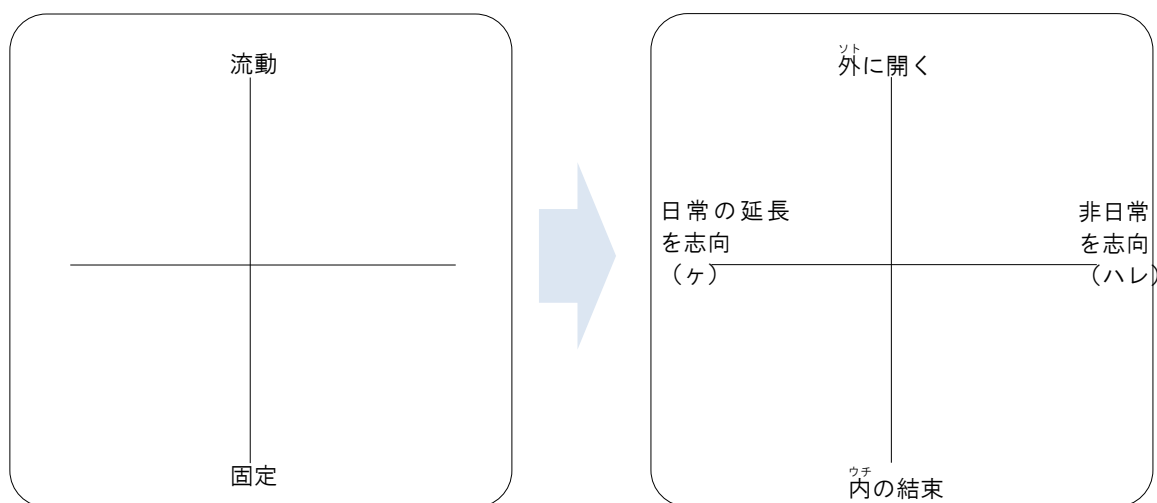
10-2 ローカルフェスマッピング

一日目に行った6つのキーワードごとのマッピング結果を総合して、自らのフェスを一つの「ローカルフェスマップ」に位置づけてもらいました。作業は前日同様のグループに分かれ、主催者同士の対話を行いながら進んでいきました。作業開始時には、マップの座標軸は「流動／固定」でしたが、フェス研究者同士の対話から座標軸が更新され、新たな座標軸に基づき、ローカルフェスのマッピングが行われました。ここでは、最終的なマッピングが完成されるまでの流れを紹介します。

10-2-1 座標軸の更新

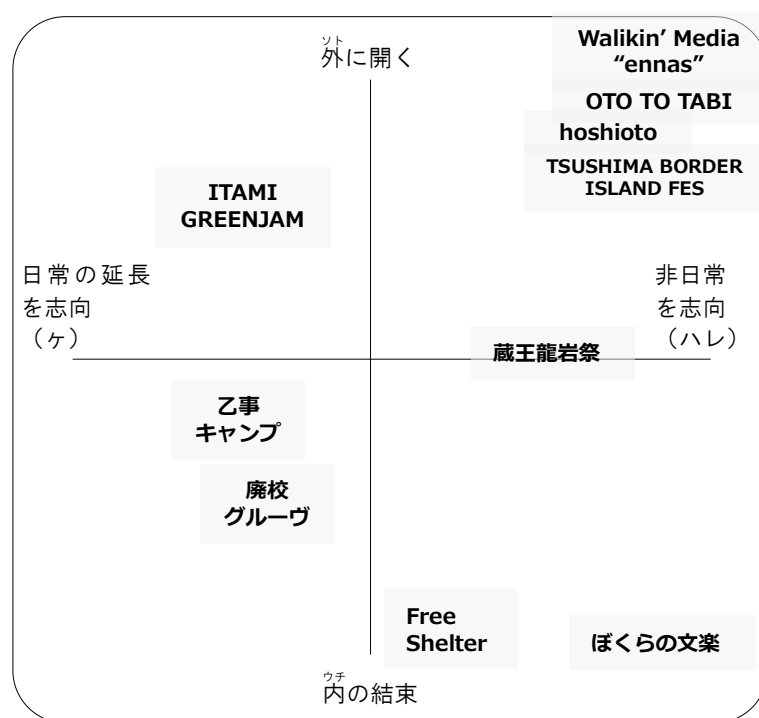
フェス主催者が作業をしている過程で、自然とフェス研究者同士の対話も始まり、ローカルフェスマップの座標軸が「流動／固定」(左)の単純な図式から、「^{ソト}外に開く／^{ウチ}内の結束」、「日常の延長を志向(ケ)／非日常を志向(ハレ)」(右)へと更新されました。これにより、ローカルフェスにも差異があり、その現象が「フェス」という言葉では一括りにできないことを認識することにもつながりました。

【座標軸の更新】



10-2-2 新たな座標軸に基づくマッピング

新たな座標軸に基づいて、フェス主催者に主催フェスのマッピングを行っていただきました。



【マッピングの理由・意図について】

小此木 (Walkin' Media "ennas") : まず、「日常の延長」が想像できなくて、普段ないものをつくりだす、知らないものを提供する感覚です。

山崎 : 「普段知らないものを提供すること」を日常化する感じではない？

小此木 (Walkin' Media "ennas") : それを常態化させたいという感覚はないです。自分達がやったその先で持ち帰ってもらえればと思ってるので。僕たちの意識としては非日常空間を提供したり、非日常のイベントを提供したいという感覚でいます。「内と外」は、僕らは地元とか身内という感覚はゼロでやってるので、メンバーすらも寄せ集めで流動的になってもいい。

山崎 : 流動化することで困難を伴うことはありませんか？

小此木 (Walkin' Media "ennas") : あります。そもそもイベントをこうしたいという固定概念がないので、そのとき、そのメンバー、その状況で、じゃあ今年は何をするかという感覚でつくっています。常に外に発信していて、内部のメンバー、実行委

員、お客さんにしてもその中だけで固まってほしいとか、僕たちのイベントに来るお客さんが固定してほしいという感覚も全くないので、毎年違う人が来ればいいと思っています。固定客がついてくれたらそれはそれで嬉しいですが、常に新しいこと、外を見てオープンにしていきたい感覚です。

南(OTO TO TABI)：非日常を来てもらった人に感じてほしい、そこで感じたものを日常に持って帰ってほしいというのは常にあります。日常のようでもあり、次の年はまた新しいことを常にやっていきたいので、非日常側にマッピングしました。「内と外」は、地域性があまりないイベントで、北海道の冬の音楽フェスとしていますが、札幌にこだわりはもっていません。外の人にもっと魅力を発信していきたい部分が大きいです。

藤井 (hoshioto)：僕の場合、1年に1回その場所に行けたらいいので、日常の延長ではないです。非日常感をやっぱり出したい。フジロックに憧れて hoshioto をやっているの。実は自分のイベントがそのままイコールフジロックになっているんです。「内と外」について、スタッフは内を向いている人が多いので、彼らを外に向けたいし、外に発信したい。岡山県井原市美星町でやっているんですけど、個人的には「岡山県井原市」を知ってもらいたいイベントではあるので、外には常に向いていると思います。

小宮 (TSUSHIMA BORDER ISLAND FES)：そもそもうちの島にフェスが存在していなかったの、それを生み出したという点では「非日常を志向」になると思います。今後内容はどんどん変わっていくと思いますが、島にないものをどんどん取り入れていきたいです。例えば、島には映画館がないのですが、来年あたりは野外シネマをやりたいと話しています。その意味では非日常ではないかと思って、ここにマッピングしています。縦軸で言うと、実行委員の内の結束は非常にあります。本当に対馬出身・在住、特別対馬に愛着のある方しか入れていません。その意味では「内の結束」ですが、本来の目的は対馬の魅力を全国に発信していくこと、隣に韓国がありアジア圏にも発信していくという大きな目的があるので、「内寄りの外」でここにマッピングしました。

大原 (ITAMI GREENJAM)：ITAMI GREENJAM は一つのフェスなんですけど、根本的にはプロジェクトだと思っています。そのプロジェクト団体が1年に1回開催するフェスが ITAMI GREEN JAM という捉え方をしています。それで GREEN JAM のビルをつくったんですけど、そこでいろんなクリエイターの子たちが結構な頻度で集ったり、海外に渡っていろんなことを吸収して来たり。そういうこと

を 364 日行って、1 年に 1 回それを披露する場が ITAMI GREENJAM という感覚なので、日常の延長だと思っています。それが来場者さんにとって非日常に映ることもあると思いますが、僕らの感覚としては日常の延長の 1 日。その子たちの発信を外に、伊丹市外、関西、全国に発信することが大事だと思っているので、「外に開く」にしましたが、無料フェスなので、行政やまちの方のご支援であるとかで成り立っているのも、市内に目を向けることも当然必要とされます。そのため、完全に「外に開く」に振り切るわけではなく、少しだけ「内の結束」に寄せた感じですよ。

鏈水（蔵王龍岩祭）：龍岩祭は日本語でやっていますが、それは祭りをやりたいからなんです。祭りはだいたい 1 年に 1 回。神輿を担いだり、日本人にあるエモーショナルをその日に出そうということでやっています。その意味では「非日常志向」かなとは思ってますが、現場には何も残ってないけど、なんか爪痕というか、響く何かをつくりたくて。それを日常に持って帰らせたいので、すごく難しかったんですけど、非日常をつくってそれを日常にしていこうよという感覚ではいます。東北ってエモーショナルからの爆発があって、「内と外」は、バランスいいところで真ん中かなと思いました。

高橋（乙事キャンプ）：乙事キャンプは「楽園は本当にある」という意味なんです。それを追求していきたい祭りで、ここにいる人達全員で楽しいという気持ちになったら、絶対楽しいと思う。それが何百人という人が同時に楽しいという気持ちを味わうことを日常的にもほしいから、日常寄りだと思っています。始めた頃は「乙事キャンプは身内寄りだよ」と言われるのが嫌で、「そんなつもりない、外に出してる」って思っていました。今言われるのは、外から来る人は昔からの友達とかそういう集まりに見えるんだけど、入ってみるとみんな知らない人同士なんだけど家族になっちゃうような。だから「内向きの結束」があるからこそ、ファミリーになると外に響いていくということではないかと思います。だから気持ち的にはこのような日常を世間に広げていきたいという想いはあるけど、本質的には内寄りかなと思いました。

波多（廃校グルーブ）：今塩江という山でやってるんですけど、山遊びとか山のよさとかそういう昔当たり前にやっていたことをもう 1 回見直せるようにしたい。音楽以外は、そういうものをいっぱい出していきたいというのがあるので、日常側にしました。「内と外」は、自分は厳密には塩江の出身ではないんですけど、地域に受け入れてもらうためにも、すごく一体感を出せるような出店者、アーティストにしたかったので今回は内寄りなんですけど、今後は外になるような気がします。

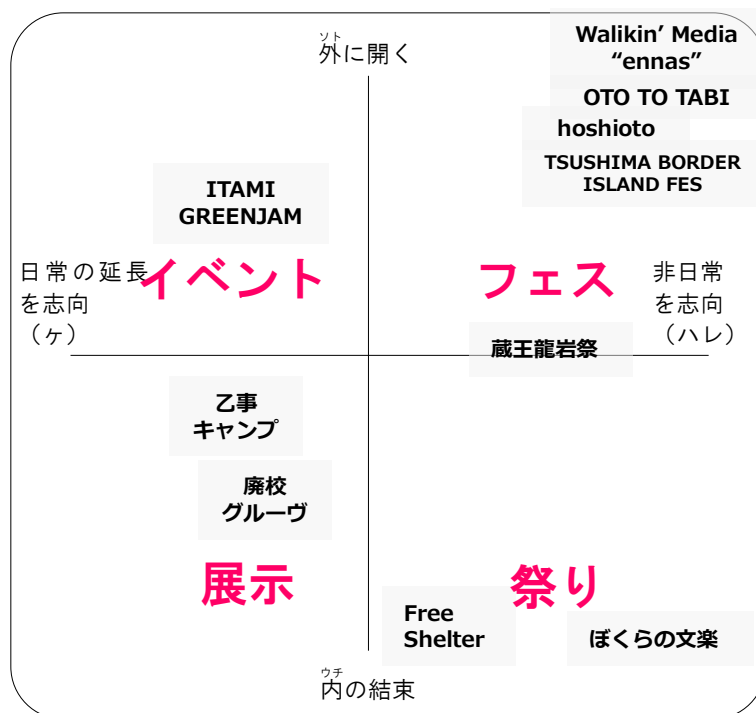
田村 (FreeShelter) : すごく悩みましたが、今皆さんの話を聞いて、内の方に振って合ってたなと思いました。昨日チームでも話していて、地元の富士・富士宮エリアは結構広くて、いろんな音楽活動をしている人が混ざり合わないのを、混ぜたいというのが元々の話だったので、全 32 組アーティストいる中の 20 組くらいが地元のミュージシャンです。自分たちがやろうとしたきっかけからすると、「内の結束」だなという感じです。今中止を挟んで 6 年目なんですけど、本来混ざってなかった人達が目に見える形で混ざり始めて、ありがたいことに地元の僕らのイベントで出会った、あそこで DJ やバンドやってたりとか、一緒にイベントやり始めたりとかを聞くようになりました。全然地元を出なくて部屋で毎日音楽つくってる人が、お前面白いから来いよとイベント呼ばれるようになったりということがたくさん起きてきて、主催の二人で最初に言ってることができてると思います。僕はまちづくり系の仕事もしてるんですけど、「君達面白いから来年こっちでやってよ」という話が出てフェスっぽいものをまちなかに持ってくる、やってくれという話になって、来年は「外に開く」感じにしようかなと思っています。仲間も増えたし、内に向いてやってきた結果、混ざって育ってきたなと感じています。今までは「内の結束」で、完全にこちらに振り切ってますが、来年は「外に開く」にいきたいなと思います。「日常／非日常」はすごく悩みましたが、イベントなので非日常かなという感じです。

山崎 : 「内の結束」はフェスの組織内の結束なのか、どんどん地域に開かれて、フェスだけでなく地域の中での結束を目指していくのか。「外に開く」はフェスを地域に開く、あるいは地域外に開かれていく二つのベクトルがあるのかなと思いました。

船山 (ぼくらの文楽) : みんなの話を聞いていて、だんだんここで合ってるのか不安になってきましたが、地域のお祭りみたいなものを非日常と考えたら、縁日とか獅子舞、神輿みたいなものを僕らは目指していて、内のお祭りに外の人が面白そうだと来るものを目指しているので、僕らもここで合ってるのかなと思います。「内の結束」を高めてその祭りの質をよくして、外の人が勝手に来るし、別に来なくてもいいと思ってるし、地域の人が楽しければいいのかなという感じです。(規模は) 大きくはしたくないですね。ありがたいことに外の人がたくさん来てくれてるんですけど、僕らは中の西根地区の人がたくさん来ることを望んでいます。

10-2-3 ローカルフェスマップ 4 象限の名づけ

各フェスのマッピングが一通り終了したところで、研究者の永井さん、南田さんから 4 象限それぞれの分類名称について、下記の提案がありました。



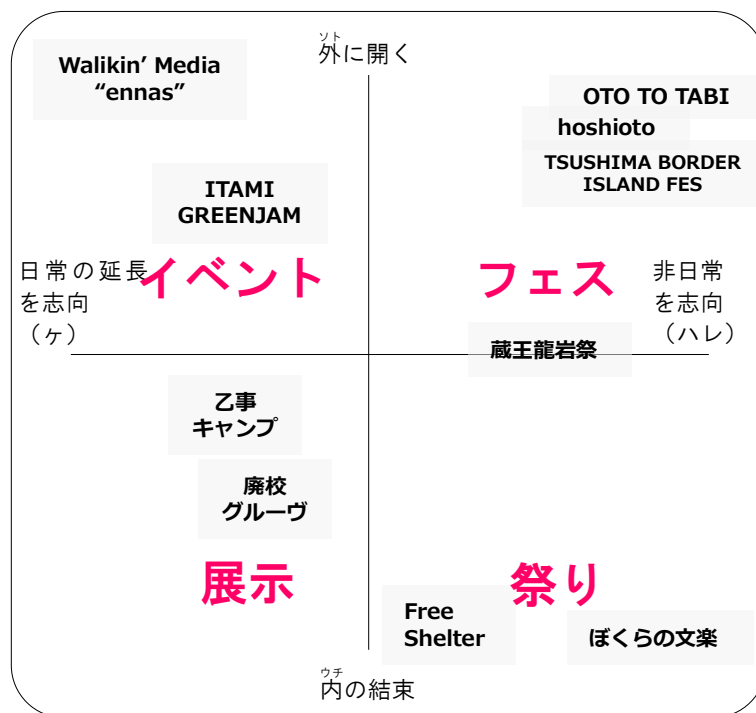
【コメント】

永井：「ウチ／ソト」「ハレ／ケ」が民俗学でよくいわれる考え方で、いわゆる伝統的な地域の祭りが「祭り」になります。内の結束を高めるためにやる祭り。そのバリエーションとして三つあるんだと思います。まずお客さんをしっかり入れよう、見てもらおうとなると、外にそれが開いていくかたちになっていく。「フェス」がここに来るのかなと思います。非日常を提供してお客さんに来てもらうということです。「イベント」が「祭り」と一番対になる概念なんですけど、どちらかというと新規のお客さんに来てもらうために、新しいものを提供するイメージです。最後の「展示」は、見本のようなものを常に出して、「こんなふうにライフスタイルをしましょうよ」というものだと思います。

南田：ただしこれは定義ではなく理念型です。「展示」と言われるともしかしたら悪いイメージがあるかもしれないですけど、「人びとが動くけど、しかし展示である」ということがすごく面白いことで。例えばフェスティバルでやってたけど、常設展示みたいなものも考えられるかもしれません。イベント的なものとフェス的なものの繋がりや差異も考えてみると面白いのではないのでしょうか。

10-2-4 ローカルフェスマップ確定

4 象限の分類名称を踏まえて、フェス主催者が再度フェスの位置を確認し、下記の通りローカルフェスマップが確定しました。



【マッピング作業の感想・各フェスの位置づけについて】

山崎：「フェス」から「イベント」に移動した理由は？

小此木 (Walkin' Media "ennas")：そもそも自分達のやりたいことが、普段ないものをつくりたいことなので、非日常だと思ってました。でも、中身を見たら、日頃活躍されている作家やアーティストの人達を寄せ集めて作っているので、その人達にとっては全部日常でしかない。それをまだ知らない人や繋がっていない人達にお披露目したいという感覚があるので、内容的にはどちらかというと日常の延長だったのかなと思います。初めて来る人にとっては非日常なんですけど、コンテンツや中身を見たら常態化しているものの延長線上にあるものをつくってるんだなって、先程の分類を見て移動しました。

高橋 (乙事キャンプ)：マップの位置はしっくり来てます。やっぱりそれをみんなに見てもらいたい。僕とか中心メンバーは仕事も辞めたし、フリーランスなんだけどそれは10年前では考えられなかったことです。乙事キャンプに来たらいろいろな生き方があるんだと思ってもらえます。

波多（廃校グルーヴ）：ライフスタイルというのがしっくりくると思いました。この位置でいいような気がします。

藤井（hoshioto）：始まる前からラインナップとか考え方について、特に「OTO TO TABI」は似てるんだろうなと思ってました。「TSUSHIMA BORDER ISLAND FES」に関して、小宮君は近い人間だなと思っていました。あと、個人だけに自分のところは「フェス」なんだとわかりました。

小宮（TSUSHIMA BORDER ISLAND FES）：意外ですが参加メンバーの中で唯一「フェス」という名前をつけているのですが、個人的には外に打ち出していきたいという意味でのネーミングではあったりします。マップの位置はしっくり来ています。4 分類共に確かになと思うし、「フェス」に固まっている 3 つのフェスでも話をされていて、音楽に関するラインナップ、なかったものをつくっているという意味でも、近いところはすごく多いです。

川畑（OTO TO TABI）：僕らのものすごくしっくり来ています。今まで他のフェスとの立ち位置は何となくわかっていたんですけど、言葉やマップでビジュアルにして見えたのがとても良いなと思います。確かにフェス寄りで新しいものをつくっていきいたいとか、見たことないものを見せたい。みんなで焼き肉をしてわいわい楽しむというよりは、現代アートを見に行くような方に近いと思っています。

大原（ITAMI GREENJAM）：すごくしっくり来ています。うちのフェスは来場者数が多くて、去年は 1 万人なので、僕らの感覚ではフェス風のイベントと考えています。うちのイベントは 6 割ぐらいがファミリーで、1~2 割は 40 歳以上の方もいらっしゃるんですけど、そういう方々にフェス体験をしてもらう感覚でやっています。

津田：僕は日本のフェス全体を見ているので、例えばフジロックが実は「フェス」だけど、少し下寄りになってるとか、「朝霧 JAM」はどこにプロットされるのか、橋の下音楽祭はどこなのかとか。「フェス」の中でも 4 象限を区切って「ULTRA JAPAN」はどこになるのか、というのを考えると面白いのかなと思います。

山崎：今回はローカルフェスに着目して、規模的には地域社会の中で循環できるフェスの主催者に集まっていたいたので、また違った切り口でのマッピングもできるかもしれません。

星石（OTO TO TABI）：ライジングサンにも同窓会的要素があり、そこでしか会わない人

もいると思います。

永井：北海道はもっとエリアごとに分かれていると思いますが、ライジングがあることで、「北海道という地元感」があるのではないのでしょうか。

南田：ライジングにはさまざまなオブジェとか「ガチャガチャ」があつたりとか、展示的な側面もありますね。もちろん統合的なフェスですが。

西尾：ライジングも昨日の小島社長の話を踏まえると、事業全体では様々な音楽施設を運営したり、意外と日常かもしれないなと思いました。その意味で、実は ITAMI GREENJAM とも近いところがあるかもしれません。全体を通じて、外側から見える視点と主催者の意図との違いが面白いと感じました。



1 1. 総括

最後に、観測会 2 日間を終えてのフェス主催者の感想を紹介します。

田村 (FreeShelter) : マッピングがじっくり来て、最後に来てよかったなと思いました。
これからいろいろ新しいこともやろうとしてるので、いろんな話も聞けたし、こういう仲間に会えたのも良かったです。あとは羊蹄山ですね。僕は静岡から来て富士山の世界遺産のガイドもやっていますが、感じが似ているんですよ。また集まりたいです。

小此木 (Walkin' Media “ennas”) : 運営スタッフの部分のをぞいたら、正直フェス主催者と言われること自体が、実は違和感があったんです。最後のマッピングは自分の中でじっくりきた部分があって、観測会の一助になれたかなと思います。夏にここに来た時に羊蹄山が最高だったし、山崎さんと「ここに全国 みんなが集まるのか」とすごいワクワクで、そこから紆余曲折ありながらも、こうしてみなさんとお会いできたのは感極まるような感じです。想像以上の現象というか、事象が起こっていました。山崎さんにとってはこれは研究の過程なので、山崎さんのことも皆さんで応援していけたらと思います。

藤井 (hoshioto) : 「どうなるこの 3 日間」と思いながら新千歳空港に降り立って、初日はテリトリーを持った中での会話がありましたが、終わってみて良いライバルでありいい仲間であることをすごく思いました。すごく皆さん刺激を受けたと思いますし、僕も考え方がすごく変わったところがありました。去年 3 月に開催したワークショップは一日で、あれも刺激を受けたんですけど、これだけ同じ時間いたらめっちゃめっちゃ面白いですね。今後この流れを絶対繋げていきたいと思います。

高橋 (乙事キャンプ) : 僕もすごく楽しかったです。このようなマッピングをうちのイベントのコアメンバーでもやろうと思いました。そうすると自分たちのイベントでもメンバーによって認識が違う気がします。すごく勉強になりました。

船山 (ぼくらの文楽) : 2 日目からの参加でマップに関しては言える立場にないのですが、山崎君が長井市に 2 回足を運んでくれて、僕はその恩返しのつもりで今日来ています。わざわざ長井まで足を運び、泊まって歩いてくれて、僕の娘達と遊んだり、西根地区の前公民館館長の家泊まって、そのお孫さんと遊んでくれたり。その恩返しとして、何かできることがあればお手伝いするというかたちで来ました。

鱧水（蔵王龍岩祭）：当初「やらないかも」という話になったときに⁸、今回やらなかったらやらないだろうと思って、飲み会に参加する気持ちできちゃいました。でもね、この展開は目から鱗の展開が多いし、自分でも「軸ってあったんだな」と気づかされる部分がすごく多くて、みんなが終ってから気持ちよく帰れるようなこんな会議ってないなと思いました。個人的にはこの辺でフェスをやっていただければ来ます。倶知安の片鱗を見ることができたし、爆発する要素をすごい感じてしまって楽しい方向に話が進む気がしました。

川畑（OTO TO TABI）：ものすごくいろんなことを教わったし、他のイベントにもものすごく興味が出てきて、どれも行ってみたい、行く計画を立てたいと思いました。そのような交流がこれからもできればいいなと思います。

星石（OTO TO TABI）：フェスというキーワードで僕ら今回集まって、こうしてみるとフェスという言葉の中でもいろんな捉え方があって、それぞれのイベントごとに考え方が違うことを改めて確認しました。ただ、フェスという言葉で引っかかってここに集まった共通の認識ってどこかにあるんじゃないかと個人的には考えています。僕は言語化できないんですけど、そういった部分をこれからも大事にして自分のイベントをしていくことと、皆さんのフェス、イベントを見ていきたいなと考えています。

南（OTO TO TABI）：北海道は歴史が浅いこともあり、それぞれのイベントの成り立ちや思いを知れたのもよかったんですけど、行きたい地域が本当に増えて実際の生のものを見たいなっていうところが大きかったです。それと、この場をつくってくれたことが本当によかったです。そのような場を作りたいと思いながらフェスをやっているところもあるのですが、進行もこのように考えをまとめるのも本当にすごい大変だったと思うんです。私達が学術的に考えることを全くやったことなかったのですごく勉強になりました。最終的にどのような研究のかたちになるのかもすごく楽しみにしています。

小宮（TSUSHIMA BORDER ISLAND FES）：癖の強いオーガナイザーをオーガナイズしてくれた山崎さん、お疲れ様でした。今回こうやって学術的な観点からフェスを考えることが今まで全くなかったのも、僕も参加するまでどうなるのかなと思ってはいたんですけど、蓋を開けてみれば、すごい面白くて皆さんの話も参考になることが多くて、別のフェスにも参加させていただきたいと思いました。この中で一番若いフェスなので、いろいろ参考にして、持ち帰り、また来年以降面白いフ

⁸ フェス観測会 2016 は開催直前に筆者が体調不良となり、開催が危ぶまれる事態がありました。

ェスにしていきたいという気持ちが強くなりました。昨日は音響での連携の話もあり、そういうつながりも生まれたので、このつながりは絶対なくしたくないと思います。

波多（廃校グルーヴ）：最初にお話しいただいたときに本当に行っていいのかなという思いもありましたが、四国には面白いイベントやフェスがいっぱいあるなかで、うちは始まったばかりで小さいので、そういう対比の部分でもいいのかなと思って参加しました。昨日小島社長の話などを伺って、うちは一番小さいフェスを目指そうと思いました。その代わりお客さんやスタッフがファミリーのような、今回の3日間のような、みなさんと仲良くなれるような運営を目指そうと思います。

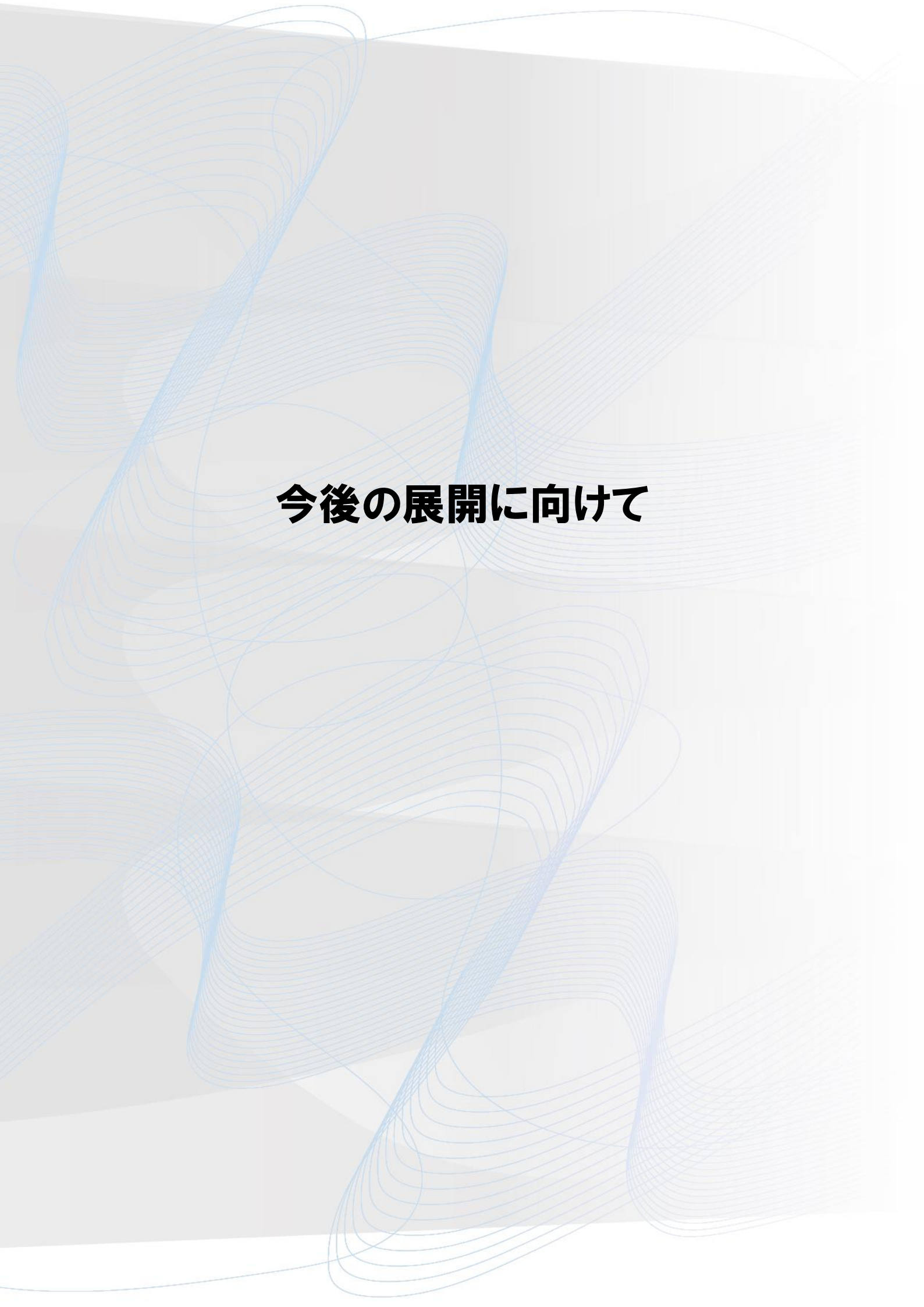
大原（ITAMI）：フェスをされている方がどういう気持ちでしているのか、すごい知りたくてウェブで「フェス主催者」と検索してインタビュー見たりとかするんですけど、この距離感でいろんなフェス主催者の方とお話しできてめちゃくちゃ勉強になりました。この場を作っていただいた恩返しは必ず ITAMI GREENJAM を通してさせてもらいます。

【参加者の感想（一部抜粋）】

- 研究者として、主催者の方には見えるけど僕たちにはわからない景色が本当にあると感じた。ただ、「祭り」や「展示」のような形で示して整理することはできと思うので、それが研究者としてやるべきことだと思った。
- この場所が知的なフェスティバルというか、普段は裏方でほぼステージには立たない主催者が、ここである意味でのステージに立っているいろんなことを話して、考えが変わったり、最後はちゃんと涙まであって全体がいい「お祭り」だった。一つの論点として、公園や廃校等、公の場所で開催していると行政との関わりが多かれ少なかれ出てくるので、今回の成果がその開催を理屈づける材料になると思う。また、最終日のぼくらの文楽の話がすごく衝撃的だった。印象深かったのは、子どもたちがこのフェスを見て、たとえ地元を離れるにしても帰属意識や郷土愛、いい思いを持って郷土を離れていく役割がきっとどこかにあるはずだということ。それは社会教育の機能もあるはずである。それをもっと世の中に伝えていけば、フェスティバルが文化としてもっと根付くのではないかな。
- それぞれみんな違うということがすごく伝わった。まちがフェスとすごいつながりがあり、アーティスト側としてもそのまちに行きたいという気持ちがあるので、すごく勉強になった。
- 普段はクラブカルチャーに関わっている人間として、最初は地方のフェスに差があるのかと思っていたが、4 象限にまとめたり、それぞれのフェスのかたちがあることが分

かり、見通しがすごくよくなったという気がする。東京のシーンはタコツボ化していて、地方のフェスの方がいろんなアーティストが混ざり合うことが多いと感じており、逆に都市でできることを模索していきたい。

- フェスという言葉自体が一般の言葉になっていて、自分の思考が安易な感じになっていたなと思った。今回同じフェスという言葉の中でも一人一人がいろいろな思いを、これまで言語化されていなかった思いも含めて沢山あると感じた。
- 仕事で東京や関東近辺の主催者にはたくさん会っているが、地方を含めていろんな主催者に一緒に会うことは今まで全くなかったので、主催者さんの核に触れていると感じがすごいで、よりローカルなイベントをもっとサポートしていきたいという気持ちが強くなった。
- みなさんの話を聞いて、どうして日本にフェスがここまで広がっていったかを考えろと言われてきたが、実際に皆さんに会って話を聞き、その思いをまとめていけるなという自信がついた。
- フェスが多くなってきたからか、「どれも同じだね」と言う人がいるが、それは違うだろうと思っていた。私は現場に足を運んでいる人間なので、各フェスの特色や思いがまちの人達に伝わればいいと思っていた。実際参加してこれだけの特徴がありながらも、フェスにかける思いは共通してすごい高い熱量があるのをまざまざと感じた。
- フェスは「どこまでがフェス？」とすごく言われるが、僕の定義としては人が集まって少しでも音楽があり、つながっていく体験があればフェスティバルだと思っている。ここに集まっている方々のイベントは僕の中ではすべてフェスティバルであり、祭りである。そういうものを多くの人に届けられるように影ながら応援していきたい。
- 長い間、自分で考えていたことがふっと溶けるようなことがあった。想定外だったのが、こんなにも帰る時さみしくなるのかと、もらい泣きしてしまった。
- 社会学の研究はどうしても上から目線になってしまい負い目を感じることもあるが、それをまったく気にしなくてよく、あたたかく受け入れてくれてすごく嬉しかった。フェスの魅力の大きな一つに知り合いが向こうから歩いてきて、「乾杯！」という楽しい瞬間があるが、その仲間が増えたのもこの会の収穫だった。
- 主催者、アーティスト、サポーター、研究者、研究のスポンサーもいて、研究はこのように現場に還されるべきだし、そこから研究者に戻されるような循環ができてはじめて社会に還元されることをすごく感じた。
- 多様な人が集まって生態系がつくられる。誰かのための会ではなく、みんながつくりあげていく状況が作れることはすごいと思っていた、本当にここは奇跡的な場と思った。
- フェスの可能性をすごく実感した。まさにフェスがより住みやすい、より楽しい社会をつくっていくための動きなんだと感じた。ただ、まだ「フェスって何？」というところは全然あるので、価値づけをしっかりとしないといけないといけない。



今後の展開に向けて

12. フェス観測会 2016 を終えて

12-1 社会の新たな価値の創出をめざして

「フェス観測会 2016」は研究プロジェクト「現代の祝祭性をマネジメントする—音楽フェスティバルの主催者同士の対話を通じて—」の一環として実施しました。当プロジェクトが助成を受けたトヨタ財団が掲げたテーマは「社会の新たな価値の創出を目指して」です。本プロジェクトでは、従来フェス研究で着目されてこなかった「主催者」に焦点を当てました。あらゆる場所にフェスが遍在するようになった現代社会において、フェスの「内と外」の境界線上に位置し、フェスの「外側」の視点を持つフェス主催者同士が、「なぜ私達はフェスを主催（オーガナイズ）しているのか」という問いを基に対話を実施しました。それは、当事者であるフェス主催者が「フェスを主催すること」に対して自覚的になること（祝祭性のマネジメント）を意図したものでもありました。

観測会を終えてみて、「フェス主催者」こそがこれからの社会を先導する存在であり、彼らを社会的に価値づけることが、従来のフェス研究を継承し、なおかつ更新するものであると確信しています。

12-2 主体的な参加者

2000 年代の全国各地でのフェスの台頭、及び 2010 年以降にはローカルフェスが急速に増加する一方で⁹、日本におけるフェス研究はあまり広がりを見せていません。その理由はどこにあるのでしょうか。筆者は、フェス研究が「参加者」研究から始まり、彼らがある種の矛盾した存在として位置づけられてきたことにその要因があると考えます。

フェスはその「参加者」が注目されたところから研究が始まりました。1997 年のフジロック第 1 回目では悪天候の中、フェスに不慣れな「参加者」が会場内外で大混乱をきたす様子が報じられました。また、1999 年に会場を新潟県の湯沢町スキー場に移してからは、特定のステージに執着せず、場自体を楽しむフェス「参加者」の体験が注目され、フェスが社会に広まる大きな契機となりました。

これを受けて、2000 年代前半から参加者に着目したフェス研究が始まりました。代表的なものとして岡田（2003）¹⁰、南田（2004）¹¹、永井（2006）¹²が挙げられますが、そのどれもがフェス参加者を「成熟したオーディエンス」として捉えています。南田は「そこで共有されるノリ、つまり一見すると動物的に見える即時的な反応は、さまざまな縛りから解放された聴衆が、能動的かつ主体的に選択したふるまいとしてとらえることができる。これはむしろライブ文化における『成熟』を表している」（南田 2004：18）と指摘してい

⁹ 日本全国におけるフェスの広まりに関しては、P73 以降の「付録：フェスアーカイブ」を参照のこと。

¹⁰ 岡田宏介（2003）「イベントの成立、ポピュラー文化の生産——「(悪) 夢のロック・フェスティバル」への動員はいかにして可能か」東谷護(編)『ポピュラー音楽へのまなざし——売る・読む・楽しむ』勁草書房, pp.102-124

¹¹ 南田勝也（2004）「いま、野外ロックフェスに集まる人々—音楽ライブにおける聴取スタイルの変容（特集 現代ライブエンタテインメント考）」『アウラ』(164), pp.14-18

¹² 永井純一（2006）「＜参加＞する聴衆——フジロックフェスティバルにおけるケーススタディ」『ポピュラー音楽研究』10, pp.96-111

ます。複数ステージが同時進行するフェスの会場内で、特定のステージに執着することなく、会場内を渡り歩きながら主体的に会場の雰囲気をつくる「参加者」像がここには描かれています。一方、岡田や永井が指摘するように、「主体的な参加者」とは決して彼らの自発性のみで創出されたものではなく、メディア・文化産業側の「動員」がありました。具体的には、フェスにおけるマナーを呼びかける雑誌メディアの啓蒙があり、ある種の規範が形成されたことは確かでした。しかし、いずれにせよ、2000年代、フェス参加者は従来の聴衆像を更新した「成熟したオーディエンス」として好意的に受け止められていました。

12-3 参加者の主体性への疑い

一方、2000年代後半に入ると、フェス参加者はネガティブなイメージで語られ始めます。その代表例が東浩紀の「データベース消費」¹³の文脈でフェス参加者を捉える言説です。データベース消費とは、音楽を例にとると、これまでは作品（CD）の背後に作者のバックグラウンドや時代背景といった物語を読み込むことが一般的な音楽の消費体験でしたが、今では iTunes や Spotify といった膨大な音楽データベースの集積から、その都度、自分の生理的な欲求に基づき音楽を個人的に消費する事態を指します。それは、個人が能動的に音楽を聴くというよりは、アマゾンのレコメンデーションシステムと同様、自分が好きな音楽をデータベースによって選ばされている事態といえます。

南田（2007）では、このデータベース消費の観点からフェス参加者が論じられ、参加者がその場その場の音に即物的に反応するさまは動物的であるとし、現代社会の文化現象一般とフェスとの接続が試みられています¹⁴。その上で南田は、『動物化』は以前の時代と比べて、退行なのか、それとも成熟なのか」と問い、他者を介在しないデータベースの内部に留まらず「外へとつながる回路」の重要性を指摘しています。また永井（2008）では、複数ステージやステージ以外の様々なコンテンツ（断片）を紡いでいくような「断片の快楽」がフェスにはあると指摘されています。

このように当初は成熟したオーディエンスとして捉えられてきたフェス参加者も、2000年代後半にはデータベース消費の観点から、その反対である「退行」という文脈で捉えられるようになります。この時代には、既に全国各地でフェスが開催されるようになり、初期フジロック参加者は10年以上のリピーターとなり、フェスに順応していきます。そこには確かに当初見られた創意工夫が少なくなってきたという側面もあるでしょう。また、この時期にはフェスが商業的にある程度成功することが実証され、フェスが「手軽なレジャー」として大衆化します。そこには複数のステージとアーティスト、音楽以外のコンテンツというフォーマット化されたフェスのデータベースが用意され、参加者はそれを動物的に消費するということが現実として起こってきたと言えます。

¹³ 東浩紀（2001）『動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会』講談社

¹⁴ 南田勝也（2007）「メディア文化の未来—身体へ波及するデジタルなモード」富田英典・南田勝也・辻泉(編)『デジタルメディア・トレーニング—情報化時代の社会学的思考法』有斐閣, pp.227-249

12-4 フェスは現実社会をやり過ごすための緩和剤か

このようなフェス参加者を「管理された主体性」、「消費の一形態としての参加」とする社会的評価は現在に至るまでさほど変わっていないように思えます。2016 年 10 月に出版された永井の『ロックフェスの社会学—個人化社会における祝祭をめぐって』においても、その流れは継承されています。永井はフェスの体験を以下のように説明します。

シミュラクルと化したフェスにおける体験は、日常生活にフィードバックされ、重ねあわされる。重層化した出来事に対処し、同時進行する人間関係をマネジメントすることは、現実世界となんらかわりがない。〈参加〉とはそれをうまくやるやり方であり、フェスを楽しむだけの作法ではなく、複雑化した社会を生き抜くためのスキルや戦略でもある。(永井 2016 : 215)

報告書冒頭でも引用したように、ここにはフェス参加者研究の一つの到達として、なぜこれほどまでにフェスが社会に広まったのか、その理由が明確に表現されています。

永井は、フェスは生き辛い現実社会の「緩和剤」として機能し、フェスに参加することでその現実を「やり過ごす」ことができると指摘します。そして、同書の末尾は下記の言葉で締めくくられます。

そこでは、もはや過去も未来も参照されない。フェスは、〈いま・ここ〉を楽しむために体験される。不確実で不安におおわれた現在と、不安定な自分を、少しでも肯定するために。(永井 2016 : 216)

つまり、フェスに参加することは、生き辛い現実をやり過ごすことはできても、その現実を変える可能性を持つ行為としては捉えられていません。ここにフェス研究が現実の現象が広まっていく反面、大きな進展が見られない要因があると筆者は考えます。もちろん、永井もその点に関しては自覚的です。永井は同書執筆後のコメントとして下記の言葉を残しています。

長年フェスに行っていると、楽しいけど、なんとなく切ない気持ちになることも多くて、その「切なさ」について考えるというのが、実は裏テーマになっています。もちろん「切なさ」を誰もが共有しているわけではないし、若い世代では違う形でフェスが受容されていると思うので、この本をきっかけにしてフェスについて考え、色んな意見が出てくると嬉しいです¹⁵。

¹⁵ 永井が『ロックフェスの社会学』刊行に際してニュースマガジン「UROROS」に寄せたコメントより。(出典：<http://uroros.net/newrelease/30734/>) (最終アクセス 2017 年 4 月 29 日))

この発言からは、フェスを参加者の視点からフェスを語ることの限界と、フェスを新たな切り口で語ることへの意識が窺えます。フェス観測会は、まさにフェスを「主催者」という新たな切り口で語ることにより、既存のフェス研究を更新することを目的に実施したものでした。

12-5 主催者の視点からフェスを捉え直す

では、フジロック以降の現代フェス 20 年の歴史を「主催者」の視点から捉え直すとうなるでしょうか。最初に断っておきたいのは、フェス参加者と主催者は別種の存在ではなく、一個人の中に共存する二つの層のようなものだということです。

岡田（2003）が指摘するように、現在のフェスの隆盛は、そもそも動員される参加者の主体性なしには成立しないものでした。フェス参加者が創出されるきっかけとなった第 1 回目のフジロック自体が、台風という予測困難な天候に左右された出来事だったからです。スタッフを含めた参加者が、フェスに不慣れな中、試行錯誤しながらなんとかその場を乗り切ろうと取った各自の行動には、参加者の自発性があったはずであり、その参加者の自発性にこそ文化産業側は商品価値を見出したのです。現在のフジロックは商業ベースのフェスであることに参加者も異論はないと思いますが、この第 1 回目の参加者の自発性が「伝説」として記憶されていることで、フジロックの真正性は保たれているといえます。

そして、この第 1 回フジロック参加者の自発性は、裏を返せば主催者としての歴史の始まりでもありました。2015 年 3 月に開催した「フェスワークショップ」（P5～6）では、フェスの魅力として、多くの主催者がフジロックを思い浮かべ、討論を行った 1 つのグループは「フジロックの魅力」を発表することになりました。これは、多くのフェス主催者の中で、フジロックがフェスに参加するのみならず、フェスをつくる上でも参照されていることを意味します。フジロックの魅力として真っ先に挙げられたのが「辛さ」（「お客が放置される」、「トイレが汚い」）であり、フェス主催者にとっては、それこそがフェスの魅力であり、自らが場をつくりこめる余地をフェスに見出していることが分かります。

また、もう一つのグループはフェスの魅力として「行動が自由」である点を指摘しました。ここで興味深いのは「フェスでは能動的に自分が動きたいように動ける。でも実は動かされている・仕組まれているんだけど」という主催者の自意識です。フェスの能動性が実はデータベース消費的な想像力によって仕組まれているかもしれないこと、そのことを主催者は自覚しているのです。

12-6 参加者は主催者へと開かれている

このことは、1999 年に開始された「RISING SUN ROCK FESTIVAL」においても言えます。観測会の基調講演で小島はフェスがビジネスであるとしつつも、48 時間、場そのものを楽しむような現在のスタイルは、スタッフと参加者が共に学習した結果、成立したものだと言っています。今ではライジングの風物詩となった参加者同士が缶バッジを交換し

合うコミュニティも、最初から仕組まれたものではなく、主催者側に「発見」され、結果的にマーケットの対象となったとの証言からは、参加者の自発性を読み取ることができます。小島の「僕らが提供するのは 80%ぐらいであとの 20%はお客さんがつくっていただいんです」との言葉に象徴されるように、フェスの会場には、参加者の自発性が発揮される余白があります¹⁶。音楽イベント運営に関しては素人同然であった「OTO TO TABI (札幌・2011～)」主催者がライジングに参加して「フェスをやろう」と思い立ち、実際に実現してしまったように、参加者は、マーケットの対象となるような「画一的な参加者」としてフェスの枠内に収まるのではなく、自らが場をオーガナイズする可能性にも開かれているのです。

12-7 フェス観測会 2016 の社会的意味

このように、フェスを「主催者」の視点から捉え直すことで、グローバルな高度消費社会に飼い慣らされる「参加者」といった従来のフェスのイメージを更新し、フェスの可能性を再度語る道筋が見えてきたのではないのでしょうか。このようなフェス主催者が全国で同時多発的に生じていることを実証し、フェスを「点」ではなく「面」として捉えようとしたのが「フェス観測会 2016」でした。観測会に集まったフェスはその一部分に過ぎませんが、ほとんどのフェスが商業ベースではなく、場合によっては、自ら赤字を抱え込みながらも、開催する意義を感じ、継続開催していることが主催者同士の対話から明らかになりました。

また、蔵王龍岩祭（山形蔵王・2006～）主催者の「自分でも『軸ってあったんだな』と気づかされた」との言葉に象徴されるように、観測会の場合自体が、フェス主催者が「フェスを主催する」自分自身を客観視する効果をもたらしたと筆者は考えています。このことにより、フェス主催者がフェス内部に留まらず、現代社会にどのような価値を持っているのかを考える大きなきっかけとなったと思っています。

12-8 今後の展開—フェスの自生的な「ローカリティ」—

12-8-1 地域社会の内と外を横断するローカルフェス

観測会では「ローカル」をキーワードに、主催者及び主催フェスが従来の地域社会とどのような関係にあり、また、地域社会を意識することが彼らの「フェスを主催する理由」にどのようなかたちで反映されているのかを考えてきました。

観測会では開催前から、ワークショップのテーマが「ローカル」であることを周知し、参加メンバーも全国の地理的側面を考慮し、開催地域出身または在住者に限定しました。この点に関して、自己紹介（P16～18）では多くの参加者が「〇〇県の〇〇から来ました」と冒頭で述べていたように、参加者は少なからず自分の地元を意識し、地域を代表する心

¹⁶ 「フェスワークショップ」（2015 年 3 月）において、フェスの魅力の 1 つに「余白・隙間が多い」ことが挙げられた。主催者はこのような参加者として感じたフェスの魅力を自らのフェスで実践しているはずである。

持でワークショップに臨んだことが窺えます。では彼らにとって「ローカル」とは何を指しているのでしょうか。

ワークショップでは、「ローカルフェスマップ」に各自のフェスをマッピングしてもらい、最終的には「祭り」「フェス」「イベント」「展示」という4象限に各フェスが分散しました。上記のような条件で参加メンバーを選定した筆者にとって、ローカルフェスの中でもこれだけの差異があることは予想外でした。

例えば、「①場所 (P36)」に関しては、「ぼくらの文楽 (山形長井・2011～)」のように、毎年同じ場所で開催するフェスもあれば (固定型)¹⁷、「Walkin' Media “ennas” (東京・2013～)」のように移動を繰り返すフェスもあります (移動型)¹⁸。また、「②スタッフ・実行委員 (P37)」に関しても、「hoshioto (岡山井原・2012～)」、「TSUSHIMA BORDER ISLAND FES (長崎対馬・2016～)」のように地元在住・出身者にこだわるフェスもあれば、ennasのように出身・在住がバラバラな音楽繋がりメンバーが運営しているフェスもあります。

しかし、「⑥継続性・継承性 (P41)」においては、すべてのフェスが「継承／永続」の枠内に自らのフェスをマッピングしています。これは何を意味しているのでしょうか。このことに関連して、OTO TO TABIの主催者が非常に興味深い発言をしています。

フェスというキーワードで僕ら今回集まって、こうしてみるとフェスという言葉の中でもいろんな捉え方があって、それぞれのイベントごとに考え方が違うことを改めて確認しました。ただ、フェスという言葉で引っかかってここに集まった共通の認識ってどこかにあるんじゃないかと個人的には考えています。

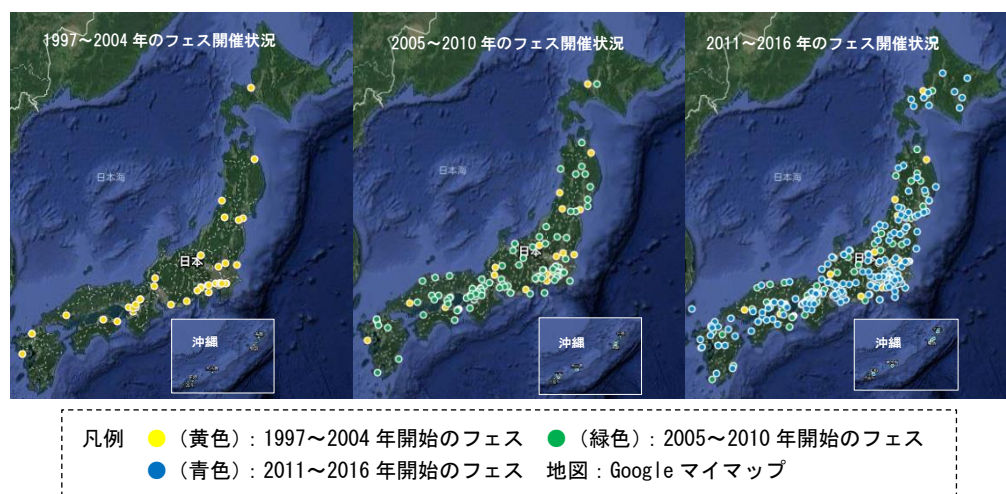
各参加者の総括の言葉 (P58～61) にも表れているように、これは参加したフェス主催者に共通した認識ではなかったかと思います。実際に観測会終了後の2017年には「hoshioto」の会場装飾を「ITAMI GREENJAM」が手掛ける、また「TSUSHIMA BORDER ISLAND FES」の音響を「蔵王龍岩祭」が担当するといった具体的な連携の話が進められています。では、このような各ローカルフェスの差異を超えた共通性はどのようにして可視化し、価値づけることが出来るのでしょうか。

¹⁷ 後述するように、実際には第1～2回目は「古代の丘 縄文の村」で開催され、第3回目以降に現在の「西根地区公民館」で開催されている。同じく「固定型」にマッピングされた蔵王龍岩祭も第1～2回目は「蔵王総合グラウンド」、第3～5回目は「黒姫グレンデ」、第6回目以降は現在の「上ノ台グレンデ」で開催され、蔵王温泉のエリア内で移動を繰り返している。

¹⁸ そもそもフジロック自体が第1回 (山梨)、2回目 (東京) と移動を繰り返して現在の新潟県湯沢町の苗場スキー場に落ち着いたという経緯がある。他にも、例えば1999年に開始した中国地方最大の野外フェスティバル「SET STOCK (瀬戸内海とウッドストックを掛け合わせた造語)」は、2012年で終了したが、2013年にはその継承イベントとして山口県で「WILD BUNCH FEST」が開催されている。筆者が参加した際にも「SET STOCK」のTシャツを着た参加者を多く見かけたことから、参加者自身も同フェスを後継イベントとして認識していると考えられる。

12-8-2 フェスを「アーカイブ」する

【フェスアーカイブマップの試み】



観測会開催にあたっては、フェス主催者を「点」ではなく「面」として捉えることで、自生的な地方創生の姿を可視化することを一つの目標としていました。そのための試みとして、全国のフェスをマッピングし、アーカイブする試みを実施し、455 件のフェスを日本地図にマッピングしていきました¹⁹。結論からいうと、このマッピングは一部分では成功し、一部分では失敗に終わったといえます。なぜなら、フェスは「移動」するからであり、特定の地理的場所に固定することが、フェスの流動的な特性とは必ずしも相容れないからです。実際、ネット上のフェス情報を発信するメディアでは「フェスまとめ」がつくられ、開催月・地域別ごとに分類され紹介されていますが、地図として可視化されたものはほとんど見かけません。また、フェスまとめは毎年絶えずアップデートされますが、過去に遡ってフェスの歴史を確認する設計にはなっておらず、ひたすら「いま・どこ」でフェスが開催されるかを参加者に知らせるメディアとして機能しています。

この点に関して松岡慧祐は、現代社会において、私達はグーグルマップを操作するかのようには社会を認識していると指摘します（松岡 2016）²⁰。現在ではスマートフォンにも標準搭載されているグーグルマップは、目的地を検索すると、ピンポイントで特定の地点にズームインして、現在地から目的地までの最適なルートを表示します。このときグーグルマップは現在地と目的地の「いま・ここ」を強調し、周辺の情報は捨象され、行政区域のような地理的境界はほとんど意識されることはありません。モバイル化に伴うこのようなグーグルマップの身体化は、他者を介さない「断片化」を引き起こすと松岡は指摘しています²¹。

¹⁹ 詳細は P73 以降の「付録：フェスアーカイブ」を参照のこと。「フェス観測会 2016」ホームページでは後日実際にグーグルマップ上にマッピングした「フェスアーカイブマップ」を公開予定。

²⁰ 松岡慧祐（2016）『グーグルマップの社会学—ググられる地図の正体』光文社

²¹ 興味深いことに、松岡の同著においてはグーグルマップと親和性の高い同時代の現象として「フェス」を引き合いに出している。松岡はフェスについて、以下のように述べている。「たとえば、音楽の聴き方ひとつとっても、最近ミュージシャンの私生活や歌詞世界にまつわる物語への欲望よりも、断片的なサウンドやフレーズに動物的に反応す

一方で、松岡は、私達が主体性を持ってグーグルマップを操作すれば、その「断片化」を乗り越える「シークエンス化」「多層化」への想像力が開かれるとも指摘しています。「シークエンス化」とはユーザー自身が断片化するマップをつなぎ合わせることで、全体を見渡せるような「まとまり」はないが、連続的な「つながり」をユーザー自身が新たに構築できることを意味します。

このグーグルマップは水平方向だけではなく、垂直方向にも地図をズームイン／アウトすることができます。これは「都道府県、日本、アジア、世界までが、ひとつづきの連続的な空間であること」の経験的な把握を可能にします。また、同マップには「レイヤー」と呼ばれる機能があり、「交通状況」「路線図」「地形」といった複数のレイヤーそれぞれの情報を重ねて表示することができます。つまり、社会を従来の「面」的な想像力ではなく、「層（レイヤー）」として認識することをグーグルマップは可能にしたのです²²。

このことを、フェス観測会という場の成り立ちに置き換えてみると、フェスは、新たな「祭り」としての役割を担ったり、開催にあたって行政と交渉するプロセスがあったりと、地理的場所に拘束されている側面があります。この観点から、全国各地のローカルフェスを地理的場所に埋め込み、特定の場所やコミュニティへの帰属を確認する「祭り」として捉え、それらを「面」としてつなぎ合わせることで、フェスを「新たな地域活性化」の動きとして把握することも可能です。

しかし、特定の場所に留まること、それこそが、フェスにおいて最も忌避されてきた「観客」としてのふるまいでした²³。つまり、ローカルフェスを指して、若者が再度「地域」に目を向け「新たな地域活性化」を行っているとする見立てはフェスの表層的な見方に過ぎません。

観測会の対話でも明らかになったようにフェス主催者は「継続性・継承性」の点では共通した「継続性」への意識がありましたが、そのアプローチは様々であり、従来の地域社会との接続はそのうちの一つなのです。

12-8-3 フェスは絶えず更新される

では、今後どのようにして「フェスという言葉で引っかかってここに集まった共通の認

ることの快楽が優先され、その場での即自的な『ノリ』を重視する“フェス”が人気を集めている。」（松岡 2016 : 150-151）。このことから、2016 年時点においてもフェスの社会的イメージが更新されていないことが分かる。

²² この点に関して、永井もフェス参加者の体験を「多層化する体験」と呼び、参加者は SNS を介し、複数のレイヤーとしてフェスの空間を体験していることを指摘している（永井 2016 前掲）。複数ステージが同時進行するフェス会場内、参加者は物理的にはそれらを同時には体験できない。しかし、モバイル化された SNS を常に持ち歩きながら移動することで、同一空間の異なるレイヤーで起こる出来事を重層的に体験できるというわけである。この点に関して、私達は確かに物理的身体としては複数ステージに同時に存在することはできない。しかし、「音」の観点から言えば、野外フェスにおいて隣のステージの音が「漏れ聞こえる」ことは日常茶飯事であり、複数のレイヤーに分離しているというよりは、同時多発的な「面」として一つのフェスの空間に接続している感覚が強いのではないだろうか。つまり、フェス参加者は「面／層」の双方の側面からは幾つもの関係性や出来事の渦の中に飲み込まれていると言えるのである。

²³ フェスでは、特定のアーティストを目的とした参加者がステージの前に陣取り、他のアーティストに興味を示さないふるまいは「地蔵」に例えられ、フェスの雰囲気を壊す存在として忌避されている。ライジングの小島も基調講演で同様のことを指摘している（P28～29）。

識」としてのフェスの固有性（ローカリティ）を実証し、フェス主催者を新たな価値として位置づけることが出来るのでしょうか。その近道は、意外に思われるかもしれませんが「祭り」にあると筆者は考えています。観測会でも明らかになったように、フェス主催者は少なからず地域社会との関係性を持っています。その濃淡はフェスによって異なりますが、多くのフェスが「ロックフェスティバル」の系譜に連なり、また流動性がその核にあるため、やむを得ず行政と関わる、あるいは地域と協力しながら運営するケースが多いと考えられます。

その面で言うと、ローカルフェスマップの中で最も「祭り」の要素が濃い位置にマッピングされた「ぼくらの文楽」の事例は示唆に富みます。なぜなら、ロックフェスがこれまで忌避し続けた特定の場所に埋め込まれることをむしろ積極的に受け入れてきたからです。前述のようにぼくらの文楽は、現在では開催場所である西根地区公民館の主催事業として長井市の予算で運営されており、運営メンバーも長井市を中心とした周辺市町村のメンバーで構成されます。音楽ステージに関しては公民館の教室を使ったワンステージのみで、多くの参加者が座ってじっくりと聞き入っている姿が印象的です。また、同フェスは午前10時に始まり、午後17時には終了します。ここには、一見フェスとは相容れない規則正しさが回帰しているようにも思えます。

では、ぼくらの文楽はもはやフェスとは呼べないのでしょうか。しかし、ぼくらの文楽が辿ってきた足取りにはあのフジロックとの共通性があると筆者は考えています。ぼくらの文楽第1～2回目は、公民館の裏手にある「古代の丘 縄文の村」で野外フェスティバルとして開催されました。実は、ぼくらの文楽にもあの自由にふるまうフェス参加者の光景があったのです。第3回目からは西根地区公民館に会場が変更となりますが、これは決して意図されたものではなく、荒天の予報という、「やむを得ない」移動でした。しかし、これが結果的に参加者と主催者双方にとって好評であったことから、翌年以降は公民館での開催が恒例となります。公民館での開催、地域における新たな「祭り」としての存在感、そのことだけを取り出してみれば、ぼくらの文楽はフェスから遠く離れた存在のように思えます。実際に、フジロックが規則的な観客のふるまいから逸脱していったのとは真逆の方向に進んできたと言えるでしょう。しかし、フェスが規格化・商品化されていく中で、ぼくらの文楽が、社会がイメージするフェスとは異なる新たなイベントを指向し、実践したとするならば、そこに生じた「自発的な主体性」は、フジロックとも通じる部分があります。

事実、ぼくらの文楽の主催者である船山は、2003年から山形で開催されているDIYロックフェス「DO IT・YAMAGATA MUSIC FES」2008年開催時の主催メンバーの一人でもあります。同フェスは不定期ながらも会場を移動しながら継続され、2016年には酒田市で開催されました。船山は「DIY アヴァンギャルド・ダンスンブルオーケストラ」を標榜するバンド「SHIFT」のボーカルとして出演しています。これらの事実から、船山がロックフェスの系譜にも連なる存在であることは明らかです。

船山は 2011 年当時、ぼくらの文楽主催のきっかけについて以下のように述べています²⁴。

今回は、自分の環境の変化から始まっているんです。結婚して、子どもが出来て、新しく生まれたコミュニティがあるわけですね。親戚もそうだし、子持ちのお母さんもそうだし。そのネットワークってすごい大きくて、彼らを自分の主催するフェスに呼ぶにはどうしたらいいのかって考えたら、それは DO IT ではなかったんですよ。いま 11 ヶ月の娘を、DO IT に入れようとは思えなくて、自分の娘が来れるフェスってなんだろうって考えたら、“REST” できる場所が大事だと思ったんです。

DO IT をやろうって話もあるんですけど、それはそれで、これはこれ。自分の娘にも音楽を聞かせたいし、フェスティバルにも連れていきたいんですよ。だっておもしろいじゃないですか。それはフジロックでも DO IT でもない。だったら新しいものを作ったほうがいいんじゃないかって思ったんです。

多くのロックフェスでは、参加者の年齢層が上がっているため、子ども向けのエリアを設ける等の対策を取っていますが、ぼくらの文楽はそもそも「子どもが主役」のフェスティバルです。「フジロック」でも「DO IT」でもない創意工夫に満ちた新たなフェスティバルをつくること。その主催者の実践こそがフェスが築き上げてきた文化だといえます。そして、フェス観測会 2016 に参加した主催者のフェスも、そのようなフェス文化を継承しているからこそ、同じ志を共有しながらも、それぞれが異なったコンセプトや内容を打ち出しているのです。フェス観測会で取り上げたフェスは、規模の大きな誰もが知っているフェスばかりではありません。しかし、むしろ社会がイメージするような従来のフェスから逸脱していくローカルフェスにこそ、フェスが生み出した新たな社会の価値やフェスの魅力があると筆者は考えています。

それはフェス主催者同士の対話が気づかせてくれたことであり、フェス研究者の議論だけでは到底導けないものだったと思います。また、その逆も然りであり、フェスを客観視する視点の導入がフェス主催者のマッピングに作用し、各ローカルフェスの間の連携に刺激を与えたことは間違いありません。フェス主催者と研究者が共に 2 日間対話を行い、フェスの社会的価値を明らかにすること、そのプロセス自体に「フェス観測会 2016」開催の最も大きな意義がありました。

この観測会は、フェスに懐疑的だった筆者にフェス研究をすることの醍醐味を、身をもって体感させてくれました。この場に関わっていただいた全ての方に感謝すると共に、今後はフェス研究を通してその思いを還元していきたいと思います。

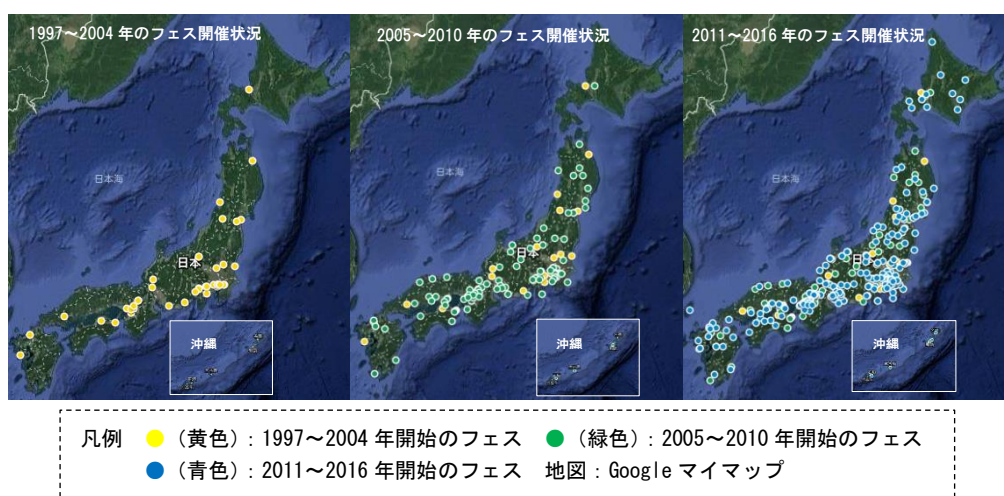
²⁴ 「D.I.Y.フェスティバルのつくりかた 船山裕紀×飯田仁一郎」より一部抜粋。(出典:<http://ototoy.jp/feature/2011090300>)
(最終アクセス 2017 年 4 月 29 日)

付録：フェスアーカイブ

1. フェスアーカイブの作成の狙い・目的

観測会を開催するにあたって、全国のフェス開催状況を把握するため、「フェスアーカイブ」を作成しました²⁵。調査の目的は、フジロック以降のフェスの開催状況を把握し、ローカルフェスの全国的な広がりやフェスの歴史的側面を明らかにすることにあります。このような背景を踏まえて、調査対象は、①1997年以降に開始され、現在も継続しているフェス、②継続開催を念頭においたフェス、③ポピュラー音楽をメインとしたフェスティバルの3つの条件を満たすイベントとしました。調査の結果、455件のフェス開催状況を収集することができました²⁶。継続開催ではないフェスを含めると、フェスの総数はこの数字を遥かに上回ると予想されます。

2. フェス開始年度別の傾向



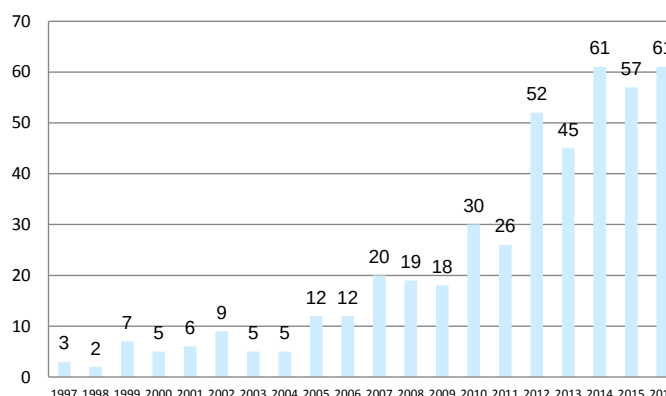
上記は、455 件のフェスを 3 つの時代区分 (①1997～2004 年、②2005～2010 年、③2011～2016 年) に区切り、開始年度別に地図上に示したものです。この時代区分に関しては、①が四大フェスと呼ばれる「FUJI ROCK FESTIVAL (1997～)」「RISING SUN ROCK FESTIVAL (1999～)」「SUMMER SONIC (2000～)」「ROCK IN JAPAN FESTIVAL (2000～)」が開始され、全国的にフェスが認知され始める時代、②が 4 大フェスを中心としたフェス参加者の一部が「主催者」としてローカルフェスを開始する時代、③はフェスが大衆化し、全国でフェス「主催者」が増える時代ではないか、との仮説に基づき設定しました。

実際に 1 年毎の開催状況を見てみると、2005 年以降は毎年 10 件以上のペースでフェスが増加し、2010 年には 30 件が開催され、さらに増加傾向となります。2011 年には一旦減少しますが、2012 年には 52 件と大きく増加しています。これは東日本大震災以降の「祭

²⁵ アーカイブ作成にあたっては、各フェスの公式ホームページや「Festival Life」〈<http://www.festival-life.com>〉(最終アクセス 2017 年 4 月 23 日)、「UROROS」〈<http://uroros.net/>〉(最終アクセス 2017 年 4 月 23 日)等のフェス開催情報を発信するウェブメディアを参考にしました。また、実作業においては、観測会スタッフの尾野諒介君が多くの時間を費やし、調査をしてくれました。本紙面を借りて深く御礼申し上げます。

²⁶ 同一名称により複数の場所で開催するフェスは同一カウントとした。

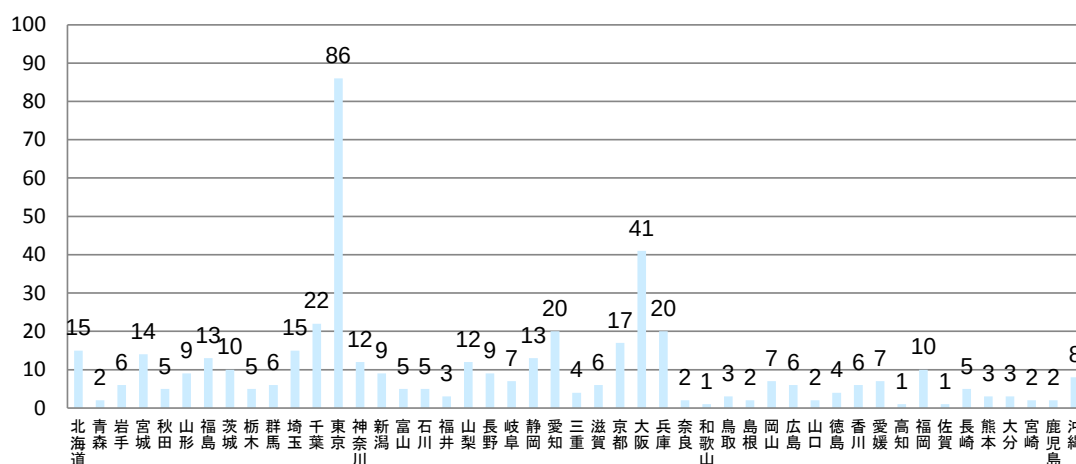
り」を求める時代背景とも関連付けて、今後調査する必要があると考えられます。その後も開催件数は増加傾向にあり、2016年には61件もの新たなフェスが全国各地で開催されています。



3. 都道府県別のフェス開催件数

次に都道府県別のフェス開催件数を見てみます。最も多いのは東京の86件、次いで大阪(41件)千葉(22件)、愛知・兵庫(20件)と大都市圏での開催件数が多くなっています。また、全体の傾向として、開催件数は西日本に比べて東日本の方が多い傾向にあります。

その他の特徴としては、静岡・山梨の件数が周辺地域と比べて多くなっていますが、これは両地域が富士山を背後に抱えており、多くのフェスはそのロケーションを求めて開催しているものと思われます。また、宮城・福島は東日本大震災以降、「復興」をテーマに掲げたフェスもあり、開催件数が多くなっています。



4. 今後のフェスアーカイブの方向性について

前述のようにフェスをアーカイブするにあたっては、地理的側面からの把握では限界があり、今後は、フェスの移動性を考慮したビジュアル化を模索する必要があります。また、アーカイブする過程で、「レゲエ」や「ジャズ」は一つのジャンルでくくれるほど多くの地域で開催されていることが分かりました。今後はフェス内部のカテゴリー化の作業も進めていきたいと考えています。さらに、今回は1997年以降のフェスを調査対象としましたが、今後はフジロック以前のフェス調査を行い、現代のフェスと接続する試みも行っていく予定です。

5. フェスアーカイブ 1997～2016²⁷

No.	名称	開催地	開催場所	2016年 開催日程	開始年
1	RISING SUN ROCK FESTIVAL	北海道	石狩湾新港樽川ふ頭横野外特設ステージ	8/12～14	1999
2	OTO TO TABI	北海道	札幌芸術の森アートホール	3/19	2011
3	JOIN ALIVE	北海道	いわみざわ公園(野外音楽キタオン&北海道グリーンランド 遊園地)	7/16～17	2010
4	宇宙の森フェス	北海道	大樹町カムイコタン公園キャンプ場	9/10	2016
5	LOVE TOYA	北海道	レークヒルファーム	7/9～10	2011
6	平原ジャム	北海道	音更町 十勝川温泉	開催なし	2013
7	OKETO GREEN FESTIVAL	北海道	置戸町ファミリースポーツセンター横特設会場	開催なし	2015
8	GANKE FES	北海道	湯宿くつたり温泉 レイクウイン	7/9	2014
9	活性の火	北海道	苫小牧駅前通り特設4会場	8/27～28	2014
10	REAL MUSIC VILLAGE	北海道	北海道開拓の村	6/18	2014
11	森のカフェフェス inニセコ	北海道	ニセコビレッジ旧東山ゴンドラ前	中止	2012
12	Ebetsu Riverside Beat Festival	北海道	江別河川防災ステーション	8/21	2016
13	279ど～みん'ずcafe	北海道	札幌芸術の森野外ステージ	8/28	2016
14	ハレハレハレット	北海道	ハレットヒルズ	6/19	2013
15	トヨトミサイル	北海道	豊富温泉自然観望館	8/20	2012
16	AOMORI ROCK FESTIVAL～夏の魔物～	青森	青森県東津軽郡平内町夜越山スキー場	10/1	2006
17	ハ食サマーフリーライブ	青森	ハ食センター南側駐車場特設ステージ	8/20～21	2001
18	KESEN ROCK FESTIVAL	岩手	種山ヶ原森林公園 種山ヶ原イベント広場特設ステージ	7/16～17	2009
19	APPI JAZZY SPORT	岩手	安比高原スキー場 安比プラザ屋内特設フロア	1/16	2007
20	Sanriku Music Fes. ウミネコJAM	岩手	山田魚市場特設会場	7/10	2016
21	MOUNTAIN MASSIVE	岩手	岩手県雫石町「岩手高原スノーパーク」特設会場	8/27～28	2013
22	HUMAN LIBRARY	岩手	柏木平レイクリゾート	10/15～16	2016
23	いしがきミュージックフェスティバル	岩手	盛岡城跡公園他	9/18	2007
24	女川復興祭	宮城	女川駅前	3/26	2012
25	SENDAI OTO Festival	宮城	仙台ゼビオアリーナ	7/23	2016
26	Reborn-Art Festival X ap bank fes	宮城	石巻港雲雀野地区	7/30～31	2005
27	MEGA★ROCKS	宮城	宮城Rensa他	10/1	2004
28	ARABAKI ROCK FEST.	宮城	みちのく公園北地区 エコキャンプみちのく	4/29～30	2001
29	PARK ROCK ISHINOMAKI	宮城	石巻市内ライブハウス等	7/16	2013
30	気仙沼サンマフェスティバル	宮城	イオン気仙沼店駐車場	10/8～9	2012
31	こらふえす	宮城	仙台FLYING SON	12/3,4,10	2014
32	MASTER PEACE	宮城	MACANA等	3/11	2013
33	ゼロワンフェス	宮城	気仙沼市民会館	6/11～12	2013
34	Forest City Fanfare	宮城	MACANA等	6/25	2014
35	森波～Wood Vibration～	宮城	登米市伝統芸能伝承館 森舞台	6/25	2008
36	SHOGAMA ROCK FESTIVAL	宮城	宮城県塩竈市みなと公園	9/24	2012
37	FREEDOM aozora	宮城/兵庫 /宮崎	宮城: 国営みちのく杜の湖畔公園北地区 風の草原 兵庫: 国営明石海峡公園芝生広場 九州: みやざき臨海公園 サンマリーナ宮崎 多目的広場	宮城: 8/20 兵庫: 7/30 宮崎: 9/3	2008
38	unkind	秋田	藤里町湯の沢エリア周辺	10/2	2016
39	ハイコーフェス	秋田	「思い出の湯分校」校舎	9/22	2010
40	OGA NAMAHAGE ROCK FESTIVAL	秋田	男鹿市船川港内特設ステージ	7/30～31	2008
41	秋田CARAVAN MUSIC FES	秋田	秋田県横手市・グリーンスタジアムよこて	9/3～4	2016
42	TRIP GREEN FESTIVAL	秋田	能代山本広域交流センター	9/11	2012
43	オトナル・ヤマガタ YAMAGATA MUSIC FESTIVAL (元 月山青春音楽祭)	山形	山形市七日町および文翔館	11/13	2012
44	DO IT-YAMAGATA MUSIC FES-	山形	グリーンシステム	11/12	2003
45	蔵王龍岩祭	山形	蔵王温泉スキー場 上/台エリア	8/26～28	2006
46	ぼくらの文楽	山形	西根地区公民館	9/25	2011
47	GOOD UP	山形	山形県東根市黒伏高原スノーパークジャングル・ジャングル	7/30～31	2011
48	肘折国際音楽祭	山形	山形県最上郡大蔵村 肘折温泉 肘折いでや館 ゆきんこホール	2/6	2016
49	寺フェス	山形	山形県朝日町若宮寺	9/10	2013
50	Show Naight	山形	庄内町 立谷沢 北月山荘 南部山村広場	9/3～4	2011
51	CBJAM (Cherry Boy jamboree)	山形	山形県西村山郡大江町 古寺鉱泉キャンプ場	9/18	2003
52	南郷うた★たねフェス	福島	会津高原南郷スキー場	10/15	2015
53	奥会津ロックフェスティバル	福島	美坂高原特設ステージ	8/27	2012
54	大宴会	福島	福島県南会津町 会津山村道場うさぎの森オートキャンプ場	9/18	2010
55	ARAFUDO MUSIC	福島	土湯温泉 くらぎの湯 向瀬	1/30	2014
56	飯坂温泉ミュージックフェスティバルおと酔いウォーク	福島	飯坂温泉街	3/26	2013
57	ふくしま おおぞら フェスタ	福島	福島空港	5/14～15	2016
58	オハラ田ノレイク	福島	猪苗代湖畔 天神浜	7/30～8/7	2015
59	ONA FES	福島	三崎公園野外音楽堂	8/20～21	2013
60	風とロック芋煮会	福島	白河市 しろさかの森スポーツ公園	9/17～19	2009
61	騎馬武者ロックフェス	福島	雲雀ヶ原祭場地	10/9	2014
62	LOCAL MUSIC FES 音楽浄土	福島	会津坂下町営スキー場	7/30～31	2014

²⁷ フェスアーカイブをマップ化した「フェスアーカイブマップ」はフェス観測会 2016 のホームページ上にて公開予定です。(http://festival-station.com/)

No.	名称	開催地	開催場所	2016年 開催日程	開始年
63	うづぐしま LIVE	福島	ぎょうざのひぐち敷地内特設ステージ	11/13	2012
64	結いのおと	茨城	結城市つむぎの館 陳列館等	3/20	2014
65	つくばロックフェス	茨城	つくばねオートキャンプ場	7/16～17	2009
66	FUNA ROCK FESTIVAL	茨城	club SONIC mito等	2/7	2016
67	ROCK IN JAPAN FESTIVAL	茨城	ひたちなか市 国営ひたち海浜公園	8/6～7、13～14	2000
68	ごじゃっぺ音楽祭	茨城	STORMY MONDAY他	6/12	2015
69	えーじやないか	茨城	水戸ライトハウス他	3/26	2013
70	Satoani - やさと音楽祭 -	茨城	朝日里山学校	8/20	2015
71	茨城総合物産音楽フェスティバル	茨城	千波湖ふれあい市場	5/14	2016
72	MITO GROOVIN	茨城	千波公園	11/12～13	2016
73	FOREST CAMP MIITO	茨城	アウトドアフィットネスパーク アスバイア	9/11	2015
74	ベリテンライブ	栃木	井頭公園運動広場等	8/20,8/22～28,9/4	2003
75	岩船山クワフステージ	栃木	岩船山採石場跡地	5/1	1999
76	Don't Stop Music Fes.TOCHIGI	栃木	栃木総合体育館	5/8	2015
77	TOKYO KAIKO～宇都宮ライブサーキット～	栃木	HEAVEN'S ROCK UTSUNOMIYA	10/10	2015
78	ギュウ農フェス	栃木	オリオンスクエア他	10/30	2015
79	I ROCKS	群馬	群馬音楽センター	4/30～5/1	2014
80	NEW ACOUSTIC CAMP	群馬	水上高原リゾート200	9/17～18	2010
81	KNOCKING ON THE DOORS TINY GARDEN FESTIVAL	群馬	無印良品 カンバーニヤ嬌恋キャンプ場	9/2～4	2013
82	MACHIKADO FES.	群馬	小平の里キャンプ場	9/10～11	2013
83	山人音楽祭	群馬	ヤマダグリーンロード前橋	9/24	2016
84	G-Beat Gig Box	群馬	ヤマダグリーンロード前橋	6/25	2013
85	OWL FESTIVAL	埼玉	おおたかの森再生地	11/6	2012
86	RISO festival	埼玉	サンアゼリア	11/27	2016
87	宮代トウゴフフェスティバル	埼玉	コミュニティセンター 進修館	9/18～9/19	2015
88	ぐるぐるTOIRO	埼玉	さいたまスーパーアリーナ内TOIRO	12/10～11	2013
89	AGEOまちフェス	埼玉	上尾駅等	10/1	2013
90	中山道野外フェス	埼玉	鴻巣駅東口中山道沿い	10/16	2015
91	LOUD PARK	埼玉	さいたまスーパーアリーナ	10/8～9	2006
92	VIVA LA ROCK	埼玉	さいたまスーパーアリーナ	5/28～29	2014
93	空飛ぶビクック	埼玉	所沢航空記念公園 野外ステージ	5/8	2016
94	Animelo Summer Live	埼玉	さいたまスーパーアリーナ	8/26～28	2005
95	GO AROUND JAPAN	埼玉	ゆうパークおごせ	10/1～2	2013
96	koshigaya ASYLUM	埼玉	EASYGOINGS他	4/8～10	2007
97	SLOW DAYS	埼玉	所沢航空記念公園 野外ステージ	4/16～17	2016
98	Kiramune Music Festival	埼玉	さいたまスーパーアリーナ	6/4～5	2009
99	夏びらき MUSIC FESTIVAL	埼玉／大阪	埼玉：所沢航空記念公園 野外ステージ 大阪：服部緑地野外音楽堂	7/16～18 7/30～7/31	2007
100	Forest Jam Grande	千葉	中流アートヴィレッジ	11/12～13	2010
101	柏MUSIC SUN	千葉	DOMe 柏等	5/22	2014
102	COUNTDOWN JAPAN	千葉	幕張メッセ 国際展示場	12/28～31	2003
103	Quantum	千葉	いすみ市 Dome Camp	3/12	2016
104	ZIPANG	千葉	白浜フラワーパーク	6/25～26	2015
105	MIX LEMONED JELLY	千葉	舞浜アンフィシアター	7/18	2016
106	PEANUTS CAMP	千葉	一番星★ヴィレッジ 市原オートキャンプ場	8/20～21	2016
107	氣志團万博	千葉	千葉県 袖ヶ浦海浜公園	9/17～18	2012
108	Nuts Party	千葉	千葉ポートタワー・ポートパーク内メインステージ	8/27	2015
109	GREENROOM CAMP	千葉	千葉県南房総市根本マリンキャンプ場特設会場	9/3～4	2011
110	SENSATION	千葉	千葉市美浜区 幕張メッセ	9/3	2015
111	KNOTFEST JAPAN	千葉	千葉市美浜区 幕張メッセ	11/5～6	2014
112	electrox	千葉	幕張メッセ	1/9	2014
113	ビクターロック祭り	千葉	幕張メッセ	2/14	2014
114	JAPAN JAM	千葉	幕張海浜公園	5/3～5	2010
115	Electric Zoo Beach Tokyo	千葉	幕張海浜公園	5/7	2015
116	Re:birth Festival	千葉	千葉 鋸山採石場	5/28～29	2013
117	ONION ROCK FES-CHIBA DE CARNIVAL-	千葉	稲毛野外音楽堂	5/28～29	2015
118	SATANIC CARNIVAL	千葉	幕張メッセ	6/4	2014
119	SUMMER SONIC	千葉／大阪	QVCマリンフィールド&幕張メッセ／舞洲サマーソニック大阪特設会場	8/20～21	2000
120	POP SPRING	千葉／兵庫	幕張メッセ／神戸ワールド記念ホール	千葉：4/2 兵庫：4/3	2016
121	PUNK SPRING	千葉／兵庫	幕張メッセ／神戸ワールド記念ホール	兵庫：4/2 千葉：4/3	2006
122	earth garden	東京	東京都渋谷区代々木公園イベント広場・ケヤキ並木	10/22～23	2011
123	下北沢にて	東京	GARDEN他	12/3	2010
124	NO NUKES	東京	豊洲PIT	11/27～28	2012
125	リスアニ！LIVE	東京	日本武道館	1/23～24	2010
126	Coming Next	東京	NHKホール	2/11	2015
127	MUSIC MONSTERS	東京	TSUTAYA O-EAST他	8/28	2012
128	SPACETRAIN FESTIVAL	東京	渋谷Glad他	2/28	2014

No.	名称	開催地	開催場所	2016年 開催日程	開始年
129	早朝フェス	東京	品川シーズンテラス	11/16	2014
130	東京蚤の市	東京	東京オーヴァル京王閣	5/14～15	2012
131	RIP SLYME presents 真夏のWOW	東京	新木場STUDIO COAST	7/18	2013
132	MUTEK.JP	東京	WWW他	11/2～4	2016
133	BIGJOINT FESTIVAL	東京	渋谷clubasia	12/18	2011
134	パンダ音楽祭	東京	上野公園野外ステージ	5/22	2012
135	Shimokitazawa SOUND CRUISING	東京	GARDEN等	5/28	2012
136	CRAFTROCK FESTIVAL	東京	豊洲PIT & MAGIC BEACH特設会場	5/28	2014
137	MURO FESTIVAL	東京	新木場STUDIO COAST	7/31	2012
138	バルTAMAFエス	東京	バルテノン多摩及びバルテノン大通り	9/17～18	2016
139	CIRCUS FES	東京	下北沢CIRCUS、カトリック世田谷教会	9/19	2014
140	オトトヒト	東京	武蔵野美術大学	10/29～31	2015
141	ササクレフェスティバル	東京	SHIBUYAWOMB	11/19	2012
142	みんなの戦艦	東京	渋谷 TSUTAYA O-NEST	2/28	2006
143	MOSHI MOSHI NIPPON FESTIVAL	東京	東京体育館	11/26～27	2014
144	Magic Node Festival	東京	下北沢ReG等	4/29	2012
145	西荻ラバーズフェス	東京	杉並区立桃井原っぱ公園	3/20	2016
146	YATSUI FESTIVAL!	東京	TSUTAYA O-EAST他	6/18～19	2012
147	ピエールフェス	東京	LIQUIDROOM	7/17	2011
148	TOKYO IDOL FESTIVAL	東京	お台場・青海周辺エリア	8/5～7	2010
149	旅祭	東京	東京お台場潮風公園	8/11	2005
150	TOKYO MUSIC CRUISE	東京	ザ・プリンスパークタワー東京	8/12～13	2015
151	J-WAVE LIVE SUMMER JAM	東京	国立代々木競技場第一体育館	8/20～21	2000
152	未確認フェスティバル	東京	江東区 新木場STUDIO COAST	8/27	2015
153	Slow LIVE in 池上本門寺	東京	東京池上本門寺 野外特設ステージ	9/2～4	2004
154	黒フェス～白黒歌合戦～	東京	豊洲PIT	9/6	2015
155	渋谷レグエ祭	東京	新木場STUDIO COAST	9/17	2009
156	HACHIDORI -HACHIOJI ROCK DREAM-	東京	八王子Match Vox等	3/6	2016
157	八王子天狗祭	東京	エスフォルタアリーナ八王子	11/5	2016
158	MUSIC MONSTERS	東京	TSUTAYA O-EAST他	8/28	2012
159	TOKYO GIRLS MUSIC FES.	東京	代々木第一体育館	3/20	2016
160	UKFC on the Road	東京	東京 新木場STUDIO COAST	8/16	2011
161	ROCKETMAN SUMMER FES	東京	恵比寿ザ・ガーデンホール	8/21	2010
162	FORT DUM-DUM PARTY	東京	東高円寺UFO CLUB他	8/21	2016
163	ジャンゴ東京フェスティバル	東京	上野恩賜公園野外ステージ	8/27	2016
164	a-nation stadium fes.	東京	東京 味の素スタジアム	8/27～28	2002
165	WORLD HAPPINESS	東京	夢の島公園陸上競技場	8/28	2008
166	GLAMPARK ROCK FESTIVAL	東京	おおば村キャンプ場	9/10	2016
167	SKAVILLE JAPAN	東京	日比谷野外大音楽堂	9/10	1997
168	TOKYO CALLING	東京	LIVEHOLIC他	9/17～19	2016
169	ULTRA JAPAN	東京	TOKYO ODAIBA ULTRA PARK	9/17～19	2014
170	響フェス	東京	TSUTAYA O-EAST	9/18	2014
171	GREAT TAMA RIVER FESTIVAL	東京	おおば村キャンプ場	10/1	2013
172	KITAZAWA TYPHOON	東京	下北沢SHELTER他	10/15～16	2013
173	高円寺フェス	東京	高円寺北口広場等	10/29～30	2007
174	カホンの祭典 HAKO FES	東京	渋谷区 duo MUSIC EXCHANGE	12/3	2013
175	音流大演会	東京	LIQUIDROOM	3/21	2016
176	道玄坂異種格闘技祭 ～STARMAKER～	東京	La.mama他	3/26	2014
177	i-STAR FESTIVAL	東京	TSUTAYA O-East他	3/28	2016
178	ZIP!春フェス	東京	東京ドームシティホール	3/29～31	2013
179	KNOCK OUT FES	東京	MOSAIC他	4/2	2015
180	Spring Love 春風	東京	代々木公園	4/2～3	1998
181	Scramble Fes	東京	TSUTAYA O-WEST	11/5	2015
182	FOREVER YOUNG BIG	東京	上野恩賜公園野外ステージ	4/23	2016
183	SYNCHRONICITY	東京	TSUTAYA O-WEST他	4/24	2005
184	HUG ROCK FESTIVAL	東京	CHELSEA HOTEL他	12/15	2015
185	PACHA FESTIVAL TOKYO	東京	晴海客船ターミナル	5/3	2016
186	TOKYO M.A.P.S	東京	六本木ヒルズアリーナ	5/4～5	2008
187	WORLDWIDE SESSION	東京	新木場Studio Coast	5/4	2016
188	KIDS DAY in サンリオピューロランド	東京	サンリオピューロランド	5/5	2016
189	カオスフェス	東京	豊洲PIT	5/7～8	2013
190	Lotus music cafe	東京	上野恩賜公園野外ステージ	5/8	2016
191	ガールズトークフェスティバル	東京	渋谷チェルシーホテル他	5/8	2016
192	SUMMER CAMP	東京	お台場野外特設会場	5/14	2000
193	人間交差点	東京	お台場野外特設会場	5/15	2015
194	武蔵野音楽祭 連の音カーニバル	東京	RockjointGB 他	5/21	2015
195	PROGRESSIVE ROCK FES	東京	日比谷野外大音楽堂	5/22	2010
196	OTO-NANO FES!	東京	Zepp DiverCity TOKYO	5/23	2013
197	アウトドアリゾートパーク	東京	新宿区 明治神宮外苑	5/28～29	2013

No.	名称	開催地	開催場所	2016年 開催日程	開始年
198	SCREAM OUT FEST	東京	新木場STUDIOCOAST	6/5	2010
199	暁ロックフェス	東京	TSUTAYA O-EAST	6/25	2015
200	OCEAN PEOPLES	東京	代々木公園イベント広場	7/9～10	2012
201	YABITO	東京	日の出町 おおば村キャンプ場	7/16～17	2015
202	SOUL POWER TOKYO SUMMIT	東京	東京国際フォーラム	7/16～17	2006
203	ETERNAL ROCK CITY	東京	TSUTAYA O-EAST等	開催なし	2010
204	CONNECT 歌舞伎町 MUSIC FESTIVAL	東京	新宿 LOFT等	開催なし	2014
205	情熱大陸 SPECIAL LIVE SUMMER TIME BONANZA	東京／大阪	夢の島公園陸上競技場	8/27	2002
206	908 FESTIVAL	東京／大阪	大阪フェスティバルホール・日本武道館	大阪: 8/20 東京: 9/3	2012
207	METROPOLITAN ROCK FESTIVAL	東京／大阪	江東区新木場 若洲公園	大阪: 5/14～15 東京: 5/21～22	2013
208	SOTETSU LOCK ON MUSIC	神奈川	さがみ野相鉄ライフ内広場等	11/12～13	2013
209	ひかり祭り	神奈川	相模原市緑区 旧牧郷小学校	開催なし	2003
210	BAYCAMP	神奈川	川崎市東扇島東公園・特設会場	9/2～3	2011
211	夏クル	神奈川	象の鼻桟橋	8/5～21	2012
212	DEAD POP FESTIVAL	神奈川	神奈川県川崎市東扇島東公園	7/9～10	2010
213	小田原イズム	神奈川	小田原アリーナ	9/24	2004
214	CHAIN THE ROCK FESTIVAL	神奈川	高田馬場CLUB PHASE/川崎CLUB CITTA'	高田馬場: 8/5～7 川崎: 8/26～28	2008
215	おひらき祭	神奈川	茅ヶ崎市 柳島キャンプ場	10/16	2011
216	きたかまフェス	神奈川	浄智寺等	5/4	2016
217	GREENROOM FESTIVAL	神奈川	横浜赤レンガ地区野外特設会場	5/21～22	2005
218	勝手にウッドストック	神奈川	神奈川県相模湖畔 みの石滝キャンプ場	9/17～19	2002
219	鎌倉音楽祭 鶴舞	神奈川	鶴岡八幡宮	8/28	2006
220	NIIGATA RAINBOW ROCK	新潟	万代シティ他	5/4	2011
221	豪雪JAM	新潟	新潟県十日町城が丘ビュアランド	2/21	2008
222	いわむロックFESTIVAL	新潟	岩室温泉(観光施設 いわむろや)	9/25	2012
223	FUJI ROCK FESTIVAL	新潟	湯沢町苗場スキー場	7/22～24	1997
224	SPA SONIC GROOVIN' SOUND FES IN TSUKIOKA-SPA	新潟	月岡カリオンパーク	9/4	2014
225	THE LABYRINTH	新潟	苗場グリーンランド	9/17～19	2001
226	TOKI ROCK NIIGATA	新潟	NIIGATA LOTS	6/19	2014
227	三条音楽祭	新潟	三条市中浦ヒメサユリ森林公園	9/11	2009
228	BURNING JAPAN	新潟	フライヤーズパーク	10/8～10	2012
229	MUSIC POTION RED FES	富山	MAIRO他	5/3	2014
230	お寺座LIVE	富山	善巧寺	6/11	2006
231	ホットフィールド	富山	黒部市宮野運動公園	9/17～18	2012
232	BEARTRAM MUSIC FESTIVAL	富山	富山城址公園芝生広場特設ステージ他	10/8～9	2012
233	立山山麓音楽祭	富山	立山山麓スキー場らいちょうバレーエリア	8/20	2008
234	加賀温泉郷フェス	石川	山代温泉 瑠璃光	7/23	2012
235	金沢ー生青春FESTIVAL	石川	金沢市民芸術村	10/2	2014
236	NONSTOP BUS	石川	プラザビル(金沢市片町)	6/25	2012
237	百万石音楽祭～ミリオンロックフェスティバル～	石川	石川県産業展示館	6/4～5	2013
238	OTONOKO	石川	石川県産業展示館	10/2	2016
239	sea of green	福井	麻那姫湖青少年旅行村 中島公園	10/15～16	2002
240	敦賀音楽祭かもめ	福井	きらめきみなと館	5/22	2016
241	ANDLEVIC	福井	WATARIGLASS studio	8/27	2014
242	Natural High!	山梨	山梨県道志の森キャンプ場	5/21～22	2006
243	秘境祭	山梨	山梨県玉川キャンプ村	9/10～11	2007
244	ここにしかないふえす	山梨	山梨県甲州市神すた広場	7/16	2016
245	mammoth pow-wow music&camp festival	山梨	PICA富士西湖	5/14～15	2008
246	トーキョースカジャンボリー	山梨	山梨県・山中湖交流プラザ きらら	8/6	2009
247	Heritage Music Festival	山梨	河口湖円形ホール	9/3	1999
248	SAWAGI FESTIVAL	山梨	山中湖無岳荘キャンプ場	9/10～11	2015
249	Augusta Camp	山梨	富士急ハイランド コニファーフォレスト	9/17	1999
250	雷音	山梨	山梨県小菅村平山キャンプ場	9/18～9/19	2007
251	GIANT LOOP FES	山梨	神金村神スタ広場	6/11	2014
252	GLOBAL ARK	山梨	玉川キャンプ村	6/4～5	2012
253	CAMP Off-Tune	山梨	マウントピア黒平	10/1～2	2012
254	OTOSATA Rock Festival	長野	茅野市民会館	6/25～26	2013
255	りんご音楽祭	長野	松本市アルプス公園	9/24～25	2009
256	音楽温泉	長野	長野県渋温泉 歴史の宿・金具屋	12/10～11	2009
257	SNOW MONKEY BEER LIVE	長野	志賀高 総合会館98ホール	3/19～20	2012
258	rural	長野	湯の丸高原	7/15～18	2011
259	TAIGOCUB	長野	木祖村 こだまの森	6/4～5	2006
260	焼肉ロックフェス	長野	飯田文化会館	9/18	2015
261	NOBEROCK	長野	長野県南佐久郡南牧村野辺山 滝沢牧場近く	9/24	2014
262	Happy Farm Music Festival	長野	長野 山田牧場	7/9～10	2012
263	OUR FAVORITE THINGS	岐阜	岐阜・各務原 河川環境楽園	7/10	2009

No.	名称	開催地	開催場所	2016年 開催日程	開始年
264	OTONOTANI	岐阜	揖斐高原貝月リゾート	10/1～2	2004
265	中津川 THE SOLAR BUDOKAN	岐阜	岐阜県中津川公園内特設ステージ	9/10～11	2012
266	揖斐川ワンダーピクニック	岐阜	揖斐川町市街地及び播磨山麓	5/29	2015
267	RAINBOW CHILD 2020	岐阜	岐阜県八百津町蘇水公園	8/11	2014
268	THE EARTH CAMP	岐阜	outdoor style AMIDA	10/1～2	2010
269	OOPARTS	岐阜	岐阜CLUB-G	10/22	2013
270	朝霧JAM	静岡	富士宮市 朝霧アリーナ	10/8～9	2001
271	マグロック	静岡	清水マリンパーク内イベント広場	10/2	2015
272	フジソニック	静岡	清水マリンパーク	10/1	2015
273	FreeShelter	静岡	ハートランド朝霧 中島酪農場	7/16～17	2011
274	青空Camp	静岡／福島	ハートランド朝霧 中島酪農場／天神浜オートキャンプ場	5/14～15	2012
275	ACO CHILL	静岡	御殿場市 富士山樹空の森	5/14～15	2015
276	頂-ITADAKI-	静岡	静岡 吉田公園特設ステージ	6/4～5	2008
277	伊豆稲取 衆木祭	静岡	東伊豆町クロスカントリーコース芝生広場	9/24	2012
278	WOOLY CARNIVAL	静岡	清水SOUND SHOWER ark	2/14	2014
279	RAINBOW DISCO CLUB	静岡	東伊豆クロスカントリーコース特設ステージ	4/29～5/1	2010
280	KAWANE夏祭り@BIGNATURE	静岡	静岡県島田市川根町家山天王山公園野外ステージ	7/31	2002
281	GO OUT CAMP	静岡／福島 ／京都	静岡：ふもとつばら 福島：天神浜オートキャンプ場 京都：スチールの森京都	静岡：9/30～10/2 福島：6/3～5 京都：11/4～6	2008
282	GO OUT JAMBOREE	静岡	ふもとつばら	4/16～17	2012
283	IMAIKE GO NOW	愛知	BOTTOM LINE他	3/26	2015
284	森、道、市場	愛知	愛知県蒲郡市ラグーナビーチ(大塚海浜緑地)	5/13～15	2011
285	SAKAE SP-RING	愛知	NAGOYA CLUB QUATTRO他	6/4～5	2006
286	TOYOTA ROCK FESTIVAL	愛知	愛知県豊田市トヨタスタジアム外周	10/8～9	2007
287	ミソフェス	愛知	DIAMOND HALL他	10/10	2014
288	FREEDOM NAGOYA	愛知	愛知県大高緑地特設ステージ	6/25	2010
289	でらロックフェスティバル(元 GRANDLINE)	愛知	DIAMONDHALL 他	2/6～7	2011
290	YON FES	愛知	モリコロパーク(愛・地球博記念公園)	4/2～3	2016
291	リゾムライブラリー	愛知	岡崎市図書館交流プラザ Libra	5/1	2012
292	メーテレ KAZOKU FES.	愛知	ラグーナ蒲郡 ラグーナビーチ	5/28～29	2010
293	TREASURE05X	愛知	蒲郡ラグーナビーチ他	8/7,13,14,20,21,22～9/	2004
294	the Last resort	愛知	愛知県常滑市 りんくうビーチ	9/17	2015
295	Vijuttokel! Festtoko!!	愛知	DIAMOND HALL他	10/28	2014
296	金のりんご	愛知	CLUB MAGO / Live & Lounge Vio	3/4	2014
297	少年少女秘密基地FESTIVAL	愛知	DIAMOND HALL他	4/24	2015
298	DIRECT -SAKAE REGGAE FES-	愛知	久屋大通公園内 久屋広場特設会場	5/21～22	2015
299	橋の下世界音楽祭	愛知	豊田大橋 橋の下 千石公園	5/27～29	2012
300	篠島フェス	愛知	サンサンビーチ他	7/17～18	2014
301	SOUND GARDEN KOUROGI	愛知	愛知県口輪義運動公園 野球場内特設ステージ	7/31	2016
302	MERRY ROCK PARADE	愛知	ポートメッセなごや	12/24～25	2014
303	安島サントウワリツ	三重	ドレミファというは	10/9	2015
304	ドラゴンフェスティバル	三重	ナガシマスパーランド芝生広場	7/16	2016
305	WIRED MUSIC FESTIVAL	三重	ナガシマスパーランド駐車場特設会場	5/22	2015
306	TOKAI SUMMIT	三重	ナガシマスパーランド芝生広場・野外特設ステージ	7/30～31	2007
307	イナズマロックフェス	滋賀	滋賀県草津市 烏丸半島芝生公園	9/17～18	2009
308	EAT THE ROCK-竜王音楽祭-	滋賀	総合運動公園内ドラゴンハット	8/6	2012
309	山水人	滋賀	滋賀県高島市朽木生杉・エコピア山水人	8/20～29	2005
310	SAVE THE BIRTHDAY -CHARITY MUSIC FESTIVAL-	滋賀	彦根市 荒神山公園運動施設 野外特設ステージ	8/28	2010
311	伊吹の天窓	滋賀	奥伊吹スキー場	9/3	2011
312	MOTHER LAKE JAZZ FESTIVAL	滋賀	滋賀県大津市大津港特設ステージ	7/30	2015
313	いつまでも世界は	京都	KYOTO MUSE他	5/29	2012
314	Rainbow's End	京都	京都円山公園音楽堂	5/22	2013
315	長岡京ソングライン	京都	京都・長岡天満宮内野外特設会場	開催なし	2008
316	ボロフェスタ	京都	京都KBSホール&METRO	10/28～30	2002
317	スキマアワー「学校で、教わらなかった音楽」	京都	京都精華大学 アゴラホール・水上ステージ	8/6	2011
318	京都音楽博覧会	京都	梅小路公園	9/18	2007
319	THE STAR FESTIVAL	京都	スチールの森京都	5/21～22	2012
320	京都大作戦	京都	京都府立山城総合運動公園 太陽が丘特設野外ステージ	7/2～3	2007
321	西院ミュージックフェス	京都	春日神社他	8/6～7	2002
322	OKAZAKI LOOPS	京都	ロームシアター京都	9/2～4	2016
323	一条寺the Day of Pleasure	京都	AKOSHAN他	12/20	2015
324	京音-KYOTO-	京都	磯原他	2/27～28	2016
325	大宮グッドフェスティバル	京都	阪急大宮駅周辺	5/4	2013
326	GreatLuckFES	京都	STHILの森 京都	5/28～29	2013
327	The Day of Piano	京都	AKOSHAN他	10/30	2015
328	KYOTO NIPPON FESTIVAL	京都	北野天満宮等	12/3～4	2016
329	MUSIC CIRCUS	大阪	大阪泉南・タルイザンビーチ	10/8～9	2014
330	こんがりおんがく祭	大阪	大阪城野外音楽堂	5/7	2014

No.	名称	開催地	開催場所	2016年 開催日程	開始年
331	宇宙フェス	大阪	大阪・服部緑地野外音楽堂	7/16	2013
332	見放題	大阪	BIGCAT他	7/2	2008
333	RUSH BALL	大阪	泉大津フェニックス	8/27～28	1999
334	ミナミホイール	大阪	BIGCAT他	10/8～10	1999
335	ツキノウタゲ	大阪	服部緑地野外音楽堂	開催なし	2009
336	OTODAMA～音泉魂～	大阪	大阪・泉大津フェニックス	9/3	2005
337	MAWA LOOP	大阪	SUNHALL他	11/27	2015
338	MIKROCK	大阪	堺市役所前広場	5/4～5	2015
339	FAT CAMP～限界を肥えろ!!～	大阪	荒滝キャンプ場	4/16～17	2016
340	茨木音楽祭	大阪	茨木市中央公園他	5/5	2009
341	MUSIC CIRCUS	大阪	大阪泉南・タルイザンビーチ	10/8～9	2014
342	SAKAI MEETING	大阪	堺市海とのふれあい広場特設会場	5/21	2013
343	Net Generation	大阪	大阪城音楽堂	8/6	2016
344	MORNING RIVER SUMMIT	大阪	大阪城音楽堂	8/11	2008
345	AMEMURA RING CIRCUIT	大阪	LIVE HOUSE BRONZE他	8/13	2014
346	MEGA VEGAS	大阪	舞洲サマーソニック大阪特設会場	8/19	2016
347	VOYSONIC	大阪	CLAPPER他	8/20	2012
348	SOUND SHOCK	大阪	クリエイティブセンター大阪	8/25	2009
349	BIKINI FES	大阪	大阪舞洲スポーツアイランド	8/27～28	2016
350	OSAKA HAZIKETEMAZARE FESTIVAL	大阪	大阪泉大津フェニックス	9/10～11	2010
351	KANSAI LOVERS	大阪	大阪城野外音楽堂	9/17～18	2008
352	茨木麦音フェスト	大阪	茨木市中央公園南グラウンド	9/18～19	2012
353	AKIFES	大阪	梅田amHALL他	9/22	2015
354	服部緑地RAINBOHILL	大阪	服部緑地野外音楽堂	9/24～9/25	2005
355	命の渚コンサート	大阪	服部緑地野外音楽堂	10/2	2014
356	ザ・たこさんの無限大記念日	大阪	Zepp なんば大阪	10/9	2013
357	SINGER SONG WRITERS	大阪	大阪城野外音楽堂	10/29～30	2014
358	OTOEMON FESTA	大阪	LIVE SQUARE 2nd LINE	3/18～21	2014
359	RADIO CRAZY	大阪	インテックス大阪	12/27～28	2009
360	OUTDOOR PARK	大阪	万博記念公園自然文化園東の広場	4/23～24	2015
361	REQUESTAGE	大阪	大阪城ホール	4/29	2002
362	Rockin' Radio-OSAKAJOH YAON-	大阪	大阪城音楽堂	5/15	2013
363	CRAFT BEER LIVE	大阪	湊町リバープレイス Plaza3 オープンスペース	5/28～29	2010
364	アメ村天国	大阪	FANJ twice	11/12	2016
365	COMIN' KOBE(元 GOING KOBE)	兵庫	神戸ワールド記念ホール、神戸国際展示場	5/7	2005
366	NEKOFES くだけねこロックフェスティバル	兵庫	CHICKENGEORGE他	6/26	2013
367	ONE Music Camp	兵庫	三田アスレチック野外ステージ	8/20	2010
368	港町ポリフォニー	兵庫	KITTO(デザイン・クリエイティブセンター神戸)	9/4	2013
369	姫路サウンドトボロジ	兵庫	イーグレひめじアートホール他	10/9	2015
370	ROKKO SUN MUSIC	兵庫	六甲山カンツリーハウス内特設会場	7/2～3	2007
371	種まきまきまき神戸	兵庫	BACKBEAT他	11/3	2011
372	ブタフェス～NAMAKEBUTA METABOLICK ROCK FESTIVAL～	兵庫	神戸太陽と虎他	11/23	2013
373	神戸ストラット	兵庫	舞子公園	9/22	2015
374	神戸新聞地音楽祭	兵庫	湊川公園他	5/7～8	2001
375	愛と感動とロマンの音楽祭(元 On Time Kobe)	兵庫	Kobe SLOPE他	8/21	2011
376	ITAMI GREENJAM	兵庫	伊丹 昆陽池公園	中止	2014
377	トアロード・アコースティック・フェスティバル	兵庫	VARIT 等	4/17	2014
378	NISHINOMIYA EVIS ROCK FESTIVAL	兵庫	西宮市民会館アミティホール	10/29	2015
379	あそっか!フェス	兵庫	社会福祉法人明照会 特別養護老人ホームあそか苑	11/3	2016
380	AMAFES	兵庫	尼崎の森中央緑地	11/13	2011
381	西宮ソニック	兵庫	西宮市フレンテホール	12/17	2016
382	なら音	奈良	奈良キバーランド他	8/6～7	2007
383	Sky&green-大和reggae祭-	奈良	奈良信貴山のどか村	8/14	2014
384	KISHU ROCK IMPACT	和歌山	和歌山マリーナシティ	開催なし	2010
385	鳥 ROCK FESTIVAL	鳥取	クラフト館岩井窯	開催なし	2015
386	SHELTER	鳥取	皆生海浜公園特設ステージ	7/18	2008
387	SUN LIFE	鳥取	小沢見海水浴場	7/30～31	2010
388	たぬき音楽祭	島根	来待ストーン野外特設ステージ	開催なし	2013
389	BURST MAX	島根	立久恵峠わかあゆの里	9/18	2007
390	hoshioto	岡山	岡山県井原市美星町星空感特設ステージ	5/28	2012
391	マチノブンカサイ	岡山	旧内山下小学校	9/24	2012
392	STARS ON	岡山	中世夢が原	10/9	2009
393	牛窓ナチュラルキャンプ	岡山	岡山県瀬戸内市牛窓 黒島	9/17～19	2010
394	であれ～祭	岡山	旧内山下小学校	開催なし	2014
395	XXXX THE JAMBOREE	岡山	犬島公園犬島キャンプ場	開催なし	2005
396	machioto	岡山	岡山CRAZYMAMA KINGDOM他	2/7	2014
397	MUSIC CUBE	広島	広島クラブクワトロ他	3/19～20	2009
398	JOKA FES	広島	福山Cable他	9/11	2014

No.	名称	開催地	開催場所	2016年 開催日程	開始年
399	GREEN GREEN MUSIC FESTIVAL	広島	光信寺	7/3	2007
400	Music Resort うたたね	広島	みろくの里 ツネインフィールド特設ステージ	9/3	2014
401	RIVER GROOVE- 芦田川音楽祭-	広島	芦田川河川敷大渡橋下広場ちゃぶちやぶランド	10/2	2008
402	MUSICAL RUSH	広島	呉ポートピアパーク	9/11	2016
403	風のまつり	山口	羅漢高原キャンプ場	7/28～31	1998
404	WILDBUNCH FEST	山口	山口きらきら博記念公園	8/20～21	2013
405	VALETUDO	徳島	徳島市小松海岸特設ステージ	開催なし	2002
406	EOKAME PROJECT 山崎まさよし+西しんじwith friend	徳島	海陽町まぜのおかオートキャンプ場	10/29～30	2010
407	WORLD EXOTICA	徳島	Amusement Bar fly	開催なし	2007
408	DRAGON FACTORY FESTIVAL	徳島	徳島県文化の森総合公園野外劇場	開催なし	2007
409	廃校グルーヴ	香川	香川県高松市塩江町上西甲77番地 モモの広場	開催なし	2015
410	風が吹いてきたよ	香川	小豆島・肥土山農村歌舞伎舞台	開催なし	2015
411	鳥フェス	香川	小豆島ふるさと村	8/27～28	2011
412	直島アゲイン！	香川	直島 宮浦港海の駅 芝生広場	10/29	2010
413	SANUKI ROCK COLOSSEUM	香川	高松オリーブホール他	3/20～21	2010
414	MONSTER baSH	香川	香川県・国営讃岐まんのう公園	8/20～21	2000
415	ハズミズム	愛媛	愛知県今治市 市民の森・野外ステージ	9/18	2013
416	Shima Jam	愛媛	大三島 宮浦港特設ステージ(いまばり・みやうら海の駅)	10/16	2014
417	SUN BURST	愛媛	愛媛・四国中央市 寒川豊岡海浜ふれあいビーチ	休止	2012
418	ライブ・アースまつやま	愛媛	城山公園	2016/5/15	2008
419	STONE HAMMER fes	愛媛	西条市西条運動公園	7/24	2014
420	SKY SPRIT	愛媛	八幡浜みなと 芝生広場	8/11	2016
421	愛媛無双	愛媛	WStudioRED	10/29	2016
422	KAJIGAMORI ROCK FESTIVAL	高知	高知県立自然公園 梶ヶ森キャンプ場 山荘梶ヶ森	開催なし	2014
423	FX	福岡	Zepp Fukuoka	3/19～20	2007
424	CIRCLE	福岡	福岡・海の中道海浜公園 野外劇場	5/14～15	2007
425	勝手にニューポート	福岡	グリーンピアながかわ	開催なし	2006
426	TENJIN ONTAQ	福岡	LIVE HOUSE CB	3/12～13	2015
427	TRIANGLE	福岡	福岡シーサイドもちも海浜公園地行浜ビーチ内特設ステージ	8/27～28	2001
428	GOTTAN JAM	福岡	嘉穂劇場	10/30	2013
429	宗像フェス～World Heritage Munakata～	福岡	福岡県宗像市神湊海水浴場(釣川河口左岸)特設野外ステージ	8/28	2014
430	NUMBER SHOT	福岡	海の中道海浜公園野外劇場	7/23～24	2014
431	GLASSY MUSIC	福岡	博多埠頭緑地サンセットパーク	5/28～29	2015
432	AIR JAM	福岡	福岡ヤフオク！ドーム	12/23	1997
433	SAGAN MUSIC FESTIVAL	佐賀	佐賀駅南口特設ステージ	11/3～5	2013
434	Sky Jamboree	長崎	長崎市稲佐山公園野外ステージ	8/21	1999
435	BLAZE UP NAGASAKI	長崎	長崎市神の島公園特設ステージ	10/2	2011
436	Lovefes	長崎	水辺の森公園一帯	10/22～23	2011
437	TSUSHIMA BORDER ISLAND FES	長崎	浅茅シーサイドパーク	10/15	2016
438	ハウステンボスミュージックフェス	長崎	ハウステンボス	6/11	2016
439	HAPPY JACK	熊本	熊本B.9他	3/18～19	2012
440	阿蘇ロックフェスティバル	熊本	南阿蘇村 野外劇場アスペクタ	中止	2015
441	寺フェス in 熊本県本妙寺	熊本	本妙寺等	10/18	2012
442	BONCHI SOUND PHENOMENON	大分	大分県日田市三隈川公園	10/30	2010
443	PIRATE SHIP	大分	大分T.O.P.S Bitts HALL	7/29～31	2012
444	GREEN&MUSIC CROSSOVER 8M～音波～OTONAMI	大分	八面山野外音楽堂	10/8	2014
445	希望と太陽のロックフェス	宮崎	こどものくに海隣特設ステージ	9/11	2012
446	GOOD NEIGHBORS JAMBOREE	鹿児島	かわなべ森の学校	8/20	2010
447	WALK INN FES!	鹿児島	桜島多目的広場野外ステージ	5/21～22	2014
448	残波JAM	沖縄	屋我地島 済井出ソルトビーチ	開催なし	2011
449	What a Wonderful World!!	沖縄	沖縄県 豊見城市 豊崎 美らSUNビーチ 特設会場	11/5～6	2009
450	TsunDAMI ISLAND FESTIVAL	沖縄	石垣市 南ぬ浜町特設会場	開催なし	2014
451	宮古島ミュージックコンベンション	沖縄	宮古島トウリバービーチ特設会場	5/27～29	2005
452	Tropical Lovers Beach Festa	沖縄	石垣市 フサキリゾートヴィレッジ内	6/11	2008
453	Sakurazaka ASYLUM	沖縄	桜坂劇場他	2/15～16	2007
454	GUSUKU ROCK FES	沖縄	中城城跡	開催なし	2015
455	MIYAKO ISLAND ROCK FESTIVAL	沖縄	宮古島コースタルリゾートヒララトウリバー地区ヘッドランド特設会場	6/18	2005